

KH667-H71



\*1200701566842\*

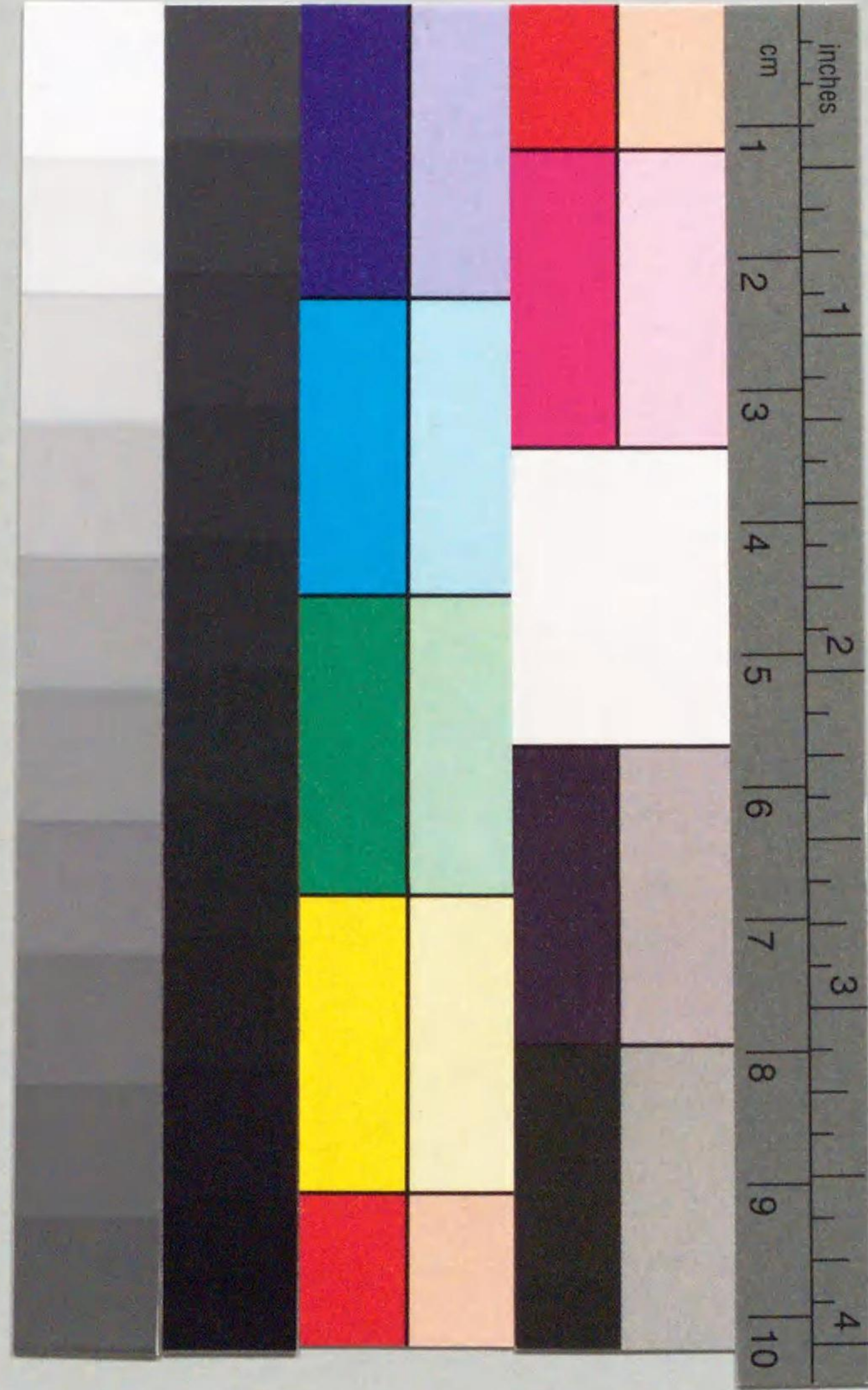
庫文說

爬蟲館事件

海野三十



春陽堂



庫文說小本日

—266—

爬蟲館事件

海野三十

春陽堂

爬蟲館事件

KH667

H71



I 種

W



\*1200701566842\*

目次

爬蟲館事件……………三  
 間諜座事件……………三九  
 ネオン横丁殺人事件……………六三  
 白蛇の死……………八九  
 人造人間失踪事件……………一一一  
 ラヂオ殺人事件……………一四一  
 裏返しのロボット……………一七六  
 七墓團のバトン……………二八四

爬蟲館事件

1

前夜の調べ物の疲れで、もう少し寝てみたいところを起された私立探偵局の帆村莊六だつた。

『お越し下さつたのは、どんな方かね。』

『ご婦人です。』助手の須永が朗らかさを強ひて隠すやうな調子で答へた。『しかも年齢の頃は廿歳ぐらゐの方です。』

(なにが、しかもだ。)と帆村はバヂヤマの釘を一つ一つ外しながら思った。この手でも確かに目は醒る。……

『十分間お待ちねがふやうに申上げて呉れ。』

『はッ。畏まりました。』

須永はチヨコレートの兵隊のやうに、わざと四角ばつて、帆村の寢室を出ていつた。

隣の浴室の扉をあけ、クルクルと身體につけたものを一枚残らず脱ぎすてると、冷水を張つた浴槽

へドブンと飛び込み、しぶきをあげて水中を潜りぬけたり、手足をウンと伸ばしたり、なんのことはない臘肭獸のやうな真似をすること三分、ブル／＼と飛び上つて強い髭をすつかり剃り落すのに四分、一分で口と顔を洗ひ、あとの二分で身體を拭ひ失禮ならざる程度の洋服を着て、さて應接室の内扉をノックした。

應接室の函のなかには、なるほど若い婦人が入つてゐた。

『お待ちせしました。さあどうぞ。』と椅子を進めてから、『早速ご用件を承りませう。』

『はア有難う存じます。』婦人は帆村の切り出し方の餘りに早いのにちよつと狼狽の色を見せたが、思ひきつたといふ風で、黒眼がちの大きい瞳を帆村の方に向け直した。その瞳の底には言ひしれぬ憂ひの色が沈んでゐるやうであつた。『ではお話を申しあげますが、實は父が、突然行方不明になつてしまつたんでございます。』昨日の夕刊にも出たのでございますが、あたくしの父といふのは、動物園の園長をして居ります河内武太夫でございます。』

『ああ、貴女が河内園長のお嬢さんのトシ子さんでいらつしやいますか。』帆村は夕刊で、憂ひに沈む園長の家族として令嬢トシ子（二〇）の寫眞を見た記憶があつた。その記事は社會面に三段抜きで「河内園長の奇怪な失踪・動物園内に遺留された帽子と上衣」といつたやうな標題がついてゐたやうに思ふ。

『はア、トシ子でございます。』と美しい眼をしばたたき、『ご存知でもございませうが、私共の家は動物園の直ぐ隣の杜の中にございまして、その失踪しました十月三十日の朝八時半に父はいつものやうに

出て行つたのです。午前中は父の姿を見たといふ園の方も多いのでございますが、午後からは見たといふ方が殆んどありません。お午餐のお辨當を、あたくしが持つて行きましたが、それはたうとう父の口に入らなかつたのでした。正午にも事務所へ歸つてこないことを皆様不思議に思つていらつしやいましたが、父は大分變り者の方でございます。氣が變るとよく一人でブラリと園を出まして、廣小路の方まで行つて壽司屋だのおでん屋などに飛び込み、一時半も二時もになつてヒョククリ歸園いたしますこともございますので、その日も多分いつもの傳だらうと、皆さん考へておいでになつたのです。しかし閉園時間の午後五時になつても歸つて参りません。適にはずつと街へ出掛けて夜分まで歸らないこともあります。その日は事務室に帽子もあり上衣も残つて居ますので、いつもとは少し違ふといふので、西郷さん——この方は副園長をしていらつしやる若い理學士です——その西郷さんがお歸りにうちへお寄り下すつて「園長の例の病氣が始つた様ですよ。」と注意をしていつて下さいました。ところが其の夜は、たうとう歸つて参りません。夜遅くなることはありません。たとひ一時になつても二時になつても歸つてくる父です。それが歸つて來ないのですからどうしたことだらうと母も私共も非常に心配してゐます。園内も調べていただきましたが判りません。警察の方へも捜索方をお願いいたしましたが一別に死ぬ動機も無いやうだから今夜あたり歸つて來られますよ。」と云つて下さいました。しかし私共は、なんだか其の儘では、ちつと待つてゐられないほど不安なのでございます。萬一父が危害を加へられてでもゐるやうですと、一刻も早く見付けて助け出したいのでございます。それで母と相談をして、お力を

拜借に上つたわけなのでございます。どう思召しませうか、父の生死のほどは。」

トシ子嬢は語り終ると、ほんのり紅潮した顔をあげて、帆村の判定を待った。

「さあ——」と帆村は癖で右手で長くもない顎の先をつまんだ。「どうもそれだけでは、河内園長の生死について判断はいたしかねますが、お望みとあらば、もう少し貴女様からも伺ひ、その上で他の方面も調べて見たいと思ひます。」

「お引受け下さつて、どうも有難う存じます。」トシ子嬢はホツと溜息をついた。「何なりとお尋ねくださいまし。」

「動物園では大いに騒いで探したやうですか。」

「それはもう丁寧に探して下さつたさうでございます。今朝、園にゆきまして、副園長の西郷さんにお目に懸りましたときのお話でも、念のためと云ふので行方不明になつた三十日の閉門後、手分けして園内を一通り調べて下さつたさうです。今朝も、また更に繰返して探して下さるさうです。」

「なるほど。」帆村は頷いた。「西郷さんは驚いてゐましたか。」

「はア、今朝なんかは、非常に心配して居て下さいました。」

「西郷さんのお家とご家庭は？」

6 「淺草の今戸です。まだお獨身で、下宿していらつしやいます。しかし西郷さんは、立派な方でございますよ。假りにも疑ふやうなことを云つて戴きますと、あたくしお恨み申し上げますわ。」

「いえ、そんなことを唯今考へてゐるわけではありません。」

帆村は今時珍らしい、日本趣味の女性に敬意と當惑とを捧げた。

「それから、園長はときどき夜中の一時や二時にお歸宅のことがあるさうですが、それまでどこで過していらつしやるのですか。」

「さアそれは私もよく存じませんが、母の話によりますと、古いお友達を訪ねて一緒にお酒を呑んで廻るのださうです。それが父の唯一の道樂でもあり楽しみなんですが、それといふのもそのお友達は、日露戦役に生き残つた戦友で、逢へばその當時のことが思ひ出されて、ちよつとやそつとでは別れられなくなるんだといふことです。」

「すると園長は日露戦役に出征されたのですね。」

「は、沙河の大會戦で身に數弾をうけ、それから内地へ送還されましたが、それまでは勇敢に闘ひましたさうです。」

「では金鷄勳章組ですね。」

「ええ、功六級の曹長でございます。應へながらも、こんなことが父の失踪に何の關係があるのかと、トシ子は探偵の頭腦に稍失望を感じないわけにゆかなかつた。

しかし最後へ来て、この些細らしくみえるのが、事件解決の一つの鍵とならうとは二人もこの時は夢想だもしなかつた。

「園長はそんなとき、帽子も上衣も着ないで自宅にも云はず、ブラリと出掛けるのですか。」  
 「そんなことは先づございませぬ。自宅に云はなくとも、帽子や上衣は暖いときならば兎に角、もう十一月の聲を聞き、どつちかと云へば、オーヴァーが欲しい時節です。帽子や洋服は着てゆくだらうと思ひますの。」

「その上衣はどこにありますか。鳥渡拜見したいのですが……。」

「上衣はうちにございますから、どうかいらしつて下さい。」

「ではこれから直ぐに伺ひませう。みちみち古い戦友のことも、もつと話して戴かうと思ひます。」

「ああ、半崎甲平さんのことですか？」トシ子嬢は、父の戦友の名前を初めて口にしたのだつた。

2

園長邸を訪ねた帆村は心痛してゐる夫人を慰め、遺留の上衣を丹念に調べてから何か手帳に書き止めると、外に園長の寫眞を一葉借り、園長の指紋を一通り探し出した上で地續きの動物園の裏門を潜つたのだつた。

西郷といふ副園長は、すぐ帆村に會つてくれた。あの西郷隆盛の銅像ほど肥えてゐる人ではなかつたが、随分と身體の大きい人だつた。

「園長さんが失踪されたさうで御心配でせう。」

と帆村は挨拶をした。「一體いつ頃お氣がつかれたのですか。」

「全く困つたことになりましたよ。」巨漢の理學士は顔を曇らせて云つた。「いつ氣がついたといふことはありませんが、不審をいただいたのは、あの日の正午過でせう。園長が一向食事に歸つてこられませんか。でね。」

「園長は午前中なにをしてゐられたのです。」

「八時半に出勤せられると、直ぐに園内を一巡せられますが、先づ一時間懸ります。それから十一時前ぐらゐる迄は事務を執つて、それから再び園内を廻られますが、そのときは何處といふことなしに、朝のうちに氣がつかれた檻へ行つて、動物の面倒をこらんにあります。失踪されたあの日も、このプログラムに別に大した變化は無かつたやうです。」

「その日は、どの動物の面倒を見られるか、それについてお話はありませんでしたか。」

「ありませんでしたね。」

「園長を最後に見たといふ人は、誰でした。」

「さあ、それは先刻警察の方が來られて調べてゆかれたので、私も聞いてゐましたが、一人は爬蟲館の研究員の鴨田兎三夫といふ理學士醫學士、もう一人は小禽暖室の畜養主任の椋島二郎といふ者、この二人です。ところが兩人が園長を見掛けたといふ時刻が、殆んど同じことで、いづれも十一時廿分頃だといふのです。どつちも、園長は入つて來られて二三分、注意を與へて行かれたさうですが、其儘出てゆ

かれたさうです。』

『その爬蟲館と小禽暖室との距離は？』

『あとで御案内いたしますが、二十間ほど距つた隣り同志です。もつとも其の間に挟つてずつと奥に引込んだところに、調理室といふ建物がありますが、これは動物に與へる食物を調理したり藏つて置いたりするところなんです。鳥渡圖面を描いてみますと、こんな工合です。』

さういつて西郷理學士は、鉛筆をとりあげると、爬蟲館附近の見取圖を描いてみせた。

『この二十間の空地には何もありませんか。』

『いえ、桐の木が十二本ほど植つてゐます。』

『その調理室へ園長は顔を出されなかつたんでせうか。』

『今朝の調べのときには、園長は入つて來られなかつたと云つてゐました。』

『それは誰方が云つたんです。』

『畜養員の北外星吉といふ主任です。』

『園長がいよいよ行方不明と判つた前後のことを話していただけませんか。』

10 『よろしうございます。閉園近い時刻になつても園長は歸つて來られませんが。見ると帽子と上衣は其儘で、お自宅から届いたお辨當もそっくり其儘です。黙つて歸るわけにも行きませんので、畜養員と園丁とを總動員して園内の隅から隅まで探させました。私は園丁の比留間といふのを連れて、猛獸の檻を精し

く調べて廻りましたが異狀なしです。』

『素人考へですがね、例へば河馬の居る水槽の底深く死體が隠れてゐないかお調べになりましたか。』

『なる程ご尤もです。』と西郷副園長は頷いた。『さういふ個所は、多少の準備をしなければ調べられませんが、直ぐには参りませんでした。今日の午後には一つ一つ演つてゐるのです。』

『そりや好都合です。』と帆村探偵が叫んだ。『すぐに、私を参加させていただきたいのですが。』

西郷理學士は承諾して、卓上電話機を方々へかけてゐたが、やつこのことで、搜索隊がこれから爬蟲館の方へ移らうといふところだと解つたので、その方へ帆村を案内して呉れることになつた。

白い砂利の上に歩を運んでゆくと、どこからともなく風に落葉が送られ、カサコソと音をたてて轉つていつた。もう十一月になつたのだ。杜蔭に一本鮮かな紅葉が、水のやうに靜かな空氣の中に、なにかしら唸かすやうな熱情を溶かしこんでゐるやうだつた。帆村は、ちよつと辛い質問を決心した。

『園長のお嬢さんは、まだお獨身なんですかねエ。』

『え？』西郷氏は我が耳を疑ふもののやうに聞きかへした。

『お嬢さんはまだ獨身です。探偵さんは、いろんなことが氣に懸るらしいですね。』

『私も若い人間として氣になりますのでね。』

『こりや驚いた。』西郷理學士は大きな身體をくねらせて可笑しがつた。『僕の前でそんなことを云つたつて構ひませんが、鴨田君の前で云はうものなら、蟒を喉しかけられますぜ。』



『鴨田さんていふと、爬蟲館の方ですね。』

『さうです。』と返事をしたが、西郷氏はすこし冗談を云ひすぎたことを後悔した。『ありや學校時代の同級生なので、有名な真面目な男だから、からかつちや駄目ですよ。』

帆村は何も應へなかつたが、先に園長令嬢のトシ子と語つたときのことと、いま西郷副園長が冗談に紛らせて云つたことを併せて頭腦の中で整理してゐた。この上は、鴨田といふ爬蟲館の研究員に會ふことが楽しみとなつた。

『鴨田さんは、主任では無いのですか。』

『主任は病氣で永いこと休んでゐるのです。鴨田君はもともと研究の方ばかりだつたのが、氣の毒にもそんなことで主任の仕事も見てゐますよ。』

『研究といひますと——』

『爬蟲類の大家です。醫學士と理學士との肩書をもつてゐますが、理學の方は近々學位論文を出すことになつてゐるので、間もなく博士でせう。』

『變つた人ですね。』

『いや豪い人ですよ。スマトラに三年も居て蟒と交際ひをしてゐたんです。資産もあるので、あの爬蟲館を建てたとき半分は自分の金を出したんです。今も表に出てゐるニシキヘビは二頭ですが、あの裏手には大きな奴が六七頭も飼つてゐるのです。』

『ほほう。』と帆村は目を圓くした。『その非公開の蛇も調べたんですか。』

『そりや勿論ですよ。研究用のものだからお客さんにこそ見せませんが、調べることは一般と同じに調べますよ。別に園長さんを呑んでゐるやうな贅澤なのは居ませんでした。』

帆村は副園長の保證の言葉を、さう簡単に受入れることはできなかつた。園長を最後に見掛けたといふところが、此の爬蟲館と小禽暖室の邊であつてみれば、入念に調べてみなければならぬと思つた。

『さあ、ここが爬蟲館です。』

副園長の聲に、はつと目をあげると、そこにはいかにも暖室らしい感じのする肉色の丈夫な建物で、魅惑的な祕密を包んで二人の前に突立つてゐた。

扉を押して入ると、ムツと噎せかへるやうな生臭い暖氣が、真正面から帆村の鼻を押へた。

小劇場の舞臺ほどもある廣い檻の中には、頑丈な金網を距てて、とぐろを捲いた二頭のニシキヘビが離れ離れの隅を陣取つてぬくぬくと睡つてゐた。その褐色に黒い斑紋のある胴中は、太いところで深い山中の松の木ほどもあり、こまかい鱗は、粘液で氣味のわるい光澤を放つてゐた。頭は存外ぞんがいに小柄で、眼を探すのに骨が折れたが、やつとのことで彫りこんだやうな黄色い半開きの眼玉を見つけたときには、餘りいゝ氣持はしなかつた。帆村たちの入つて來たのが判つたものか、フ、ツ、フ、ツと、風に吹きつ

けられたやうに身體の一部を波うたせてゐたのだつた。  
こんなのが裏手にはまだ六七頭もゐるんだと思ふと、生來蛇嫌ひな帆村はもうすつかり憂鬱になつてしまつた。

そのとき奥の潜り戸をあけて、副園長の西郷が、やや小柄の、蟒に一呑みにやられてしまひさうな、青白い若紳士を引張つてきた。

『ご紹介します。こちらがこの爬蟲館の鴨田研究員です。』

二人は言葉もなく頭を下げた。

『園長の最後に此の室へ來られたときのことをお伺ひしたいのですが。』

『今朝も大分警視廳の人に苛められましたから、もう平氣で喋れますよ。』と鴨田研究員は前提して『私は時計を見ない癖なのでしてネ、正午のサイレンからして、あれは多分十一時廿分頃だつたらうと思ふのですが、カーキ色の實驗衣を着た園長が入つて來られまして、さうです、二三分間だと思ひますが、この店に出てゐる一頭のニシキヘビの元氣が無いことから、食餌の注意などを云つて下すつて其儘出てゆかれたんです。』

『それは此の室だけへ入つて來られたのですか、それとも。』

14 『今の話は奥でしました。私は別にお送りしませんでしたが、園長は確かにこの潜り戸をぬけて此の室へ入られたやうです。』

『表へ出られた物音でも聞かれましたか。』

『いえ、別に氣に止めてゐなかつたものですから。』

『なにか様子に變つたことでもありましたでせうか。』

『ありません。』

『園長が表へ出られたと思ふ時刻から正午までに、戸外に何か異様な叫び聲でもしませんでしたか。』

『さうですね。裏の調餌室へトラックが到着して、何だかガタガタと、動物の餌を運びこんでゐたやうですがね、その位です。』

『ほ、う。帆村は眼を見張つた。』それは何時頃です。』

『さあ、園長が出てゆかれて十五分かそこらですかね。』

『すると十一時卅五分前後ですね。動物の食ふものといふと、随分嵩張つたものでせうね。』

『それア相當なもんですなア。』と副園長が横合から云つた。

『馬鈴薯、甘藷、胡蘿蔔、雪野菜、麩、藁、生草、それから食パンだとか、牛乳、兎、鶏、馬肉、魚類など、トラックに満載されてきますよ。』

『なるほど。帆村は又鴨田の方へ向き直つた。』莫迦げたことをお尋ねいたしますが、この蟒は人間を呑みますか。』

『呑まないとは保證できませんが、あまり人間は襲はない習性です。先刻もそんなことを訊かれました

が、園長を呑んでゐないことは確かですよ。人間を呑むには時間もかかれば呑んでも腹が膨れてゐるの  
で直ぐ判ります。』

帆村は黙つて頷いた。

しかし人間の身體を九つ位にバラ／＼に切斷して、この蟒に一塊づつ喰べさせれば、比較的容易に  
片づくわけだし、腹も著しく膨むこともなからうと考へたので、質問してみようと思つたが、これは  
重大な結果になりさうだから、もつと先で訊くことにした。そしてそれとなく蟒全部の腹の膨れ具合  
を検べてやらうと思つた。

それで裏手の鴨田理學士の研究室を見せて欲しいと云ふと、直ぐ許されて、一同は潜り戸を入つてい  
つた。

其處はいとも奇妙な廣い部屋だつた。豎長の三十坪ほどあらうといふ、ぶちぬきの一室だつたが、  
縦に二等分し、一方には白ペンキを盛んに使つた卓子や書棚や、書類函や、それから手術臺のやうなも  
の、硝子戸の入つた藥品棚、標本棚、外科器械棚などが如何にも贅澤に並び、其他人間が入れさうなタ  
ンクのやうな譯のわからぬ装置が二つも三つも置かれてあつた。窓は上の方に小さく、天井には水銀燈  
をつかつた照明燈が、氣味の悪い青白光を投げかけてゐた。床の一夕所を開けて地下に潜んでゐる園丁  
の一團があつたが、それは話のあつた捜索隊に違ひなかつた。室の一隅には警視廳の正服警官が二人ほ  
どキラ／＼する眼を光らせてゐた。

他の縦半分には頑丈な檻があつて、その中に見るも恐ろしい大ニシキヘビが七頭、死んだやうになつ  
て勝手な場所を占領してゐた。帆村は檻に掴まると。端の蟒から一頭一頭、腹の大きさを見ていつた。  
しかしどうやらどの蛇も思ひあたるやうな大きな腹をしたのは居なかつた。しかしバラ／＼の死體を呑  
んだとして、犯行が三十日の正午近くと假定し今日は二日の午後であるから二日過ぎとすると、この間  
に蟒の腹は目立たぬ程に小さくなつたのではあるまいか。

『鴨田さん。帆村は背後を振返つた。『ニシキヘビには山羊を喰べさせるさうですが、何日位で消化しま  
すか。』

『さうですね。鴨田は揉み手をしながら實直さうな顔を出した。『六貫位はある山羊を呑んだとしまし  
て、先づ三日でせうか。』

それならば十二三貫ある園長を八つか九つの切れにして、九頭の蟒に與へるなら、いままでまる二  
日は過ぎたから、もう程よく融けたところに違ひない。しかし一體誰が殺したか、誰が死體をバラ／＼に  
し、誰が蟒に與へたか。それは一向にハッキリ判つてゐなかつたが、この生白い鴨田研究員の關係し  
てゐることは否めなかつた。

『ああ、西郷君。』さう云つたのは鴨田理學士だつた。『一昨日この爬蟲館の前で拾得したので僕が事務所  
へ届けて置いた萬年筆ね、あれは先刻警官の方が調べられて、園長さんのものだと思つたさうですよ。』  
『ああ、さう。』西郷副園長は簡單に應へたが其の後でチラリと帆村の方に素早い視線を送つた。

帆村は知らぬ風をして、この會話の底に流れる祕密について考へた。館の前で園長の持ち物を拾つたといふことは、場合によつては決して鴨田氏の利益ではなかつた。萬年筆はよく落すものではあるが、そんなに具合よく館の入口に落すものではない。またあの物靜かな園長が落すといふのも可怪しい。鴨田が後に怪まれることを勘定に入れて落して行つたか、さもなくて鴨田が自ら落ちてゐたと偽り届けたものか、どつちかである。始めのやうだと鴨田を陥れようとしてゐるのは誰かといふ問題となり、後のやうだと鴨田は自ら嫌疑をうけようとするもので、そこには容易ならぬ犯罪性を發見することになつて、帆村は鴨田の性格を知るために、室内を隅から隅まで見廻して、何か怪しい物はないかと探し求めた。

『鴨田さんの鞆ですか、これは。』と、帆村は柵の上に載つてゐる黒皮の書類鞆を指した。

『さうです、私のです。』

『随分大きいですね。』

『私は動物のスケッチを入れるので、こんな特製のものぢやないと間に合はないのです。』

『こつちの方に、同じやうな形をした大きなタンクみたいなのが三つも横になつてゐますが、これは何ですか。』

『それは私の學位論文に使つた装置なんです。いまは使つてゐませんので、空も同様です。』

『前は何か入つてゐたのですか。』

『いろいろな目的に使ひますが、へビが風邪をひいたときには、此の中に入れて蒸氣で蒸してやつたりします。』

『それにしては、何だか液體でも入つてゐるさうなタンクですね。』

『ときには湯に入れたりすることもあります。』

『だが、蟻の呼吸ぬけもないし、それに嚴重な錠がかかつてゐますね。』

『これは兎に角論文通過まで、内部を見せたくない装置なんです。』

『論文の標題は？』

『ニシキへビの内分泌腺について——といふのです。』

そこへドヤ／＼と、警官と園丁との一團が鴨田研究員を取巻いた。

『もうこの建物は天井から床下まで調べましたが異状がありませんでした。唯残つてゐるのは、あの三つのタンクですが、お言葉を信用してそのままにして置きます。』

帆村はそれを聞くと飛出してきた。

『待つて下さい。あのタンクは、是非調べて下さい。』

『でも開けられないのですよ。』帆村の見識り越しの警官が云つた。

『そんなことは無い。ね、鴨田さん、開けた方が貴方のためにもいゝですよ。あのタンクだけで、清淨潔白になるのぢやありませんか。』

『いやさう簡單に明けられません。鴨田は強く反對した。』あれを明けると、爬蟲館の室温や湿度が急降して、爬蟲に大危害を加へることになるので、ちよつとでも駄目です。』

『私は大したことはあるまいと思ふのですが、演つてみては？』と帆村は尙も主張した。

『いやさうは行きません。私は園長から相當の責任を持つて爬蟲類を預つてゐるのですから、拒絶する権利があります。尤も他を求めて、どうにも解決の鍵が見つからぬときは開けもしませうが、それにはちよつと準備が入ります。この爬蟲たちを、元居た暖室の方へ移すのですが、それにはあの室を充分なところまで温め、湿度を整へてやらねばならぬのです。』

『弱つたな。』帆村は苦い顔をした。『一體何時間あつたら、別室の準備ができるのです。』

『まア五時間か六時間でせうね。』

『そりや大變だ。ぢや私も暫く考へてみませう。』と帆村は斷乎として云つた。『その間に別の部屋を檢べて來ませう。西郷さん、調餌室といふのを案内して下さい。』

帆村は爬蟲館の外へ出ると、チェリーに火を點けて、うまさうに吸つた。

彼の觀察したところでは、若し鴨田に嫌疑をかけるならば、鴨田は何かの原因で、河内園長を爬蟲館に引摺りこみ、これを殺害して裸體に剝ぐと、手術臺の上でバラ／＼に截斷し、彼が飼育してゐる蟒

に一部分喰はしてしまつたのであらう。眞逆バラ／＼にしたとは氣が付かなかつたので、捜索隊も蟒の腹を見るには見たが、人間を頭から呑んでゐる程の膨れた腹をした蟒が居なかつたので、それで安心してゐたものと思ふ。あの特殊装置といふものの中には、きつと血染になつた園長の服とか靴とかが隠匿されてゐるのではなからうか。萬年筆は、園長を館の入口で絞めあげるときに落ちたもので、それを後に何かの事情があつて遺失品として届けたものであらう。

しかし今横に並んで歩いてゐる西郷副園長が、この萬年筆について不審な行動を演つてゐるのにも氣がつかないわけではない。第一に卅日の遺失品として届けられたものなら、直ぐにも疑つて調べなければならぬのが、今まで黙つてゐたし、一と目みれば園長のものだ位は判りさうなものを何故口を閉めてゐたのか、嫌な目付で帆村を覗いたところと云ひ、ひよつとしたら西郷がすべてを畫策し、嫌疑が鴨田にかかるやうに、わざと爬蟲館の前に落して置いたのではあるまいか。園長殺害の方法も死體も判らぬが、原因は勤務上の怨恨又は、失戀でもあらう。さう思つて西郷の横顔を見ると、どこやら悪人らしいところも無いでは無かつた。しかし嫌疑薄弱な西郷まで疑ふのは、探偵上の恐しい無限地獄へ落ちこんだやうにも思はれた。園長令嬢トシ子の言葉としても、副園長を疑ふことは申譯なかつた。でも疑へば、トシ子は鴨田のことを爪の尖ほども言はず、却つて西郷のことを辯明した。これは西郷の愛に酬ふことができなかつたので自ら辯解をつとめて償ひをし、一方鴨田との愛の問題はもう解決を見てゐるの一言も云はなかつたと考へてはどうか。いよく縫れ糸のやうに亂れてくる帆村の足許に、事件解決

の鍵かと思はれる物が轉がつてゐた。それは一個の釦だつた。

『おお、これは園長の洋服についてゐた釦に違ひない。どうしてこんなところに在るのだらう。』

帆村は兼ねて園長の遺していつた上衣の釦の特徴を手帳に書き留めて置いたことが役立つて大變好運だと思つた。それにしても釦を拾つた場所といふのが、調餌室の直ぐ前の、桐の木材との間に挟つた路面だつたので、これでは調餌室の人達について一應嫌疑をかけてみないわけにはゆかない。いや、ひよつとすると爬蟲館前に落ちてゐたといふ園長の萬年筆もこの釦と殆んど同時に落ちたものと認定すると、これは園長の身體を搬んで行つた徑路を自ら語つてゐることになりはしないであらうか。恐らく萬年筆が最初に落ちて、次にチョッキの釦と思ふものが落ちたと考へていゝであらう。園長の身體は爬蟲館の前から調餌室へ搬ばれたと考へていゝであらう。

だが、どうして人目につかず搬んで行けたかといふことが次の疑問だつた。それが出來たとすると、特殊の状況が必要だつたことになる。白晝下では、その時幸ひにも觀覽人も少く畜養員や園丁も現場に居合せなかつたといふとき、又夜間なればこれは極めて容易に行はれる。しかし萬年筆は園長失踪の日に發見されたのだから、搬ばれたのは夜間になる以前だといはなければならぬ。しかも十一時廿分頃までは園長を見掛けたといふ人があるのだから、正午になれば園長は食事のため事務所へ歸つて行つた筈で、それが無かつたとするとも失踪は十一時廿分から正午の間と斷定するのが常識のやうに思ふ。コースは調餌室から爬蟲館ではなくて、反對に爬蟲館から調餌室へと考へられる。そこで帆村は、

爬蟲館の鴨田研究員が十一時卅五分前後に、調餌室の前へトラックが到着して動物の餌を搬びこんでゐるらしい騒ぎを聞いたといふことを思ひ出した。すると犯行は、この前か後か。——帆村は調餌室の内部にも多分の疑問符號が秘められてゐることも考へないわけにはゆかなかつた。

西郷理學士と一緒に調餌室に入つてみると、帆村は思はず「呀ッ」と叫びたいくらゐだつた。扉の外で調餌室を想像してゐると、かうやつて大きな組上に、血のタラ／＼滲みでさうな馬肉の塊を見るのとは、まるつきり調餌室といふものの實感が違つた。壁には、象を料理するのぢやないかと思ふほどの大鉞や大鋸、さては小さい青龍刀ほどもある肉切庖丁などが、燦爛たる光輝を放つて掛つてゐた。倉庫には壁半分に立ち割つた馬の裸身や、ダラリと長い耳を下げた兎の籠などが目についた。

この物凄い光景を見た瞬間、帆村の頭腦の中に電光のやうに閃いた幻影があつた。それは、園長の死體が調餌室に搬ばれたと見る間に、料理人が壁から大きな肉切庖丁を下して、サツと死體を截斷する。そして駭くべき熟練をもつて、胸の肉、臀部の肉、脚の肉、腕の肉と切り分け、運搬車に載せると、ライオンだの虎だの檻の前へ直行して、園長の肉を投げ込んでやる。……いや、恐しいことである。

『これが調餌室の主任、北外星吉氏です。』西郷副園長が、ゴム毬のやうに肥えた男を紹介した。

『やあ、帆村さんですか。』北外畜養員はニコヤカに笑つた。

『貴方のお名前は兼ねてよく知つてゐましたよ。今度の事件はまるで、貴方に挑戦してゐるやうなもので、實にうつつつけの大事件ですなア。』

帆村はこの機嫌のいゝ、しかし何だかひやかされてゐるやうな気がしないでもない北外の挨拶に對して、頓に言ふべき言葉もなかつた。しかし此のまんまるく太つた子供の相撲取のやうな男の顔を見てみると、彼が悪事を企圖むやうな種類の間人だとは思へなくなつた。帆村は勢ひ率直な質問をこの男に向つてする勇氣を得たのだつた。

「北外さん、私は園長の身體が、この調餌室か、それとも隣りの爬蟲館かで、料理されちまつたやうに思ふのですがね。」

「はアはア。北外は小さい口を勢一杯に開けて、わざとらしく駭いた。『いやそれは大発見ですな。』」

「貴方は園長が失踪された朝の、十一時廿分頃から正午まで何處に居られましたか。」

「僕が有力なる容疑者といふお見立ですな。」北外はニヤリと笑つた。『さてお尋ねの時間に於ては、この室内に僕一人が残つてゐた——とかう申上げると、貴方は喜ばれるのでせうが、實はその時間フルに、一族郎黨ここに控へてゐたんです。それといふのが、十一時四十分頃に、けだものの辨當の材料が届くことになつてゐまして、室からズラかることが出来ないのです。』

「それでは其の時間前後は、何をしておいでました？」

「先づ時間前は、當日も六人の畜養員が、庖丁を研いだり、籠を明けたり、これでなかなか忙しく立ち働きました。そのうちにいつもの時間になると、トラックに満載された材料がドツと搬ばれて來ます。」

24 するともう戦場のやうな騒ぎで、この寒さに襦袢一枚でもつて全身水を浴たやうに、汗をかきます。そ

れが濟むと早速調理です。煮るものは大してありませんが、それぞれのけだものに頃合ひの大きさに切つたり分けて容器に入れたりするのが大變です。肉類の方は、生きてゐる兎だの鶏だのには、冥途ゆきの赤札をぶら下げるだけです。その外のは必ず頭のある魚を揃へたり馬肉の目方をはかつて適當の大きさに截斷し、中には必ず骨つきでないといけないものもあつて、それを拵へるやら、なかなか忙しくて、おひるの辨當が、キチンと正午にいただけることは殆んど稀で、いつも一時近くです。その忙しさの間に、園長を掴まへてきて、これも料理しスペシャルの御馳走として象や河馬などにやらなきやならんさうで、いやはや大變な騒ぎですよ。」

帆村は、うっかり園丁に象や河馬に人間を喰はせる話をしたのが、こんなところへヒョククリ出て來ようとは思ひがけなかつたので、横を向いて苦笑ひをした。兎も角、調餌室の連中はあの時間、犯行を遂げるなどとは非常に困難であることが判つた。

してみると、園長の萬年筆や鉦は、一體何を語つてゐるのだらうか。理窟からゆけば、どうしても調餌室の連中が疑はれてくるのであるが、北外の話では疑ふのが無理である。すると、残るのは何者か。調餌室の人たちに嫌疑を向けるために、萬年筆を落し、鉦を調餌室の前に捨てたとかかんがへられない。何者がやつたことかは知らぬが、さうだとすると、犯人は實に容易ならぬ周到な計畫を持つてゐたものと思はれる。

そこで帆村は大事にしてゐた切札を、ホイと投げ出す氣になつた。

「北外さん。隣りの爬蟲館の蟒、どものことですがね。皆で九頭ほどもありますが、あれに人間の身體を九個のバラ／＼の肉塊にし、蟒、どもに振舞つてやつたら、嘸よるこんで呑むことでせうな。」帆村は北外の答へを汗ばむやうな緊張の裡に待た。

「うわッはッはッ。北外は無遠慮に笑ひ出した。『いや、ごめんなさい、帆村さん、あの蟒といふ動物はですな、生きてゐるものなら躍りかかつて、たとひ自分の口が裂けようと呑みこみますが、死んでゐるものはどんなうまさうなものでも見向きもしないといふ美食家です。ここでは主に生きた鶏や山羊を喰はせてゐます。貴女は多分園長の死體のことを云つてゐられるのでせうが、バラ／＼では蟒の先生、相手にしませんでせうよ。』

帆村は折角登りつめた斷崖から、突つ離されたやうに思つた。穴があれば入りたいとは、この場のとだらう。彼は北外畜養員に挨拶をして、遁げるやうに室を出た。

彼は人に姿を見られるのも厭ふやうに、スタ／＼と足早に立ち去つた。園内の反對の側に遣されたる藤堂家の墓所があつた。そこは鬱蒼たる森林に圍まれ、厚い苔のむした真に靜かな場所だつた。彼はそこまで行くと、園内の賑かさを背後にして、塗りつぶしたやうな常緑樹の繁みに對して腰を下した。

「ああ、何もかも無くなつた！」

帆村は一本の煙草をつまむと、火を點けて歎息した。

「一體何が残つてゐるだらう。」

最初から一つ一つ思ひかへしてゆく裡に、特に氣のついたことが二つあつた。一つは園長がいつも呑み仲間としてブラリと訪ねて行つた古き戦友半崎甲平に會ふことだつた。さうすれば、まだ知られてゐない園長の半面生活が暴露するかも知れない。もう一つはどうしても事件に關係があるらしい爬蟲館を徹底的に搜索しなほすことだつた。ことに開けると爬蟲たちの生命を脅かすことになるといふ話のあつた鴨田研究員苦心の三本のタンクみたいなものも、此際どうしても開けてみなければ濟まされなかつた。あのタンクは、故意か偶然か、人間一匹を隠すには充分な大きさをしてゐるのだつた。

そんな結論を生んでゆく裡に、帆村の全身にはだんだんに反抗的な元氣が湧き上つてきたのだつた。「須永を呼ばう。」

彼は公衆電話に入つて帆村探偵局の須永助手を呼び出すと直ぐに動物園へ來るやうに命じた。

爬蟲館の鴨田研究室の裡へツカ／＼と入つて行つた帆村探偵は、そこに鴨田氏が背後向きになり、ピーカーに入つた茶褐色の液體をパチャ／＼掻き廻してゐるのを發見した。外には誰も居なかつた。

帆村の聲音に氣がついたらしく、鴨田は靜かにピーカーを振る手をちよつと停めたが、別に背後を振り返りもせず、横に身體を動かすと、硬質陶器でこしらへた立派な流し場へ、サツと液體を滾した。すると眞白な煙が濛々と立昇つた。どうやら強酸性の劇薬らしい。なにをやつてゐるのだらう。



「鴨田さん、またお邪魔に伺ひました。」帆村はぶつきら棒に云つた。

「やあー。」と鴨田は愛想よく首だけ帆村の方へ向いて「まだお話があるのですか。」とニヤニヤ笑ひ乍ら、水道の水でビーカーの底を洗つた。

「先刻の御返事をしに参りました。」

「先刻の返事とは？」

「さうです。」と帆村は三つの大きな細長いタンクを指して云つた。「このタンクを直ぐに開いていただきたいのです。」

「そりや君。」と鴨田はキツとした顔になつて應へた。「さつきも言つたとほり、これを直ぐ開けたんでは、動物が皆斃死してしまひます。」

「しかし人間の生命には代へることは出来ません。」

「なに人間の生命？ はッはッ、君は此のタンクの中に、三日前行方不明になつた園長が隠されてゐるのだと思つてゐるのですね。」

「さうです。園長はそのタンクの中に入つてゐるのです！」

帆村はグンと癪にさはつた揚句（それは彼の悪い癖だつた）大變なことを口走つてしまつた。それは前から多少疑ひを掛けてゐたものの、まだ断定すべきほどの充分な條件が集つてゐなかつたのだ。怒鳴つたあとで大いに後悔はしたものの、不思議に怒鳴つたあとの清々しさはなかつた。

「君は僕を侮辱するのですね。」

「そんなことは今考へてゐません。それよりも一分間でも早く、このタンクを開いていただきたいのです。」

「よろしい、開かせよう。」斷乎として鴨田が思切つたことを云つた。「しかし若しもこのタンクの中に園長が入つてゐなかつたら君は僕に何を償ひます。」

「御意のままに何なりと、トシ子さんとおあなたの結婚式に一世一代の餘興でもやりますよ。」

この帆村の言葉はどうやら鴨田理學士の金的を射ちぬいたやうであつた。

「よろしい。」彼は満更でない面持で頷いた。「では此の装置を開かせようが、爬蟲どもを別の建物へ移さねばならぬので、其の準備に今から五六時間はかかります。それは承知して下さい。」

「ではなるべく急いで下さい。今は、ほう、もう四時ですね。すると十時ごろまでかかりますね。警官と私の助手を呼びますから悪しからず。」

「どうぞ隨意に。」鴨田は云つた。「僕も今夜は歸りません。」

帆村はその部屋から警官を呼んだ。副園長の西郷にも了解を求めたが、彼も今夜はタンクが開くまで爬蟲館に停つてゐようと云つた。

しかし帆村は、彼等と別なコースをとる決心をしてゐた。丁度そこへ助手の須永がやつてきたので、萬事について細々と注意を與へ、爬蟲館の見張りを命じてから、彼一人、動物園の石門を出ていつた。

既に秋の陽は丘の彼方に落ち、眞黒な大杉林の間からは暮れのこつた湖面が、切れ切れに灰白く光つてゐた。そして帆村探偵の姿も、やがて忍び闇の中に紛れこんでしまった。それからは時計のセコンドの響きばかりがあつた。午後五時、六時、七時、それから八時がうつても九時がうつても、帆村の姿は爬蟲館へ歸つてこなかつた。九時半を過ぎると多勢の畜養員や園丁が檻を擔いで入つて来て、無造作にニシキヘビを一頭入れては別の暖室の方へ搬んで行つた。仕事は間もなく終つた。助手の須永は、先ほどから勝誇つたやうに元氣になつてくる鴨田理學士の矮軀を、片隅から睨みつけてゐた。やがて爬蟲館の柱時計がポーン、ポーンと、あたりの壁を揺すぶるやうに午後十時を打ちはじめた。人々は、首をあげてどつと時計の文字盤を眺め、さて入口をふりかへつたが、どうやら求める蹙音は蟻の走る音ほど聞えなかつた。

『帆村さんはもう歸つて来ないかも知れませんよ。』

鴨田理學士が両手を揉み揉み云つた。

『いつまで待つて居たつて仕様がありませんから、この儘閉めて歸らうではありませんか。』  
警官と西郷副園長とが、腰を伸して立ち上つた。須永も立ち上つた。しかし彼は鴨田の解散説に賛成して立つたわけではなかつた。

『もう少し待つて下さい。先生は必ず歸つてこられます。』  
須永は叫んだ。

『いや、歸りません。』

鴨田は尙も云つた。

『それでは——』と須永は決心をして云つた。『先生の代りに僕が拜見しますから、このタンクを開けて下さい。』

『それはこつちでお断りします。』

憎々しい鴨田の聲に、須永が尙も懸命に争つてゐる裡に、いつの間に開いたか入口の扉が開かれ、そこには此の場の光景を微笑ましげに眺めてゐる帆村の姿があつた。

『皆さん大變お待ちをしました。』と挨拶をした後で、『おや、鱗どもは皆、退場いたしましたね、では今度は私が退場するか、それとも鴨田さんが退場なさるか、どつちかの番になりました。ではどうか、あれを開いていただきませう、鴨田さん。』

『……』鴨田は黙々として第一のタンクの傍へ寄り、スパナーで六角の締め金を一つ一つガタンガタンと外していつた。一同は鴨田の背後から首をさし伸べて、さて何が現れることかと、唾を呑みこんだ。『ガチャリ！』

と音がして、タンクの上半部がパクンと口を開いた。が内部は同心管のやうになつてゐて、鱗の鱗のやうな大きな鱗のついた其の同心管の内側が、白つぽく見えるだけで、中には何にも入つてゐなかつた。『空虚つぽだッ。』

誰かが叫んだ。

鴨田研究員は第二のタンクの前へ、黙々として歩を移した。同じやうな操作がくりかへされたが、これも開かれた内部は、第一のタンクと同じく、空虚だった。

失望したやうな、そして又安心したやうな溜息が、どこからともなく起つた。

遂に第三のタンクの番だった。流石の鴨田も、心なしか緊張に震へる手をもつて、スパナーを引いていつた。

『ガチャリ！』

たうとう最後の唐櫃が開かれたのだつた。

『呀ッ！』

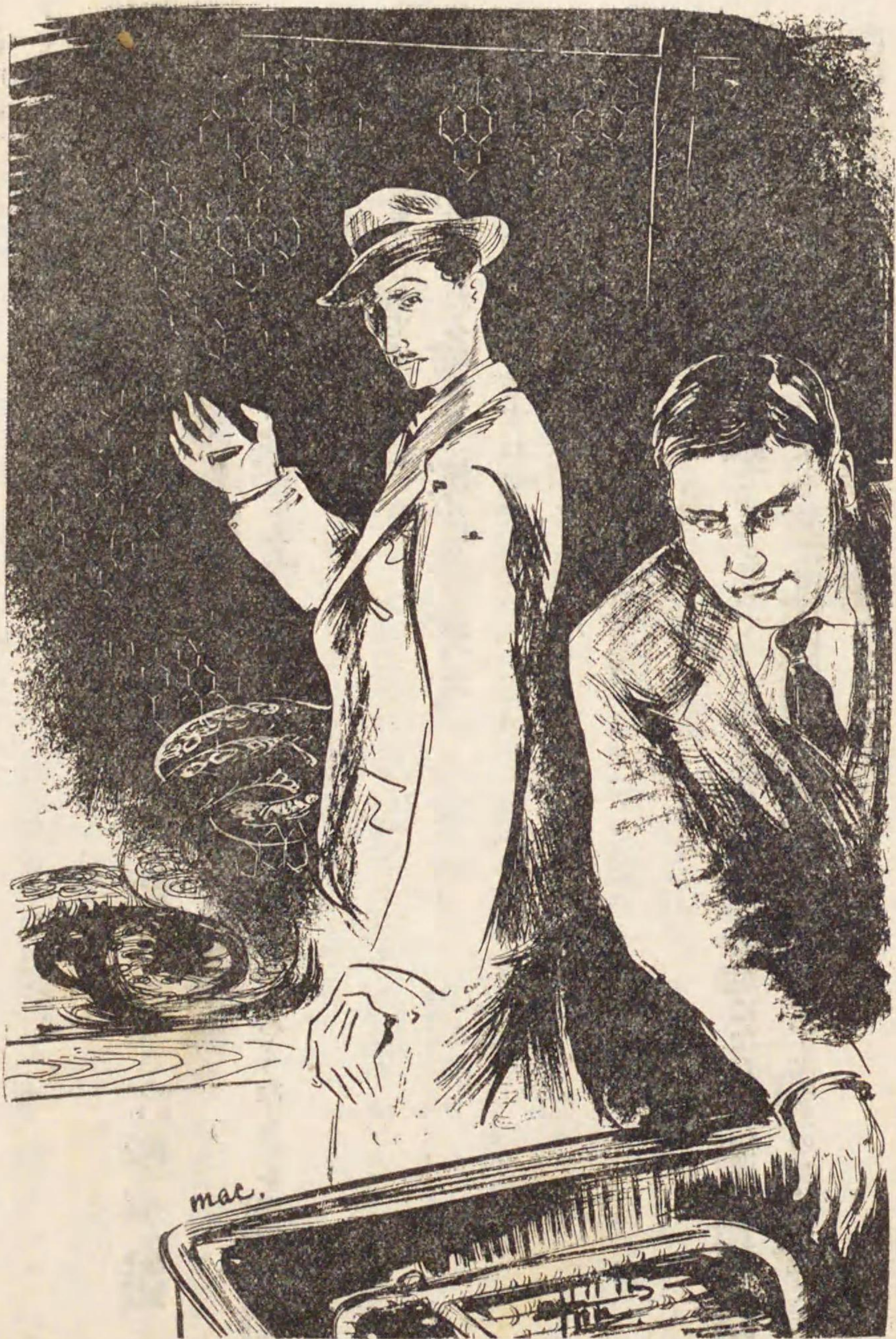
『これも空虚つぽだッ！』

帆村は須永に目くばせをして彼一人、前に出た。彼の手には自動車の喇叭の握りほどあるスポイトとピーカーとが握られてゐた。

彼は念入りに、白い襷のまはりを獵つて、何やら黄色い液體をスポイトで吸ひとり、ピーカーへ移してゐた。

だがそれは大した量でなく、ほんの底を潤ほす程度にとどまつた。

帆村は尙もスポイトの先で、弾力のある襷を一枚一枚かきわけて調べてゐたが、



mac.

『呀ッ。』

と叫んで顔を寄せた。

『これだッ。たうとう見付かつた。』

さう云つて素早く指先でつまみあげたのは長さ一寸あまりの、柳箸ほどの太さの、鈍く光る金屬——  
どうやら小銃の彈丸のやうな形のものだつた。

一同は怪訝な面持で、帆村が指先にあるものを眺めた。帆村はその彈丸のやうなものを鴨田の鼻先へ  
持つていつた。

『貴方はこれをご存知ですか。』

鴨田は腑に落ちかねる顔付で、無言に首を振つた。

『貴方はご存知なかつたのですね。』

帆村はどうしたのか、ひどく歎息して云つた。

『これはですね——』

一同は帆村の唇を見つめた。

『——これは露兵の射つた小銃彈です。そして、これは卅日から行方不明になられた河内園長の體內に  
廿八年この方、潜つてゐたものです。云はば河内園長の認識標なんです。しかも園長の身體を焼くとか、  
溶かすかしなければ出て來ない終身の認識標なんです。』

『そんな出鱈目は、よせ！』

鴨田が蒼白にブル／＼と慄へながら呶鳴つた。

『いや、お氣の毒に鴨田さんの計畫は、とんだところで失敗しましたよ。貴方は園長を殺すために、醫  
學を修め、理學を學び、スマトラまで行つて蟬の研究に従事せられた。そして日本へ歸られると、多  
額の寄附をしてこの爬蟲館を建て、貴方は研究を続けられた。七頭のニシキヘビは貴方の研究材料であ  
ると共に、貴重な兇器を生むものだつた。私もよく醫學教室で、犬も手術しい唾液腺を體外へ引張  
り出して置いて、これにうまさうな餌を見せることにより、體外の容器へ湧きだした犬の唾液を採集す  
る實驗を見かけますが、貴方は生物學と外科とにすぐれた頭腦と腕とで、蟬の腹腔に穴をあけ、その  
消化器關の液汁を、丹念に採集したのです。それは周到なる注意で今日まで貯藏されてゐました。そし  
て又ここに竝んでゐるタンクは、巧妙な構造をもつた人造胃腸だつたんです。』

あまりに意外な帆村の言葉に、一同は啞然として彼の唇を見守るばかりだつた。

『鴨田さんは、卅日の午前十一時廿分頃、園長をひそかに人氣のない此の室に誘ひ、毒物で殺したんで  
す。そこで直ちに園長の輕装を剥いで裸體とし、着衣などは、あの大鞆に入れ其の夕方何喰はぬ顔で園  
外に搬び去りましたが、それは後の話として、鴨田さんは園長の口をこち開けるや、蟬の消化液では  
溶けない金齒をすつかり外して別にすると、もうこれで全部が溶るものと安心して此の第三タンクに入  
れました。そこで永年貯藏して置いたニシキヘビ消化液をタンクへ入れて密封をすると、電動仕掛けで

圓心管——それは襞をもつた人造胃腸なんです、その胃腸を動かした始めたんです。適当な温度を保つてこれを續けたものですから、鴨田さんの研究によると、今夜の八時頃までに完全に園長の身體はタンクの中で、影も形もなく融解してしまふことが判つてゐました。

鴨田さんにその自信があつたればこそ、この時間になつてタンクを開くことを承知されたのです。そして尙も計畫をすすめて、タンクの中の溶液をそのまま下水へ流してしまふことにしました。急いで流せば、こんな静かなところだからそれと音を悟られるので、排水瓣を半開きとし、ソロ／＼と園長の溶けこんだタンクの内容液を流し出したんです。しかしそれは一つの大失敗を残しました。流出速度が極めて緩慢だつたために、園長の體内に潜入してゐた弾丸は流れ去るに至らず、そのまま襞の間に残留してしまつたんです。この弾丸といふのは、園長が沙河の大會戦で奮戦の果に身に數發の敵弾をうけ後に野戦病院で手術をうけましたが、遂に抜き出すことの出来なかつた一弾が身體の中に残りまして。その一弾が皮肉にも棺桶ならぬ此のタンクの中に残つたわけなんです。本當に恐ろしいことですね。なほ附け加へると、園長の金齒は、大膽にも私に見てゐる前でピーカー中の王水に溶かし下水道へ流しました。萬年筆や鉛は鴨田さん自身が撒いたもので、これは犯罪者特有のちよつとした搔亂手段です。』

『出鱈目だ、捏造だ！』

鴨田は尙も咆哮した。

『では己むを得ませんから、最後のお話をいたしませう。』帆村は物靜かな調子で云つた。『この犯行の動

機はまことに悲惨な事實から出て居ます。話は遠く日露戦争の昔にさかのぼりますが、河内園長が滿洲の野に出征して軍曹となり、一分隊の兵を率ゐて例の沙河の前戦、遼陽の戦ひに奮戦したときのことです。其のとき柵山南條といふ二等兵がどうした事か敵前といふのに、目に餘るほど遺憾な振舞をしたために、皇軍の一角が崩れようとするので己を得ず涙をふるつて其の柵山二等兵を斬殺したのです。これは、軍規に定めがある致方のない殺人ですが、それを見てゐた分隊中の或る者が、本國へ凱旋後柵山二等兵の未亡人にうっかり喋つたのです。未亡人は殺された夫に勝るしつかり者で、そのときまだ幼かつた一人の男の子を抱きあげて、河内軍曹への復讐を誓つたのです。その男の子——兎三夫君は爾來、母方の姓鴨田を名乗つて、途中で亡くなつた母の意志を繼ぎ、さてこんなことになつたのです。』

帆村は語り切つた。しかし鴨田學士は、今度は何も云はずに頷低れてゐた。

『もう後は云ふ必要がありません。最後に御紹介したい一人の人物があります。それはこの話のヒントを與へて以後私の調べに貢獻して下さつた故園長の古い戦友、半崎甲平老人であります。この老人は同郷の出身ですが、衛生隊員として出征せられてゐたので、後に園長がX線で體内の弾丸を見たときにも立合ひ、また戦場の祕話を園長から聴きもした方です。鴨田さんの亡き父君のことも知つてられるんですから此處へお連れしました。いま御案内して参りませう。』

さういつて帆村は立上ると、入口の扉をあけたが、其處には老人の姿は見えなかつた。向うを見ると、爬蟲館の出入口が人の身體が通れるほどの廣さに開き、その外に眞黒な暗闇があつた。

『呀ッ！ 鴨田さんが自殺してゐるッ。』  
さういふ聲を背後に聞いた帆村は、もう別にその方へ振り返らうともしなかつた。  
そして彼の胸中には、事件を解決するたびに経験するあの苦が酸っぱい悒鬱が、また例の調子で推し  
騰つてくるのであつた。

### 間諜座事件

#### 1 おことわり

これは或るスパイ事件だ。

ところで、これから述べてゆく其の物語の中には、日本人の名前ばかりが、ズラ／＼と出てくるのだ  
が、讀者諸君は、それ等を悉く眞の日本人だと早合點されてはいけな。實はその間諜一味は××人  
なのである。本來ならば『丸木花作事本名張學霖は……』といった風に書くのが本當なのであるが、そ  
れを一々書くのが煩しい程、××人が出てくることであるから、一つ思切つて、味噌も糞も悉く日  
本人名前の方だけを書くことにした。

どうかお読みになつてゐる裡に、錯覺を起さないやうにして戴きたいと、お願いして置く。さて――

#### 2

霧の深い夕方だつた。

秘密警備隊員の笹枝弦吾は、定められた時刻が来たので、同志の帆立介次と肩を並べてS公園の脇をブラリ／＼と歩き始めてゐた。もう冬と名のつく月に入つたのだつたが、今夜はさう寒くもなかつた。しかしかう霧が降りてゐては、聯絡をとるのに稍困難を覺えた。その聯絡員といふのがうまく自分達を探しあてゝ呉れ、ばいゝが……。

『ウーイ、こらさのさッ——てんだ。』

向うから酔拂ひの聲が聞える。顔も姿もまだ見えないが……。

弦吾は肘でチヨイと同志帆立の脇腹を突いた。

ぬからず帆立が、

『ビ、ビーイ、ビツ……。』

とヴァレンシアのメロデーを口笛で吹き始める。

ヒヨロ／＼と、向うから人影が現れた。

弦吾はツと帽子を被り直した。

どをーン。

酔拂ひが突き當つた。

『ヤイ、ヤイ、ヤイツ。』酔拂ひが呶鳴つた。

『ツツ突き當りやがつて、挨拶をしねえとは何でえ。こッこの棒くひ野郎奴。』

『……。』

『だッ黙つてるな。いよくもう、勘辨ならねえ、こッ此の野郎ッ。』

どをーンと突き當つたのはいゝが拳固を振り下ろすところを、ヒラリと轉はされて、

『ぎやーッ。』

と叫ぶと、酔漢は舗道の上に、長くのめつた。

弦吾と同志帆立とは、酔漢の頭を飛び越えると足早に猿江の交叉點の方へ逃げた。

細い横丁を二三度あちこちへ折れて、飛びこんだのはアパートメントとは名ばかりの安宿の、その奥

まつた一室——彼等の秘密の隠れ家！

『どうだつた？』入口の扉にガチャリと鍵をかけると帆立が云つた。

『ウン、これだ。』

弦吾は掌を開くと、小形のたばこやマツチを示した。酔拂ひから素早く手渡された秘密のマツチ箱だつた。小指の尖で、中身をボンと落しメリ／＼と外箱を壊して裏をひつくりかへすと、弦吾はポケットから薬壘を出し、眞黄な液體をポトリポトリとその上にたらした。果然、見る見る裡に蟻の匍つてゐるやうな小文字が、べた一面に浮び出た。

本部からの指令だつた！

二人は、マッチ箱の裏に書かれた指令文を読み終ると、合はせてゐた額を離して、思はず互の顔を見合はせた。二人は一語も發しない。餘程重大な指令と見える。その指令といふのは――

(指令本第一九九七八號)

(一) Q X 30 ト Q Z 19 トハ、即刻間諜座ニ赴キ、「レビユー・ガール」の内ヨリ左眼ニ義眼ヲ入レタル少女ヲ探シ出シ、彼女ノ藝名ヲ取調べ、Q Z 19 ハ直チニR 區裏ノ公衆電話傍ニ急行シテ黄色ノ外套ヲ着セル二人ノ同志ニ之ヲ報告セヨ。又 Q X 30 ハ間諜座内ニ其儘止リテ、打出シト共ニ群衆ニ紛レテ脱出セヨ。

(二) 右ノ報告ヲ本日午後十時マデニ報告シ得ザルトキハ、在京同志ハ悉ク明朝ヲ待タズシテ塵殺セラル、コトヲ銘記セヨ。

『死線は近づいたぞ。』

『かねて探してゐた敵の副司令が判つたといふわけだな。』

42 『ウン、義眼を入れたレビユー・ガールとは、うまく化けやがつた。』

『だが間諜座へ入ることは、地獄の門をくぐるのと同じことだ。固くなつたり、驚いたりして發見されまいぞ。』

『あのなかは敵の密偵で一杯なんだらうな。』

『毎夜、観客の中に百人近くの密偵が交つてゐるといふことだ。そして何か秘密の方法で、舞臺上の首領と通信をしてゐるさうだ。』

『首領よりか副司令のあの小娘が恐ろしいのか。』

『さうだ。あの小娘は悪魔の生れ代りだ。』

『するとあの副司令を今夜のうちにこつちの手でやつつける手筈になつたんだな。』

『ウン。――どうしてやつつけるかは知らないが、副司令のやつ、義眼を入れてレビユー・ガールに化けてゐるてえことを、嗅ぎつけられたが運の盡きだよ。おゝ、もう五時半だ。あといくらも時間が無いぞ。さア出發だ。』

弦吾は腰をあげた。

『おつと待ちな、冷いなから酒がある。別れの盃と行かう。』

同志帆立は、押入の隅から壇話を取出した。汚れたコップに、黄色い酒はなみくとつがれた。

カチャリ、カチャリ。

『地獄で會はうぜ。』



『世話になつたな。』

部屋を出ようとするときだつた。

ブ、ブ、ブブー。

卓子の裏に取付けたブザーが鳴つた。

『ほい。XB4が呼んでゐるッ。』

弦吾は室内に引返した。壁をボンと開くと嵌めこんだやうな超短波の電話器があつた。

『QX30だ。』

『こつちは、XB4だ。』と電話機の彼方で小さい聲がした『報告があつたぞ、いよく動員指令が下つたさうだな。』

『ウン。』

『ところで注意を一つ錢別にする。』

『ほ、う。ありがたう。』

44 『あの間諜座ね「魚眼レンズ」のついた撮影機で、観客一同の顔つきが何時でも自由自在にとれるんださうだ。ぬかりはあるまいが、顔色を變へたり、變にキヨロ／＼しちやいかん。皆の笑ふところでは笑

ひ、皆が澄ましてゐるときには澄ましてゐなくちやいかん。いゝかね。』

『魚眼レンズを使つてゐるのか？ よをし、油断はしないぞ。』

『義眼を入れたレビュー・ガールの名前をつきとめるんだつて、誰にも尋ねちや駄目だぞ。敵の密偵は巧妙に化けてゐる。立ち處に殺されちまふぞオ。』

『ウン、誰にもきかんで、見付けちまはう。』

『見付ける方策が立つてゐるのか。』

『うんにや、さういふわけでもないが、プログラムを探偵すれば、何々子といふ名前がきつと判るよ。』

『それで安心した。ぢや別れるぞ。しつかりやれ、同志QX30！』

『親切有難うよ。』

魚眼レンズで観客全部の顔色を覗いてゐるツて——ちえツ、そんなものに引懸られて堪るものかい！

間諜座とは、敵の密偵の夜會場なんだから、さういふ名で仲間と呼んでゐるのだ。本當の座名はデイ・

ヴァンピエル座！

デイ・ヴァンピエル座第9回公演——と旗が出てゐる間諜座の前だ。R區は、いつもと、些とも變らぬ雜沓だつた。

しばらくウキンドーの裸ダンスの寫眞を、涎を垂らさんばかりの顔つきで眺めて――  
『さア、お前はどこに決めるんだ。』  
『俺は斷然、この丸花一座を観る。』

『ぢや俺もさう決めた。……いゝよいゝよ、今夜は俺が拂ふから、委しとけ。』

『イヤ駄目だ。今夜は俺に拂はせろ。』

『いゝんだよオ。』

『いけないよオ。』

頗る手際よく、だらしなくグニヤ／＼と縫れ合ひながら弦吾と同志帆立はプログラム片手にひつつかんだ儘、嬉しさに入つていつた――だが一皮下は、棒を呑んでゐるやうな氣持だつた。

『明るい舞臺では、コメディ『砂丘の家』が始まつてゐた。』

流石にカブリツキは遠慮して、中央の約前後から等距離の席に坐る。

舞臺は花のやうに賑かだつた。

だが、それに引きかへ、觀客席のQ X 30は、面こそ作り笑ひに紛らせてゐるが、胸の裡は鉛を呑んだやうに憂鬱に閉ざされてゐた。そのわけは彼の手に握られたプログラムにあつた。

この複雑さはまるプログラムのうちから、義眼を入れたレビュー・ガールの名前を探し出すなんて、如何に無鐵砲なことだか、そのプログラムのおもてを一目見ただけで充分に知れることだつた。

同志百七十一人の生命を賭ける死のプログラム！

どうか讀者諸君も氣を鎮めて、次に示すこのプログラムに共に眼を移して下さい。

プロゲラム

第三・コメディ・砂丘の家

●フルターニユ郊外の家

父親	ヂヤック	松田待三郎	母親	カテリナ	武中	文子	姉娘	ロヂナ	東明	波子	
妹娘	マリイ	郡家	月子	紳士	ケリー	田方	青二	青年	フルトン	丸山	彦太
女中	ロセツト	住吉	景子	店員	アプリン	間宮	林八	近所の娘	アン	香川	桃代
マーゲリー	平河みね子	ドロシー	小林	翠子	ルイ	ズ	六條	千春			

第四・ダンス・エ・シヤンソン

●ダンス(木製の人形)

六條	千春	平河	みね子	辰巳	鈴子	歌島	定子	柳	ちどり
小林	翠子	香川	桃代	三條	健子	海原	真帆子	紅	黄世子

●シヤンソン(朝顔の歌)

咲田さき子

●ダンス(美はしの宵)

(唄)花柳春子 須永克子 山村蘭子 杉原常子

●シャンソン(遙かなるサンタルチア)

須永克子

●ダンス(オーヤヤ)

間宮林八 花柳春子 神田玉子

●ダンス(カンツリーダンス)

歌島定子 玉川砂子 大井町子 御門秋子 三條健子  
辰巳鈴子 水町静子 小牧弘子

●ファイナル

六條千春 平河みね子 辰巳鈴子 歌島定子 柳 ちどり  
小林翠子 香川桃代 三條健子 海原真帆子 紅 黄世子

第一・ナンセンス・レビュー 彌次喜多

●第一景・プロローグ

喜多八 丸木 花作 彌次郎兵衛 鴨川 布助

●第二景・大阪道頓堀

舞 妓 紅・黄世子 歌島 定子 三條 健子 辰巳 鈴子 香川 桃代 平河みね子  
喜 八 丸木 花作 彌 次 鴨川 布助

●第三景・嵐山渡月橋

妙 林 鷹司 風子 尼僧甲 玉川 砂子 同 乙 大井 町子 同 丙 水町 静子  
同 丁 御門 秋子

●第四景・琵琶湖畔

藥 賣 武智 太郎 藥屋娘お金 柳 ちどり お 銀 海原真帆子 喜多 丸木 花作  
彌 次 鴨川 布助

●第五景・山賊展望臺

首 領 松田待三郎 支那人甲 田方 青二 同 乙 春山田之助 同 丙 丸山 彦太  
唐子の娘 松浦 浪子 柳 ちどり 東路 艶子 歌島 定子 川島 武子 花村 京子  
三條 健子 辰巳 鈴子 喜 多 丸木 花作 彌 次 鴨川 布助

●第六景・奈良井遊廊

花魁初菊 花柳 春子 同 赤玉 山村 蘭子 提灯持 奈良木 清 元永 敏夫  
金棒引 清洲 蝶子 神田 玉子 禿 海原真帆子 新 造 玉川 砂子  
大井 町子 水町 静子 御門 秋子 藝 者 小牧 弘子 香川 桃代 平河みね子  
小林 翠子 喜 多 丸木 花作 彌 次 鴨川 布助

痺れる脳髓！

もし此處で卒倒したらば、それで萬事休すだ！

弦吾は無形の敵と闘つた。血を油に代へて火を點じ、肉を千切つて砲彈の代りに撃つた。何とかして、この中から義眼のレビユー・ガールの、名前を見付け出したい。その張りきつた焦燥で、舞臺の方に向けてゐる眼は空洞にならうとする。

——いつの間にやら、第三コメディ「砂丘の家」は幕となつた。弦吾は同志帆立に脇腹を突つかれて、慌てゝ舞臺へ拍手を送つた。途端に、

『おや？』

弦吾は、なにかしらハツとした。靈感の迸り出でようといふ氣配を感じた——子供るときから、不思議な癖で……。

(さうだ。あの消去法といふ數學、あれを應用して一つやつてみよう、よし！)

彼は遂に一つのプランを思ひついた。頭腦は俄かに冷靜となつた。科學者だつた彼の眞面目が躍如として甦つた。消去法とは一體どんな數學であるか。

そのときベルが喧しく鳴つた。ジャズに囃されて重い緞帳が上つていつた。いよく第四の「ダンス・エ・シャンソン」の幕が開いたのだつた。

何よりも先づ第一の問題は、誰が義眼を入れてゐるかを發見することだつた。

舞臺では、飛び上るやうなメロデーにつれて八曲の第一、

ダンス (木製の人形)

が始まつた。赤と白とのだんだんの玩具の兵隊の服を着、頬つべたには大きな日の丸をメイク・アップした可愛い、十人の踊り子が、五人づつ舞臺の兩方から現れた。

タツタラツタ、ラツタツタツ。

ラツタラツタ、タツタララ。

踊り子たちは、恰も木製の人形であるかのやうにギョチなく手足を振つた。

(お、このなかに、義眼を入れた女が居るか？)

眼を見張つたが、かう遠くでは判らない。と云つて今さら舞臺の前のカブリツキまで出られないし、たとひ出てみたところで何しろ小さい眼のことだ。義眼と判るとまで行くまい。

Q X 30の笹枝弦吾は、呆然として舞臺の上に踊る彼女達を見入つた。

そのとき彼の眼底に映つた一人の踊り子があつた。その踊り子は、他の九人と同じやうに調子を揃へて踊つてゐるのであるが、何だかすこし様子が變である。

どう變なのかと、尙も仔細に觀察をしてゐると、成程一つのをかしいことがある！

その踊り子は頭を左右に、稍振りすぎる嫌ひがあるのだ。

いや、もつと別の言葉で云ふことが出来ると思ふ。——その踊り子は首を右に傾けてゐるうちに、急

に驚いたやうに首を左に傾け直すのだつた。首を、その逆に左から右へ傾け直す行動は自然に圓滑に行はれるのだつた。唯右に曲つてゐる首を左に傾け直すときに限り、非常に不自然な行動が入つた。もつと別の言葉で云へる。つまりそんな不自然な行動も左の眼が悪いからこそ起るのだ。左の眼が悪いときは、悪い方の眼は見えないから右の一眼で前面を見ることになる。そのためには顔を正面に向けるとしたのは、左の方が見えない。それを補ふためには右の眼を身體の中心線の方に寄せる必要がある。その時に顔を曲げねばならぬ。このとき人間は首を右へ曲げる！

左眼の悪い人間は、つまり、常に右に首を曲げてゐる。しかし踊り子がいつも右へ傾いた顔をしてゐたのでは美感上困る。そこで氣のつく度に、ヒョイと首を逆にひねる。この場合、左へは、左へ振つたが振りすぎて人目を引くやうになる。そして踊つてゐる裡に、つい習慣が出て首が自然に右へ曲る。氣がついてハツとすると、不自然にギクリと首を左へ曲げる。——これだ、これだ。

あの、首を振り過ぎる女が、求める副司令なのだッ。しめた！

(しめた)と喜んでみたが本當に喜ぶにはまだ早かつた。何故なら彼女は他の九人と同じ「木製の兵隊さん」だつた。どれが彼女の名前やら判らない。

(弱つた。やはり呪ひのプログラムだッ。)

弦吾は、改めてプログラムを呪つた。

さうかうする裡に同志百七十一名の生命は、刻々に縮つてゆく。さうだ、かうしては居られない。

(例の試みをやつてみるか。)

彼は暫くプログラムの表面を見てゐたが、今の「木製の人形」に出てゐる十人のレビュー・ガールの名前を胸のうちに誦んじた。

六條 千春 平河みね子 辰巳 鈴子 歌島 定子 柳 ちどり 小林 翠子 香川 桃代  
三條 健子 海原真帆子 紅黄世子

この中に彼女の名前があるのだ。この出演人員を①としよう。

ところで一つ前の「砂丘の家」には彼女は出なかつた。しかしこれと①との出演人員を較べると、兩方に出演してゐる女が四人もある。「近所の娘」をつとめる香川桃代、平河みね子、小林翠子、六條千春の四人だ。するとこの四つの名前には彼女の名前はないのだから、①の十人から先づ消し去つてもよい。すると残りは六人となる。

辰巳 鈴子 歌島 定子 柳 ちどり 三條 健子 海原真帆子 紅黄世子

だけが残る。この中の一人が、あの女なのだ。

Q X 30 は、今や神を念じた。この調子で、敵の副司令の義眼女の名前を知らしめ給へ。

「木製の人形」が引込むと、次はプログラムに随つて、「シヤンソン朝顔の歌」それから「ダンス美はし

の宵「いづれも彼女は出ない。「シヤンソン遙かなるサンタ・ルチア」も出ない。次の「ダンス・オー・ヤヤ」にも出ない。そして次の「ダンス・カンツリー」に移った。

これにも彼女は出なかつたが、大いに注意すべき事がある。それは例の残つた六人の中の三人、すなはち辰巳鈴子、三條健子、歌島定子が出演してゐることがプログラムの上から讀まれた。これは何を意味するかといふと、彼女はその三つの名前の中には無いといふこと——果然、敵の副司令の名前は、残りの三つの名前の中にあるといふ結論になつた。あゝ、その三つの名前！

海原真帆子

柳 ちどり

紅黄世子

利鎌を振りまはしてゐる死の神はわれ等の同志百七十一人の許を離れて、いまや刻々敵の副司令へ迫りつゝあるのだ。

さて残る三人は、どこでそれ／＼判るであらうか。

Q X 30 は、とゞろく心臓を押へてプログラムの先の方を調べて見た。判る、判る！

次の演出は、初めに返つて、第一ナンセンス・レビュー「彌次喜多」二幕十二場だ。辿つてゆくと、この中の第二景「大阪道頓堀」のところ例の三人のうち、紅黄世子だけが他の二人に別れて出演するのだ。

それから、それから……

残る海原真帆子と柳ちどりは、第四景の「琵琶湖畔」に茶店娘お金とお銀で一緒に出る。さても焦らせることではある。

ところで第五景の「山賊邸展望臺」では唐子の娘として、紅黄世子が出る。

第六景の「奈良井遊廓」では残りの海原真帆子が出る。これで全然判つたことになる。

だが、此の第六景「奈良井遊廓」まで待つ必要はない。既に一つ前の第五景「山賊邸展望臺」で、残る二人のうち紅黄世子が判るのだから、あとの一人は第六景を見て確かめずとも別る筈だつた。——敵の副司令の斷頭臺はこの第五景で、切つて放たれるのだ。

Q X 30 笹枝弦吾は、齒を喰ひしばつて、喜びの色を押し隠したのだつた。

弦吾の先走りしたチェックとは別に、先づ「ファイナーレ」が開いて、たしかに例の義眼女を發見することが出来た。プログラムの上に②と印をつけた。第二回目の登場といふ意味であつた。

弦吾には、もう幕間もなんにもなかつた。唯機の至るのが待ちあぐまれるばかりだつた。「彌次喜多」が始まつて、第一景。一座を率ゐる丸木花作と鴨川布助とが散々観客を笑はせて置いて、定紋うつた幕の内へ入つた。

いよ／＼第二景。紅黄世子かどうか判らうといふ機會が來たのだ。流石に胸が迫つた。道頓堀行進

曲も賑かに、花道からズラリと八人の振袖美しい舞妓が現れた！  
(居ない、居ないぞッ)

Q X 30は軽い吐息をした。

それからプログラムは進む。第四景には、残る柳ちどりと海原真帆子とが茶店娘となつて確かに登場したと思はれる。プログラムの上に、彼女の出演の印③を打つて置かり。Q X 30は、成功へもう一步の手前へ立つて、ホツとした。振返つてみればよくまア此の複雑なプログラムから、彼女の名前を拾ひ出せるやうになつたものだ。

さて、いよく運命の決まる第五景だ。冷静に、冷静に！

山賊邸の展望臺。怪しげなる囃につれて、一隊の唐子が踊りつゝ舞臺へ上つてきた。

『呀ッ。』

と叫びたいのを懸命で忪へたQ X 30だつた。見よ！ 見よ！ あの義眼女があるではないか。敵の副司令が、唐子になつて、白々しくも踊つてゐるのだ。決つた！

副司令の藝名は、柳ちどり!!!

弦吾は素早く「柳ちどり」と名前をプログラムから千切りとつて、隣りにピタリと寄り添つてゐるQ X 19同志帆立介次の掌のうちに、ねぢこんだ。

帆立はフラリと席を立つた。



一つ大きな欠伸をすると、デイ・ヴァンピール座の木戸口を出ていった。レビュー館の向うの角を曲ると急に歩調を速めて、かねて謀し合せて置いたR區裏の二つ竝んだ公衆電話函のところへ……。

公衆電話室には、既に黄色の外套を着た青年が二人、別々に入つて居つた。サインを送られたのでQ X19は直ぐに『柳ちどり』の名前の入つた紙片を手渡した。

『すみませんでしたね。まアこつちへ入り給へ。』黄色い外套を着た同志は云つた。

其時この二つの公衆電話の甲乙とも相手のベルが喧しく鳴つてゐた。

甲の方の電話は、一町半ほど先の洋食屋の屋根裏へ撃つてゐた。

『オイ、どうだ。』と向うから聲がした。

『もう直ぐ出て来るから、うまく演れよ。』と、こつちから黄色い外套の同志が稍震へ聲で云つた。興奮に慄へてゐるのだつた。

『ウン、しつかり演つてみせるぞ。安心せい。相手を確めたら直ぐ報せるー』

さういつた屋根裏の青年の前には一臺の機關銃が壁穴を通して外を覗いてゐる。いつでも引金が引ける。この機關銃の銃口は、向ひの高い建物の三階に、ポツカリ開いた窓に向けられてゐる。もつと精確に云ふと銃口は、向ひの窓の内から見える壁掛電話機を覗つてゐるのだつた。——その電話機は、受話

器が紐のままダラリと下つてゐた。思ふに、電話で呼出された人を探しに行つてゐるものらしい。

五秒、十秒、十五秒。

向うの窓に、一人のレビュー・ガールが現れた。頭が痛いのか、左手で壓さへてゐる。

『はア、モシ〜。』

と、その美しいレビュー・ガールは電話口の前で唇を動かした。

『あゝ、もし〜。』レビュー・ガールの電話に答へたのは、意外にも區裏の公衆電話の乙の方を占領してゐる黄外套の同志だつた。

『もし〜。あんたは、柳ちどりさん?』

同志の聲は悠々と落ちてゐる。それもその筈、一方の旗頭U X3 鯛地秀夫だつたから。

『えゝ、さりよ。』と女が云つた。

鯛地秀夫は、ツと手をあげて、隣の公衆電話甲の同志Q X7 左馬三郎へ合圖をした。

(よし、撃て——といへ)

といふサインだ。鯛地は豪膽にも尙も柳ちどりを電話機に釘止めにして置かうと努力した。

『柳ちどりさんに、いゝものを進呈——』

撃て、——といふ命令は、屋根裏の同志の耳に達して、スハと機關銃の引金を引いた。

どどどどどどどど、どどどどどどどどッ!



霰のやうな銃丸が、眞白な煙りをあげて、向ひの窓へ——  
柳ちどりは、聲を立てる違もなく全身を蜂の巢のやうに撃ち抜かれ、崩れるやうに電話機の下にパタリと倒れた。

『命申したぞオ。』

それが同志への最後の報告だった。

次の瞬間に、屋根裏の機關銃手も公衆電話室甲乙の黄外套も、それから又、同志帆立も、飛鳥の如く現場から逃げ去った。

恐ろしい暗殺状況だった。

落ち着かぬ心を、客席に強ひて落ち着かせようと努力してゐるQ X 30の笹枝弦吾だった。  
どとどとどとどとど。  
がたーン。

といふ異様な物音を餘所ながら聞いた。

(ウツ、やつたな。)

第五景「山賊邸展望臺」の幕はスル／＼と下りた。

舞臺裏には異様な混亂が起つてゐるやうだった。

観客は何事とも知らぬながら、少しづつざわめいてきた。

緞帳が大きく揺れて、座長の丸木花作が、鬘だけ外した舞臺姿のまま、で現れた。

『皆さん。お静かに願ひ上げます。唯今女優が一人、急病で亡くなりました。しかしもう事は済みましたから、御安心の上、お仕舞までごゆるりと御見物願ひます。では直ちに第六景「奈良井遊廊」の幕をあげます。』

うわーと何も知らない観客は拍手した。

座長が引込むと、緞帳は別に何事もなかつたかのやうに、スル／＼と上へ昇つていつた。そして賑やかな囃の音につれて、シヤン、シヤンと鳴る金棒の音、上手から花車が押し出してきたかのやうに、花魁道中が練り出してきた。

提灯持ちが二人、金棒引が二人、續いて可愛らしい禿か……。

『呀ッ。』

と大聲で叫んだのは、客席のQ X 30の弦吾だった。

見よ、確かに死んだ筈の義眼の副司令が、眞紅な禿の衣裳を着て、行列の中を歩いてゐるのだ。これが驚かすにゐられようか。

『シ、しまつた！』

と気がついたときは、もう既に遅かつた。隣席の五十坂を越したと思ふ男が、年齢の割には素晴らしい  
強力で、弦吾の利腕をムツと押へた。

「話は判つてゐる筈だ。さア静かに向うへ來給へ。」

その一語で、すべては終つた。魚眼レンズを透した寫眞を調べてみるまでもなく、大聲をあげたりし  
て、もう明瞭な失敗をしたQX30だつた。もう再度、生きて此のレビュー館は出られなくなつた。

萬事休す！

×

義眼の副司令の女を、柳ちどりと思つてゐたのは笹枝弦吾の惜しい誤解だつた。柳ちどりは確かに機  
關銃で殺された踊り子だつた。この柳ちどりは、第五景に出る段になつて、急に烈しい頭痛に襲はれた  
のだつた。出場は迫るし、遂に己むなく副司令が柳ちどりに代つて出たわけだつた。そこで彼女は柳ち  
どりと間違へられるやうな事になつた。次の第六景「奈良井遊廓」の場で正しい持役で出演したわけ  
だつた。柳ちどりでなければもう海原真帆子に決つてゐる。皆さんは其の名前が「禿」といふ役割の下  
にあるのを既に御存知の筈である。

海原真帆子こそ幸運なる副司令の藝名だつた！

### ネオン横丁殺人事件

1

近頃での一番さむい夜だつた。

曆のうちでは、まだ秋のなかに數へられる日だつたけれど、太陽の黒點のせりでもあらうか、寒暖計  
の水銀柱はグンと下の方へ縮んでしまひ、その夜更、戸外に或ひは立ち番をし、或ひは黙々として歩行  
し、或ひは軒下に睡りかけてゐた連中の誰も彼もは、公平にたてつゞけの嚏を發し、  
「ウウウン、今夜は莫迦に冷えやがる。」

といったやうな意味の獨言を吐いたのだつた。

獵奇趣味が高じて道樂に素人探偵をやつてゐるといふ變り種の青年理學士、帆村莊六君も、丁度この  
戸外組の一人だつた。彼は今、午前三時半に於ける新宿のブロードウェイの入口にさしかかつたところ  
である。

大東京の心臓がここに埋まつてゐると謂はれる繁榮の新宿街も、この時間には、まるで湖の底に沈

んだ廢都のやうな感があつた。グロテスクな裝飾をもつた背の高い建物は、煤色の夜霧のなかに、ブルブル震へながら立ち竝んでゐた。ずつと向うの十字路には、架空式の強い燭力の電燈が一つ、消しわすれたやうに點いてゐて、そのまはりだけを氷山のやうに白くパツと照しだしてゐた。

アスファルトの舗道に、凍りつきさうな靴を、とられまいとして、もぐやうな足どりの帆村莊六だつた。

『鐘わア鳴アる、鐘わア鳴アるウ。マロニイエのオ……』  
 どうやら彼は、氣持でゐるらしい。傍へよつてみると、ジヨニー・ウォーカーの香がブンブンすることであらう。どこから今時分までできたのか知らないが、多分代々木あたりの友人の宅での徹夜麻雀の席から、例の病で眞夜中の街へ滑りだしたものであらう。

身體がヨロ／＼と横へ傾いた拍子に、灯のついてゐない街燈の鐵柱がブーンと向うから飛んできたやうに思つた。こいつは奇怪なりと、ヤツとそいつを兩腕でうけとめたが、ゴツリと鈍い音がして頭部をぶつつけてしまつた。その拍子に正氣にかへつた。

『おお、つめたい。』

さう云つて彼は、兩手を鐵柱から離れた。抱きついた鐵柱は氷のやうに冷えてゐた。うつかりそれを抱へた兩手は急に熱を奪はれて感覺を失ひ木乃伊の手のやうに収縮したのを感じた。ひよいと眼を高くあげると、兩側の建物のおでこのところに、氷柱のやうなものが白くつめたく光つて見えるのだつた。

『氷柱ができるやうな夜かいな。』  
 眼をこすりこすり幾度も見直してゐるうちに、帆村はウフウフ笑ひだした。

『なアんだ、ネオンサインか。そして此處は正しくネオン横丁。わしや、すこし酔つてるね。』

それは、新宿第一のカフェ街、通稱ネオン横丁とよばれる通りだつた。氷柱と見えたのは、消えてゐるネオンサインの硝子管だつた。これがまだ宵のうちであれば、赤、青、緑の色彩うるはしい暈光が、兩側の軒並に、さまざまのカフェ名や、渦巻や、風車や、カクテル・グラスの形を縫いだして、このネオン横丁の入口に立つたものは、その絢爛たる空間美に、呀ツと歎聲を發せずにはゐられない筈である。だが唯今は丑滿時をすこし廻つた午前四時ぢかく、泥のやうに熟睡してゐるネオン横丁を、それと見まぢがへたのは、あながち帆村莊六が酔つ拂つてゐるせゐばかりでもなかつた。

彼は鐵柱の傍を離れると、なほも踰躑と歩みを運んで、たうとうネオン横丁をとほり抜け、その辻の薄暗い光の下に暫く佇立してゐたが、決心がついたのであらうか、その儘まつすぐに三越裏の壁ぎはを匍ふやうにつたはり、架空燈があかるく點いてゐるムサシノ館前の十字路の、丁度眞中まで辿りついたのでつた。

『おや、なんだらう……』

夜の靜寂を破つて、ドタンといふやうな音響が、突然彼の鼓膜をうつた。それは急にどんなものがたてた音であると云ひ當てられない程の、やや鈍い、さまざま大きくない音であつて、どうやら、彼の背

後一二丁のところから響いてきたやうに思はれたのだつた。彼は半ば探偵意識を活躍させながら、一方ではその意識を浅ましく舌打ちしながら、後方をずつと見渡して、またもや別な物音がするかしらと耳を澄ましてゐたが、それから後はカタリとも音がせず、先刻鼓膜をうつた音でさへ静寂の中にとけこんで、あれは自分の耳鳴りであつたらうかと疑はれるのだつた。五分、六分、七分……。

「呀ッ、怪しいやつ……。」

ネオン横丁の出口にあたる四ツ角の、薄暗い光の下に、何者とも知れぬ人影がバツと映つたが、忽ち身を翻して電車道の横丁へ走りこんだ。その人影は帆村莊六の醒めきらぬ眼にハッキリした印象をのこさなかつたが、和服を纏つた長身の男らしく思はれた。

「事件だ！」

彼はさう叫ぶと、今度こそは本當に正氣になつて、あの人影がうつつたネオン横丁の出口をめがけてバタ／＼と駆けた。その四つ角から左に曲つて、人影を追つたがどうしたものか、どこにもその姿は見當らなかつた。電車道を越えて、小路の多い大久保の方へ逃げこんだものと見える。さうだとすると、追跡は全く不可能になる。

帆村は追跡をあきらめて、元の横丁へ、とつてかへした。いまの人影は、どこから出てきたのだらう。それから例の怪音は、どの家から發したのだらう。どこかそのあたりに、今にも屍の匂ひがブーンとして來さうに思はれた。

彼は怪音の出所を、ネオン横丁と断定した。それでその横丁にとびこむと、向うの端まで家並を、ザツと一通り睨みながら、通りぬけたが、入口の扉や、窓などが開いてゐる家は一軒もなかつた。(こいつは間違つたかな。)

さう思ひながら、こんどは兩側の窓下と戸口を一々丁寧に見てゆくことにした。彼の身躰みの一つであるポケット・ランプをバツと點けると、まづネオン横丁の入口に最も近いカフェ・オソメの前に跼んで戸口の前や、ステンド・グラスの入つた窓枠などを照し、なにか異状はないかとさがしたが、そこには血潮も垂れてゐなければ、泥靴の生々しい痕もない。扉は押してもビクとも動かなかつた。では此のカフェ・オソメも大丈夫であらう。こんな風に、隣りから隣りのカフェへと、表口を一々しらべていつた。だが、何處にも異状が見當らなかつたのだつた。

「人殺しイ。うわあ、誰かきて……。」

イキナリ帆村の頭の上で、婦人の金切聲があつた。それは丁度、四軒目のカフェ・アルゴンの前だつた。悲鳴は、その三階と覺しいあたりから發したやうだつた。

「うん、果して事件だ。さつきののは、するとピストルの音だつたな。」

帆村莊六の酔ひは完全に醒てしまつた。彼はドシンドシント、カフェ・アルゴンの扉に身をぶつつけた。扉は意外に苦もなくバタリと開いた。近所では、やつと氣がついたものとみえて、窓をあける音や、人聲や、下駄のかち合ふ音が、そこら近所に騒々しく湧きおこつた。

帆村が一步足を踏みこんだところで、靴先にカタリと當る何物かを蹴とばした。懐中電燈で探してみると、それはダンディ好みの點火器だつた。彼は手巾をだして、それを拾ひあげると、ポケットに收ひこんだ。これも事件の謎をとく何かの材料かもしれない。

店をとほりすぎ、洋酒場の竝ぶうしろに、三階へつゞく螺旋階段があつた。二階へも別な階段があつたが、二階と三階とを通ずる階段はなかつた。帆村は螺旋階段に手をかけると、スルスル三階へ登つていつた。

『やあ、——』

三階をのぼりきつた室には、けばけばしい長襦袢を着た三十ぢかい肥肉の女が、桃色の夢がまだ漂つてゐるやうなフカフカした寢床の上に仆れてゐた。その横に、も一つ寢床があるが、そこに寝てゐる人の姿はなかつた。

『君、しつかりなさい、どうしたんです。』

帆村は女の艶かしい肩を叩いた。

すると女は、ますます顔を夜具の中に埋めるやうにして全身を戦かせながら、左手をツとあげて、無言のまゝ表口寄りの隣室を指すのだつた。さてはこの隣に、屍體が轉つてゐるのであるか。

『おお、これは——』

帆村は、隣室の襖に手をかけたが、これが頑として動かなかつた。よくみると、襖は襖だが、特製の

もので、こつちからみると紙が貼つてあるが、裏の方は檜材かなにかの堅い板戸になつてゐる。その板戸に内部から錠前がかかつてゐるのだつた。なんといふ嚴重なしまりをしてゐる室なんだらう。

『君、錠はありませんか。』

女は蒲團に顔を伏せたまま、かぶりを振るばかりだつた。帆村は、ヂリヂリしてくる心をやつと押へつけながら、室のうちを、あちこちと見廻したが、襖がすこし開きかけてゐる押入に氣がつくと、急に眼を輝かしたのだつた。

それは江戸川亂歩が『屋根裏の散歩者』を書いて以來、開けた自由通路だつた。押入の襖を開くと、女給の化粧道具や僅の梱などが抛りこまれてゐる二重柵の上にとびあがつた帆村莊六は、天井板を一枚外して天井裏にもぐりこんだ。それから、嚴重なしまりのある隣室と思はれる方向へ、腹匍ひになつてすすんでいつたが、電線のやうなものに、片手を挟まれた拍子に懐中電燈をパタリと落してしまつた。

『ちえッ！』

光は消えて、帆村の眼は眩んだ。

イライラしてくる數十秒間、やつと眼が闇に慣れてきた。

すると、眼の前に、ポーツと光る猫の眼玉のやうなものが見えるではないか。ギョツとして反射的に身を引いたが、よく見ると何のことも、天井裏の小さい節穴だつた。

(こいつはいゝものがめつかつた。)

事件館蟲爬

帆村は、節穴の方に、ギリギリと匍ひよつた。節穴は思ったより大きく一錢銅貨大もあつた。それに片眼をあて、ソツと下の方を覗いてみた。

『呀ッ。』

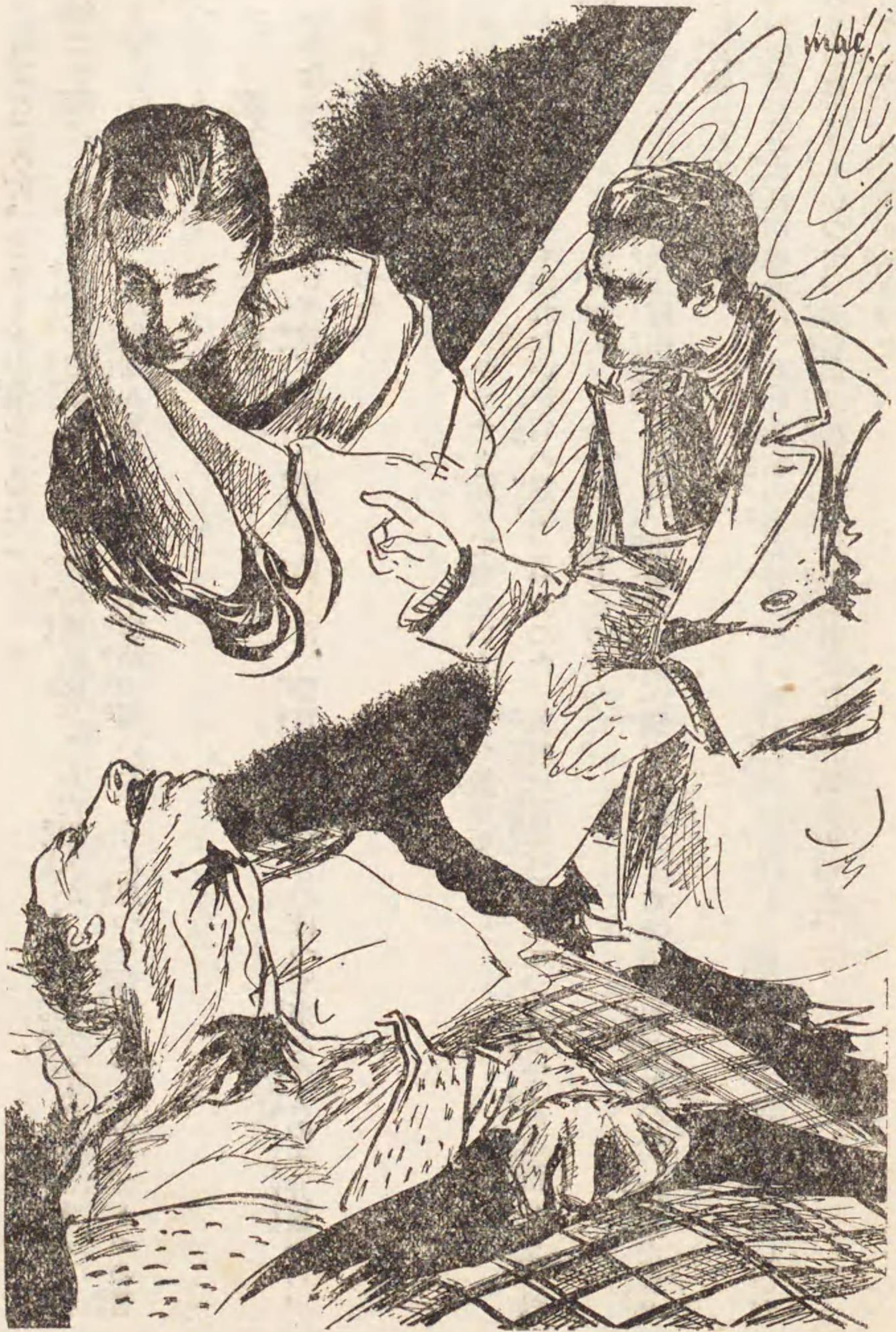
孔の眞下には、はたして、顔面を眞紅に血潮でいろどつた一個の惨死體が、ほのぐらい室内燈の光に照しだされて、横たはつてゐたのだつた。それは、年の頃は五十がらみのいやしい出齒をもつた男だつた。彼は、寢床の中に、天井の方を眞直向いて睡つてゐるところを、撃たれたものらしい。傷は致命傷だつたと見えて苦しみがいた様子は一向になかつた。

折から下では、ドシンドシンと凄じい音がして、その度に天井までビリビリと響けてくるのだつた。警官たちが駆けつけて、いよいよ、嚴重な板戸をうち破つてゐるのだらう。

帆村は屋根裏へ匍ひあがつたついでに、そのあたりの様子を見て置きたいと思つた。それで懐中電燈を落したあたりを手さぐりで探してみた。まづ手にあつたのは、柱の切り屑のやうな木片だつた。のけようと思つてひつぱつたが、しつかり天井裏にくつついてゐる。その横の方に手を廻すと、ヒイヤリと金具らしいものが、指先にふれたので、それをグツと掌のうちに握つた。

『おや、これは懐中電燈ではない。』

ズシリと重みのある、そして大變冷たい物體だつた。暗闇の中に、仔細に手さぐりをしてみると、正しくそれはピストルだつた。



『こんなところに、ピストルが落ちてゐた。』  
 彼は一瞬にして或る場面を想像した。この屋根裏に忍びこんだ犯人が、この節穴から、下の老人を狙ひうつたのであると。では先刻ムサシノ館前の十字路で聞いたやうに思つた音響は、このピストルの音だつたかも知れない。

『オイ、誰かッ。降りてこい！』

いきなりサツと明るい光線が帆村の横顔を照した。警官が、さつきのぼつて来た押入の天井裏から、こちらを誰何したのだつた。

『僕は……』

『文句があるなら後でいへ。サツサと降りて来ないと、ぶつ放すぞ。』

本氣にぶつ放すかも知れない警官の意氣ごみだつた。帆村は苦笑ひをして、それ以上の頑張りをやめ、拾つたピストルだけを獲物に、そのまま引返したのだつた。

警視廳から捜査課長大江山警部などの、刑事部主腦が駆けつけてくるまでの帆村莊六は、滑稽な慘めさに封鎖されてゐた。

『外山君。』と大江山課長は、その警官の名を呼んだ。『帆村探偵の素狀も一應調査しておいた方がいだらうかね。』さういつて、警官の非禮を婉曲に帆村莊六に詫びるのだつた。

さて正式の取調が始まつた。

殺されたのは、このカフェ・アルゴンの主人である蟲尾兵作だつた。

その隣室にゐた女性は、同人の妾である立花おみねと呼ぶ者だつた。

誰が殺したか。

殺した手段は、帆村が発見したピストルによることは、大體明かであつて、なほ屍體解剖の上で確められる手筈になつた。では何物が、天井裏にのぼつて、あの節穴からカフェ・アルゴンの大將蟲尾兵作を狙ひ射ちにしたのか。

『おみねさん。』と大江山警部は、悄氣きつてゐる大將の妾に言葉をかけた。『この部屋には寢床が二つとつてあるが、一つはお前さんの分で、もう一つは誰の分なんだい。』

『ハイ。それはアノ……』

『はつきり云ひなさい。』

『ハ、それは、なんでございます、うちのナンバー・ワンの女給、ゆかりの寢床なんです。』

『ウンさうか。で、そのゆかりさんは見えないやうだが、どうしたんだい。』

『それがちよつと、アノ、昨夜出たつきり歸つてありませんので……』

『なア、おみねさん。胡魔化しちやいけないよ。敷つばなしの寢床か、人が寝てゐた寢床か、ぐらゐは、警視廳のおまはりさんにも見分けがつくんだよ。』

このとき帆村の頭のなかには、ネオン横丁の出口のところで見えた怪しの人影のことがハッキリ浮かん

できたのだつた。

『言へないね。』と大江山警部は頷をなでた。

『ぢや別のことを訊くが、大將は誰かに恨みを買つてゐたやうなことは無かつたかね。』

『それはございます。妾の口から申しますのも何でございますが、こゝから四軒目のカフェ・オソメの旦那、女坂染吉がたいへんいけないんでございますよ。このネオン横丁で、毎日のやうに唾み合つてゐるのは、うちの人と女坂の旦那なんです。いつだかも、脅迫状なんかよこしましてね。』

『脅迫状を——。そいつは何處にある。』

『主人が机のひきだしにしまつたやうですが……』と云つておみねは机をかきまはしてゐたが『あ、ありました、これです。』

『どれどれ。』大江山警部は、状袋に入つた脅迫状といふのを取上げて、聲を出してよんだ。

すぐネオン横丁から出てゆけ。ゆかないと、さむい日に、  
てめいのいのちは、おしやかになるぞ。

『なんだか、をかした文句だな。さむい日と断つてあるが、こいつは當つてゐる。おしやかになるといふのは『毀す』といふ隠語だがこれは工場なんかで使はれる言葉だ。——おみねさん、この脅迫状には名前がないが、どうして女坂染吉とやらが出したとわかるんだい。』

『だつて、外には、そんな手紙をよこす人なんて、ありませんわ。』

『そいつは、何ともいへないね。』と警部は云つて、ちよつと考へ込んでゐたが、『この邊で工場へ行つてゐる人とか、職工あがりといふ種類の人を知らないかね。』

『ああ、あいつかも知れませんが、ネオン・サイン屋の一平です。あれはこの横丁の地廻りで、元職工をしてたので、ネオンをやつてゐるんです。うちのネオンも、一平が直しに來ます。』

『ふうん。一平と蟲尾とはどんな交際だい。』

『さあ、別にききませんけれど……。』

おみねは、やつと氣分をとりもどしてきたやうだつた。

『おみねさん。』さう云つて口をはさんだのは先刻から黙つて横にきいてゐた帆村莊六だつた。『その一平といふのはどんな身體の男なんですか。』

『ネオン屋の一平は、背が高くて、ガニ股でいつも青い顔をしてゐますよ。』

『ほほう、背が高いんですね。』帆村は、薄暗い灯影で見た男も背が高かつたのを思ひ出した。『では、あなたはこのなものを御存知ありませんか。』

さういつて此處の入口で拾つたライターを掌の上にのせて、おみねの前にさしだした。

『あッ、それは——』それを一と目みたとき今まで明るかつたおみねの顔色が、さツと蒼くなり全身に軽い痙攣までがおこつたのだつた。



「このライターは誰のです？」 帆村莊六は、おみねが驚駭にうちふるへてゐる前に、このカフェ・アルゴンの入口で拾つたライターをさし示した。

「……い、一平のでせう。」と、おみね。

「なに一平のライターだつて。」 大江山警部は身體を前へのり出した。「おみねさん、君が先刻返事をしてくれなかつたことがあつたね。この二つの寢床の一つは君が寝てゐたが、今一つには誰が寝てゐたか。それはナムバー・ワンの女給ゆかりの蒲團なんだから。入つてたのは別人だつた。いいかね。この帆村君は、さつき四時前に、ここから長身の男が逃げてゆくのを發見したんだ。つゞいてライターをこの家のうちで拾つた。すると、こつちの蒲團（と一方の寢床を指しながら）には、その背の高い、そのライターの持ち主が寝てゐたのだ。もしそのライターがネオン屋の一平のやつたら、お前さんはここで一平と寝てたことになるよ、それでいゝかい。」

「まア、誰が一平なんかと……」

「もう一つお前さんに見せたいものがある。」

76 さう云つて大江山警部は帆村に目交せをして屋根裏で拾つたピストルをおみねの前につきつけた。「このピストルを知らないかい。」

「ああ、これは……。これこそ一平のもつてたピストルです。あいつは、これでいつかあたしのことを……。あたしのことを……。」

おみねはなにを思ひ出したものか、ヒステリックに喚ぎだした。

「やつぱし、あいつだ。あいつだ。一平が主人を撃つたのです。その外に犯人はありません。さうなんですよオ、さうなんです。」

「これ、おみねさん、しつかりしないか。おい外山君、この婦人を階下へ連れてつて休ませてやれ。」 おみねが去ると、三階には係官一行と帆村探偵とだけが残つた形になつた。

「どうだ帆村君。」 大江山警部はにこやかに呼びかけた。「これは單なる痴情關係で、一平が女給ゆかりの身代りにこの寢床にもぐつてゐて、頃合を見はからつて、屋根裏にのぼり、主人の蟲尾をうつつて逃げ、その途中で入口にライターを落とし四つ辻では君に見咎められて、逃走したと解釋してはどうかね。」

「だが、同じ逃げるものなら、どうして寢床にぬくぬくと入つてゐたのでせう。隠れるところはカーテンの後でも、押入の中でもいくらもありますよ。」と帆村は反駁したのだつた。

「うん、そいつはかう考へてはどうか。すこし穿ちすぎるが、あの夜、おみねは蟲尾の寢床で彼の用事を果すと、この部屋に退いた。爺さん便所に立つときに、隣の蒲團をみて（ゆかりの奴寒がりだから頭から蒲團をかぶつて寝てやがる）と思つた。それから再び自分の室に入ると、脅迫状が恐いものだから、嚴重に錠をおろして寝た。そこでおみねは、先客の一平が寝てゐるゆかりの蒲團へもぐりこんで、

午前三時半までゐた。それから頃合よしといふのであの犯行が始まつた。――』

『それにしても午前四時近くの犯行は、すこし遅すぎますよ。』

『なあに、一平が脅迫状に寒い日にやつつけると書いた。一日のうちでも一番寒い時刻といふのは午前四時ごろだ。で、合つてゐるよ。』

『えらいことを課長さんは御存知ですね、一日のうちで午前四時近くが、一番気温が低いなんて。それはそれとして、僕にはどうもびつたりしませんね。もう一つ気になるのは、ドーンとピストルが鳴つてから犯人が逃げだすまでの時間が、十分間ちかくもありましたが、これは犯罪をやつた者の行動としては、すこし機敏を缺いてゐると思ふです。タツブリみても三分間あれば充分の筈です。しかも犯人は十分もかかりながら遽てくさつてライターを落とし、おみねさんは胡麻化すにかいて、ゆかりの寢床を直すことさへ気がつかなくなつた。これから見ても兩人は、餘程あわててゐたんです。計画的な殺人なら、なにもそんなに泡を喰ふ筈はないのです。』

『うむ、すると君の結論は、どうなのだ。』

『僕にはまだ結論が出ません。』と帆村は首をふつて云つた。『だが、この事件を解くにはもつと澤山の關係者がでてこないかぎり、三次方程式の答へを、たつた二つの方程式から求めるのと同じに、不可能のことです。』

78 『ほほう、すると、君はゆかりのことなんかも怪しいと見るかね。』

79 そこへドタドタと蹙音がして、さつきの警官外山が上つてきた。

『課長どの、唯今、女給のゆかりが、こつそり歸つてきたのを、こゝへひつぱりあげて参りました。』

『なに、ゆかりといふナンバー・ワンが……』

ふりかへつて見ると、その階段の上り口に高價な毛皮の外套を着た、ちよつとみると入江たか子のやうな洋装の娘が立つてゐた。

『おお、ゆかりさんか、ちよつとこつちへ来て下さい。』物馴れた大江山警部は、こともなげに、彼女をさしまねいたのだつた。

『あなた、昨夜、何時ころから出て、どこへ行つてました、叱るわけぢやないから、ドンドン云つてく下さい。』

『あたし、あのウなんです、昨夜は、ちよつと外泊したんですが……』と、彼女は行末を契つたNといふ青年と、多摩川の岸にある巨風呂へ泊りに行つたことを、眞直ぐに告白した。さうして、午前五時近く、曉の露を吹きとばしながら自動車で此處まで歸つてきたのだと云つた。

(ウン、もう夜明けだ。)

帆村は、いつしか白く明るい光線が忍びこんで来た室内を、もの珍しさに眺めまはしたのだつた。

『あなたに、ちよいと見て貰ひたいものがあるんだが、このピストルと、ライターに見覚えが無いですか。』と大江山警部がいつた。

『このピストルですね、オヤヂを射つたのは。さあ、見覚えがありませんね。こつちのライターは……おや、これは、あの人のだ。』さう云つて、彼女はライターをキユツと掌のうちに握ると、云はう云ふまいかと思案をするやうな眼付をして、課長の顔をチラリと見た。

『おみねさんが教へてくれたんだがね。』

『まあ、もう白状しちゃつたんですか。そいぢや私が云ふまでも、これは銀さんのよ。』

『なに、銀さん。』警部はキユツと口を結んだ。

『銀さんつて誰のことかい。』

『おや、マダムは銀さんのだと云はなかつたの、まア悪いことをした。でも、かうなつたらしようがないわ、銀さんつて、マダムのいい人よ、木村銀太といつて、グリー・クーパーみたいなつばさんよ。』

『一平と、その銀太君とは、どつちが背が高いんですか。』と、横合から帆村がきいた。

『それはね。』と、ゆかりは新車の質問者の方を見てちよつと顔を赤くして云つた。『どつちもどつちのつばですわ。』

『銀太といふのは、ここへもちよくちよく忍んで来るだらうね。』と大江山警部は訊いた。

『私が、いいだしにつかはれてるのよ。』さう云つて彼女は寢床の一つを指して鼻の先でフンと笑つた。

『いやその位で、ありがたう。』

警部は外山に、彼女を下げるやうに目交せした。二人は又元の階段をトコトコと降りていつた。

『いよいよ足りなかつた最後の方程式がみつかつたやうだね、帆村君。』

『さうですね。』

『おみねと、その情夫の木村銀太との共謀なんだ。さつき一平が寢てゐたと思つたのはあれは銀太なんだ。君が見た人影つてのもネ、ありや銀太なんだよ。かうなるとピストルも誰のものだか判つたもんぢやないよ。一平からピストルを盗むことだつて出来る。』

『僕はさうは思ひませんね。今の話で、おみねと、こつちの寢床に忍びこんでゐた情夫の銀太とが犯行に關係のないといふことが判つたんです。』

『そりやまた、どうして。』警部は聞きかへした。

『おみねと銀太と一緒に寢てゐるところに、思ひがけなくあのピストルの音がしたので、二人は吃驚して遽で逃げたのですよ。銀太が居てはかかり合ひになるから、おみねは銀太を逃がしたのです、銀太は裸の上に着物を着直して、いろんな持ちものを懐にねぢこんで逃げるうちに、あのライターを落としたりたんです。銀太が相當の道程を逃げたところを見はからつて、マダムのおみねが『人殺しッ』と怒鳴つたんです。』

『すると、あのピストルは、誰が射つたことになるんだい。』

『調べてみなければわかりませんが、多分ネオン屋の一平が射つたんでせう。カフェ・オソメの女坂も

怪しいですがね。』

『さうかね。僕はさつき云つたやうに、情夫とおみねの實演だと思ふよ。とにかく、他の連中の動靜も多田刑事に調べにやつたからもう直ぐ判るだらう。』

その話の半ばへ、噂の多田刑事が、ヒヨくり顔を出した。

『課長、女坂染吉は家に居ましたよ。昨夜十二時から一歩も外へ出なかつたさうです。腹が下つたとかで、夜つびて女房に、腹をさすらせたり、足をもませたりしてゐたさうです。』

『重寶な現場不在證明ができたものだな。』と課長は、薄笑ひをした。

『ゆかりのことはH風呂にきいて午前四時半まで、Nといふ男と滞在してゐたことが判りました。それから大久保一平、あのネオン屋ですね、あいつについちや意外なことがあるんです。』

『ほほう、どうしたといふんだ。』

『あいつの家を叩きおこしてみましたが、昨夜は夕方から出たつきり、朝方まで、たうとう歸つて來なかつたんです。』

『それで……』

『それでこいつは怪しいと思つて、歸りがけに淀橋署に、ちよつと寄つて、偶然一平のことを聞いてみましたところ、意外にも一平は上野署に留置されてゐることが判つたんです。』

『なんだ、一平は上野に抛りこまれてゐるつて？』課長は不審にたへぬといふ顔付をするのだつた。

『實は一平さん、昨夜十二時ごろから、山下のおでん屋の屋臺に嚙りついて、徳利を十何本とか仆して、くだをまいたんださうです。揚句の果、午前二時近くになつて、店をしまふから歸つて呉れと、屋臺の親爺が云ふと、なにを生意氣な、といふので、おでん屋の屋臺をゆすぶつて、到頭そいつを往來に、ぶつ仆しちまつたんです。そこで上野署へ一晩留置といふことになつたんですが、身柄は今朝五時半釋放されました。』

『さうか、こいつは又、素晴らしい現場不在證明だ。ねえ帆村君、あのピストルが屋根裏でズドンと鳴つた頃には、一平の奴上野署の豚箱のなかで、蚤に噛まれてゐたらしいよ。』

『……』帆村は黙りこくつてゐた。

『それで多田君』と警部は刑事の方を向いて云つた。『木村銀太といふ男の行方をしらべて貰ひたい。彼奴はマダムのおみねと共謀して大將の寢首を搔いたらしいんだ。——さア、そこから室調を、便利な階下へうつすことにしようぢやないか。』

帆村莊六の面目玉は丸潰れだつた。彼が犯人と指摘した人物は、皮肉にも、警察署の留置場に一時晩送つて、この上ないアリバイを拵へてゐたのだつた。帆村に、如何なる整然たる推理があつても、かのアリバイの事實はそれを木ツ葉微塵に吹きとばしてしまつたといつてよい。

(だが、もしや……)と、帆村は螺旋階段を靜かに下におりながら、なほ諦めかねる思索にとりすがつた。(もしや、犯人が現場にゐなくて、ピストルが射てるとしたら、どうだらう。それは果して絶對にあ

り得べからざることだらうか。一平みたいな人物には、一體どれ位までのことなら出来るのだらうか。あいつは、一個のネオン・サインの看板屋なんだが。

屋根裏のピストル。それに氣になるのは、あの脅迫状の文句、「寒い日にやつつける」といふこと。不圖氣がつくと、階下で男女が聲高に争つてゐる様子だ。

『だつて、どうしても思ひ出せないのよオ。』さう云つて鼻聲を出してゐるのは、先刻のナムバー・ワンのゆかりだつた。

『あんたは、冗談を云つてゐるんだ。よオ、あとでウンと奢つてやるから、早くそいつを出しとくれ。』さういつてゐるのは、まだ聞いたことのない若い男の聲だつた。

『冗談いつてやしないのよ、本當なの。一平さん、ごめんさい、ねえ。』

おお、相手の若い男といふのは、一平なのだ。帆村は階段の中途に突立つて思はず聲をあげるところだつた。

『莫迦なやつだなア、貴様は。うぐん。』一平が苦しさに呻つた。なにか餘程重大なものを、ゆかりに預けたのを彼女が無くしたものらしい。

『番頭さんによく譯を云つて懸合ふといいわ。あたしも、もうせん、あすこの店の質札をなくして困つたけれど、話をしたら、簡單に出してくれたわよ。』

84 どうやらゆかりが無くしたのは、一平の質札らしい。なぜ質札みtainなものを、わざわざゆかりに預

けたんだらう。

『貴様にはもう頼まないや。』

さういふと、一平は裏口へ出て行つた。

戸外へ出ると一平は、あたりを氣にしながら、早足にドンドン駆けだした。彼は電車を越えて、大久保の長屋町の方に走りこんだが、それから露次をくねくね曲つた末に、「おうの屋」と白字を染ぬいた一軒の質屋へ飛び込んだ。

『こなひだ預けた銘仙の羽織をちよつと出して貰ひたいんだが。』

『ああ、その羽織なら、今うけだして持つてお歸りになりましたよ。』

『しまつた。そいつは質札を拾つてきやがつたんだ。それに違ひない。そいつは、どんな人間だつたい、番頭さん。』と、一平は眞赤になつたり蒼白になつたりして、地團太を踏んだのだつた。

そのとき薄暗い土間の隅から思ひがけない聲がした。

『芝居もどきで氣がさしますが、その人間といふのは、僕なんです。』

『おお、あんたは、誰です。』と一平は目を睜つた。『羽織をかへして下さい。あれは私のだから。』

『羽織は返しますよ、ほら。だが、その襟に縫ひこんであつた此の契約書は、僕に貸して下さい。僕は素人探偵の帆村莊六といふものです。』

『ウヌ！』獅子奮迅にとびついてくる一平を軽く左に外すと、再び一平が立ち直つてくるその頃のあた

りを、ウーンと下から突きあげたアツパー・カット美事にきまつて、哀れ一平は帆村の足許に長々と横に伸びた。

X

事件のあとで、素人探偵の帆村莊六は、こんなことを發表した。

「犯人一平が考案した現場不在證明のある殺人方法といふのは、實はネオン・サインと、當日の異常な氣温降下とに關係があつたんです。さういふと不思議にお思ひでせうが、屋根裏へ仕懸けて置いたピストルを、電氣仕掛けで發火させたんです。

さういふと不思議にお思ひでせうが、實は屋根裏に仕掛けてあつたピストルの引金を、電氣仕掛けで引張るやうにしてあつたのでした。その電氣仕掛けは、ネオン・サインの硝子管と、あれをとりつけてあつた壁とに仕掛けてあつた銅で出來た二つの接點が普段は離れてゐるために働かないやうになつてゐたのです。一體ネオン・サインは、建物の一番高い壁體にとりつけてありますが、下から見ると、嘸ガツシリとネオンの入つた硝子管が止めてあるとお思ひでせうが、本當は、たつた一ヶ所だけしつかり留め、一方は、ちよつとした支持物の上に乗つてゐるだけなんです。これは、壁體と硝子管との温度に對する伸び縮みが違ふところから必要なわけなんで、晝間は硝子管よりも壁體がズツと伸びてゐますが、夜になると壁體はグツと縮まるのです。高い屋上では、この伸縮がことに著しいのです。犯人一平は、これに目をつけたのでした。二つの銅の接點は屋内に入つてピストルの引金のところと電燈線に繋つてゐまし

た。晝間はこの接點がかなり離れてゐますが、夜間となり曉となると壁體の方が硝子管よりもグンと縮んでくるために接點の距離はずつと近づきます。しかし普通の寒さではこの接點がまだ接觸するほどまでになりませんが、あの事件のあつた夜のやうに、猛烈な寒氣が襲つてくると、壁體は著しく伸縮し、壁體とネオン・サインの硝子管とにとりつけて置いた二つの銅の接點が遂に火花を出して接觸するのです。接觸すると、その接點を通じ始めて電燈線からピストルのところへ電流が流れて引金をグツと引張ることになるから、そこでピストルがドカンと發射される順序になるんです。この仕掛けは、あのやうに箆棒に寒い曉近くでもなければ、普通の日の晝間はもちろん夜見ても、二つの接點が離れてゐるからそれだけでは鳥渡なんのことやら、怪しまれずに済む筈なんです。あの犯行のあつた日は大變寒い日で、その夜の明け方かく氣温が急降することが判つたので、その夜はきつと、兼ねてカフェ・アルゴンの屋根裏から大將蟲尾兵作の頭を狙はせてあるピストルがズドンと發射するだらうと見當をつけて、殊更宵のうちから上野くんだりへ出掛け、酒の酔ひにかこつけて亂暴狼藉を働いて、故意に留置され、立派な現場不在證明を作つたのです。ピストルが發射されると、その反動で發火装置用の細い電線などは遠方へとんでしまつて、たとへ發見されてもなんとも意味がわからないやうになつてゐたのです。

殺人の動機ですか。あれは僕が一平の羽織の中から抜きとつた契約書を読むとハッキリします。

殺人契約書

一、拙者は蟲尾兵作の殺害を貴殿に依頼せしこと真なり。成功の暁には本書引換に報酬金一萬圓相渡すべきものとす。後日のため一札、仍つて如件

×月×日

女坂染吉團

大久保一平殿

要するに一平なる人物は、和製カボネ團の一員だつたんです。質札を預けたのは、その夜警察でしらべられるのがおそろしかつたのでした。それから無論、カフェ・オソメの主人女坂染吉も、主犯として即日、捕縛されたことは云ふまでもありません。云々。』

白蛇の死

浅草寺の十二時の鐘の音を聞いたのはもう半時前の事、春の夜は開けて甘く惱しく睡つてゐた。たゞ一つ濃い闇を四角に仕切つてポカッと起きてゐるのは、厚い煉瓦壁をくりぬいた變電所の窓で、内部には瓦斯タンクの群像のやうな油入變壓器が、ウウウンと單調な音を立てゝゐた。眞白な大理石の配電盤がパイロット・ランプの赤や青の光を浮べて冷たく一列に竝んでゐる片隅には、一臺の卓子がポツンと置かれて、その上に細い數字を書きこんだ送電日記表の大きな紙と、鉛筆が一本無雑作に投げ出されてゐたが、然し當直技手の姿は何處にも見えなかつた。

今、全く人氣の無いこの大きい酒倉のやうな變電所の中では、たゞ機械だけが悪魔の心臓のやうに生きてゐるのであつた。

スパーク！

リンリンリンリン。

白蛇の死  
白け切つた夜の静寂を破つて、突然けたゝましい音響が迸る。毒々しい青緑色の稲妻が天井裏にまで飛びあがつた。——電路遮断器が働いて切斷したのだつた。

と、思ひ掛けぬ窓のかげから素早く一人の男が飛び出して、配電盤の前へ駆けつけた。彼は慣れ切つてゐる正確な手付きで、抵抗器の把手をクル／＼と廻すと、ガチャリと大きな音を立てて再び電路遮断器を入れた。パイロット・ランプが青から赤に變色して、ぼたりとベルが鳴止む。その儘技手は配電盤の前に突つ立つて、がっしりした體を眞直ぐに、見えぬ何物かを追つてゐるやうであつた。もう四十年輩の技術には熟練しきつた様な男である。——一分、二分。春の夜は闇けて、甘く惱しく睡つてゐた。

『土岐さん！ 土岐さん、一寸……』

不意に裏口へつゞく狭い扉が少し開いて、その間から若い男の顔がヒョクリと現れた。ひどく蒼白い顔をして、明かに何事か狼狽しながら四邊を憚つてゐた。

『おう』くるりと振返つた技手は、『國ちやんか、なんだい？』と、何氣なく配電盤を離れた。

『あの、一寸来てくれませんか、何うも可笑しいんです。お由が仆れちやつて……』

青年は一途に救ひを求めゐるやうな、混亂した表情を見せながら、乾からびた言葉をぐつと呑みこんだ。

『お由——』

『え、仆れちやつたきり、どうしても起きないんです。困つてしまつてね』

土岐健助は濃い眉を寄せてチラリと窓の方を眺めた。

『弱つたな、相棒は起せないし——』

『今夜は誰です？』

『喜多公なんだよ。考へ物だからね』

さつと青年の眼は怯えあがつた。

『ま、この儘にして置いて一寸行つて見よう。何處だい？』

技手は思ひ返した様に、氣輕に青年の肩を押しながら裏口へ出た。乏しい軒燈がぼつ／＼と闇に包まれてゐる狭い露路を、忍ぶやうに押黙つて二十歩ばかり行くと、

『土岐さん、此處！』と、青年は立止つて道を指した。

顔を地につけるやうにして見ると、仰向きになつた、銀杏のやうなお由の圓い顔が直ぐ目についた。頬から、はだかつた胸のあたりまで、日頃自慢にしてゐた『白蛇』のやうな肌が、夜眼にもくつきりと浮いてゐる。のけぞつてゐるので、鬚は頭の下に壓しつぶされ、赤い手柄が耳朶のうしろからはみ出してゐた。

『お由、お由！』

青年は憚るやうに聲を殺して呼びながら、強く女を揺ぶつたが、ぐつたりと身動きもしなかつた。彼は前には幾度かさうして見たのであつたが、もう一度機械的に黒縞子の襟を引き開け、奇蹟にでも縋るやうにぐつと胸へ手を差し入れた。直ぐにむつちりと弾力のある乳房が手に觸れたが、その胸にはもう、彼を散々悩ましたあの灼けつくやうな熱は無く、わづかに冷めて行くほの、温味しか感じられなかつた。死の蛇の心臓は？ (ほら、こんなにな)と、よく彼の手持つて行つては、その強い躍動を示して笑つた心臓



も、バタリと止つてしまつてゐる。

『あゝ、心臓が止つてゐる——』

『なに、心臓が！』

ぼんやり中腰になつてお由の白い顔を眺めてゐた土岐健助は、初めて愕然と聲をあげた。そして、おづおづとお由の硬張つた腕を持つたが、勿論脈は切れてゐた。

『國ちやん、一寸胸を開けて』

青年が力一杯襟をはだけるのを待つて、土岐は心持ち顔を赤らめながらお由の乳房の下へびたりと耳を押しつけて見た。少しの鼓動も無い。すぐに眼瞼をひらいて見たが、瞳孔はもう力なく開き切つてゐた。

『死んでゐる。もう全く呼吸が無くなつてゐるんだ』

『大變なことになつたな——でも、どうして死んだんでせう』

『どうしてつて君、君は今までどうしてゐたんだい？』

さう聞かれると、さすがに青年は此の年輩の技手に對して、赤い顔をした。が、何れにしても今の場合土岐の力を借りるより外、この氣の弱い青年には縋るものが無かつたので、前後も無く早口にかう話し出した。

へ上つて來たのであつた。

『今夜はね、根岸の里へ行つて來るつて胡魔化して來たのよ。私だつて、たまにはゆつくり泊つて見たいもの。——大丈夫よ。まさか親分だつて、そんなに女房を疑つちや、お爺さんの癖に外聞が悪いもの。かまふもんか、知れたら知れた時の事さ』

妖婦氣取りのお由は、國太郎にびつたり寄添ひながら非常に嬉しさうであつた。そして散々この氣の弱い青年をいぢめぬいて、少しも側から離さうとはしなかつたが、つい先刻になつて急に氣が變つてしまつた。

『矢つ張り私、歸つた方が好いわ。あんた怒りやしないわね。又來るには泊らない方が出好いもの、ね』

『だつてもう十二時過ぎだぜ』

『怖かあないわ。かう見えたつて白蛇のお由さんだもの。夜道なんか平氣よ』

『ぢや、其處まで送つて行かう』

『無論だわよ』

お由はまだ國太郎に絡み纏りながら、裏梯子から表へ出た。が、塀を一つ曲つて此處まで來ると、『あら、私紙入れを置いて來ちやつた。ほら、先刻帯を解いた時、一寸本箱の上へ置いたのよ。あんたが悪いんだから、いそいで取つて來てよ』

お由は國太郎の胸を肩で小突いて、二人の時だけに見せる淫蕩な笑ひを顔一杯に浮べてゐた。その濃

艶な表情が、まだはつきりと國太郎の眼に残つてゐるのに――

すぐに紙入れを取つて引返して来た時には、もうお由は此處に倒れてゐたのであつた。

『初めは冗談だと思つたんですよ。けれど、様子が可怪しいんでせう。だから驚いちゃつて――』

『一體、君が此處へ歸つて来るまで、詰りお由さんが一人で此處に残つてゐた時間は、どの位だつたの？』

『三分とは立つちやゐらないんです』

『三分？　そして君が歸つて来た時、この露路に誰も人は見えなかつた？』

『えゝ。はつきり覚えてはゐないけれど、たしか誰も見えませんでした』

が、其時何故か變電所の四角な窓が、爛々と耀いてゐた事を青年は不圖思ひ浮べた。

『困つたね、何方にしても。どうする君は？』

土岐の言葉に、急に自分の立場をはつきり思ひ起して、國太郎は忽ち竦むやうに頭を抱てしまつた。

『僕は、僕は殺されますよ。きつと、なぶり殺しにあはされるんだ！』

それは何んとも言へなかつた。

一體お由は、今戸町に店を持つてゐる相當手廣い牛肉店加藤吉藏の妾兼女房なのであつた。が、悪い

事にはこの吉藏が博徒の親分で、昔「瘦馬の吉」と名乗つて賣り出してから、今では「今戸の親分」で

通る廣い顔になつてゐる。しかもお由はその吉藏親分の戀女房であつた。

今から五年ばかり前、お由がまだ廿歳で或る工場に働いてゐた頃、何處の工場でもさうであるが、夕

方になると、ポイラーから排出される多量な温湯が庭の隅の風呂桶へ引かれて、そこで職工達の一日の汗を流すことになつてゐる。その鐵砲風呂の中からお由の膚理のこまやかな、何時もねつとりと濡れて

ゐる様な色艶の美しい肌が、工場中の評判になつてしまつた。

『お由さんの體は、まるで白蛇のやうね』

その白蛇の様な肌を、何かの用で工場へ來合せた吉藏が一目見て、四十男の戀の激しさ、お由に附纏

ふ多くの若い男を見事撃退して、間もなく妾とも女房とも附かぬものにしてしまつたのである。

かうしてお由は娘から忽ち姐御と變り、あられもない『白蛇のお由』と自分から名乗つて傳法を見習

ふやうになつたが、若いに似ずよく親分の世話をして、執念深く窺ひよる男共は手痛い目にあはされる

といふ評判が専らであつた。

然し魔は何處に潜んでゐるか計り知れぬ。それ程氣の強いお由が、この正月頃から臆病な大學生山名

國太郎にすつかり魂を打ち込んでしまつたのだから――二人の甘い祕密は、幸ひ今日まで親分にも

知れず、數々の歡樂を忍ばせて來たが、こゝにもやつぱり惡魔は笑つてゐたのだ。若しお由の死から國

太郎との祕密が知れたが最後、深い中年者の戀の遺恨で、どんな慘忍な復讐が加へられることであらう。

生きて心地も無いこの哀れな青年を前にして、技手は全く途方にくれたやうであつたが、一方空つば

にして來た變電所の事も氣になるらしく、咄嗟に何りにか、後始末の手段を考へてくれた。

『ね君、今は何うしてお由さんが死んだのか、誰に殺されたのかなんて事は研究してゐる場合ぢや無い

よ。何より君自身の體を心配する必要があるんだ。いゝかね、後三十分で僕の交代時間が来る。さうしたら兎に角二人でお由さんの屍體を遠くへ運んで行かう。詰り君とお由さんとの仲を嘆き出されたい爲にだよ。そして君は、朝の一番列車で當分何處かへ姿を隠してしまふのだ。それが一番安全だからね。——後三十分だ。君はこの屍體を守つて、變電所の物置の後で待つてゐて呉れ給へ。忘れても聲を立てちや駄目だぜ。相棒は喜多公なんだからね」

それは國太郎にとつて非常に頼母しく思はれた程實に冷靜な分別であつた。たゞ不安なのは技手の言ふ相棒の喜多公即ち變電所の技手補田中喜多一で、これは吉藏親分の一の乾分である上に、祕かにお由に想ひを掛けてゐるのだと、國太郎は何時かお由自身の口から聞かされた事もあるので、運悪くかうした所を見附からうものなら、親分に告げるまでも無く半殺しの目にははされるのは言ふまでも無かつた。然し、幸ひ薄氷を踏む思ひの長い三十分は、どうやら無事に過ぎたらしい。やがて足音を忍ぶやうにして土岐健助が物置のかげへ來てくれたのは、もう午前二時を少し廻つた頃であつた。

「ぢや、いゝかい」

言葉少なに技手はかう言つて、無雜作にお由の頭を抱きあげた。國太郎は夢中で足の方を持つたが、どつしりと重い死人の體は思つたより遙かに扱ひ難く、物の十間と歩かぬ中にもう息切がして來た。そして揺りあげる度にしどけなく裾が亂れて、お由好みの緋縮緬がだらりと地へ垂れ下る。その度に彼等は立止つて、そのむつちりと張切つた白い股のあたりを掻き合せてやらねばならなかつた。

「これぢや遣り切れ無い、兩方から腕を擔いで見ようよ」

然し何うして見たところで硬張つた死人を運ぶのは可成りの重荷であつたが、他に工夫のしようもなかつたのでその儘歩き續けた。この露路をぬけてドン／＼橋を渡ると瓦斯會社の横に出る。それを眞直ぐに、左手は深い小川をへだて、墓地、右手は石炭置場になつてゐる暗い道を、何うにか大河畔まで忍んで行つた。そこを左に折れて河添ひに一丁ほど歩くと又左に折れて、間もなく百坪ばかりの空地へ出る。空地の中央には何んとかいふ小さな淫祠が祀つてあるが、その後の闇の中へお由の屍體を下して、二人は初めてほつとした。

幸ひ途中で誰にも見られなかつた事は、彼等にとつて何よりであつた。

「土岐さん、一寸土岐さん！」

大聲に揺り起されて土岐健助が、宿直室の蒲團の中からスッポリと五分刈頭を出したのは、もう朝も大分日が高くなつた頃であつた。

「ヤア！」

土岐は其處に喜多公こと田中技手補が柔かいものをだらしなく着て、棒のやうに突つ立つてゐるのを見出すと、濫い眼を無理に開けるやうにして聲を掛けた。然し喜多公の顔は緊張しきつて蒼白だつた。「あの、今戸の姐御が殺されちやつてね。つい其處にむごたらしく殺られてゐるんです。あつしはこれ

から直ぐ今戸へ行かなければならぬので、すみませんがあなた一つ、今日の當番をかはつてくれませんか』

『へえッ！』

健助は瞬間どきりとしたが、その氣持を隠さずに喜多公の顔を見詰めた。が、喜多公はそんな事に頓着なく、技手が當番の事を承諾すると、風の様に外へ飛び出して行つた。

(むごたらしく殺られてゐる) 土岐は起きようとせず、昨夜の生きてゐる儘に死んでゐたお由の美しい屍體を思ひ描いて、喜多公の残して行つた言葉を不思議に思つた。

『そんな筈はないんだがな』あのお由のあらはな白い胸や太股をまざくと描き出して、土岐はふつと顔を赤らめた。

宿直室の外は火事場の様な人通りであつた。

『まあ、いやだ。そりやいゝ女だつて言ふけど、腕も脚も無いんですつてさ』

『あら、何うしませう。私見るのが怖くなつちやつたわ』

その聲に土岐はがばと跳ね起きた。そして手早く洋服を着てしまふと裏口から飛び出して、群集と一緒に騒ぎ出して居たのである。

平常はがらつとしてゐるあの空地が、今朝はもう身動きも出来ない程の人だかりだつた。土岐はまざと昨夜の屍體と向き合ふ事を恐れながら、それでも人を掻き分ける様にしてどんく前へ出て行つ



た。そして人々の隙から一目お由の屍體を見るなり、餘りの事に彼は危く聲を立てる處であつた。思ひ掛けなくもお由の屍體は、全く裸體にされて、兩腕、兩脚を無慘にすばりと切り取られたまま小川の中に半漬かりになつてゐるのだつた。その白蛇の様な肌は朝日に蒼白く不氣味な光りを帯び、切口は無花果の實を割つた時の如く毒々しい紅黑色を呈してゐた。

(「こんな筈は無い」) 土岐は餘りの事に思はず顔を背けたが、不圖、今頃は多分三十里も東京から離れてしまつたあの氣の弱い國太郎が、若しこれを見たら何んな事になつたらうと思つた。と同時に、彼は自分分が昨夜犯した屍體遺棄罪から、完全に救はれた様な氣輕さも覺えて、もう二度とお由の不氣味な屍體を見る氣はなく、其の儘踵を返したのであつた。

だが何んといふ奇怪な事件だらう。お由は露路に三分間ほど一人で立つてゐる間に、何者にか巧妙な手段で、一つの傷も残さず殺害されてゐた。その屍體は土岐と國太郎の手に依つて空地へ運ばれたが、翌朝になるとそれが一枚の布も纏はずに投出され、しかも何者にかその四肢を切斷された上持去られてゐる。考へやうに依つては、痴情の怨みか何にかでお由を殺した最初の犯人が、なほ飽き足らずに屍體を運ぶ二人の後を付け、其處で再び殘忍な行爲を犯したとも思へるし、或ひは空地に棄てられた後お由は偶然に蘇生して、通り合せた何者かに再びこの無慘な殺害をされたとも思へぬ事は無い。

兎に角、この白蛇のお由の不可解な謎の屍體は、忽ち土地の警察は言ふまでも無く、警視廳強力犯係の大問題となつて、時を移さず血眼の大搜索が開始された。お由の屍體は直ぐに大學病院に運ばれて解

剖に附されたが、其處からは何等犯罪的な死因は得られず、或ひは一種の頓死ではないかとさへ言はれたが、屍體損壞の點から見ても、矢張り他殺説の方が一般に主張された。

そこで屍體は一時亭主の吉藏に下げ渡され、今戸の家へ親戚一同が集つてしめやかな通夜をする事になつたが、其の席上で端なくも意外な喧嘩が始まつてしまつた。といふのは、戀女房の棺の横に坐つて始終腕組みをしてゐた吉藏親分が、つと焼香に立つた喜多公を見て、悲痛な言葉を浴びせたに始まる。

「喜多公、よく覺えて置けよ。殺された女の恨みは七生祟るつていふからな」

「何んですねえ、親分。冗談ぢやねえ」

「なに！ 女房が殺されたつてのに、冗談口を利く亭主が何處にある。てめえの爲を思ふから言つてやるんだ。後世の事を思つたら、今の内に――」

「親分！ 乙に絡んだもの、言ひ方をしやすね」 苦笑ひをしてゐた喜多公は、そこまで言はれるとキツとなつて形を改めた。「冗談なら冗談でいゝが、親分！ それを本氣でお言ひなさるんなら黙つちやるませんぜ。べら棒め、姐御の屍骸が何を喋つてゐるか知つてゐるなア、一人ばかりぢやねえ！」

「何んだと？ てめえはそれぢや、おれの恩を仇で返す氣だな。よし、そんなら言つて聞かせる事があらあ。一體、お由の屍骸を一番初めに見附けて來たなあ何處の何奴だ。あの晩、てめえは何處で何をし

「親分、それぢや姐御を殺したなあ、あつしだと言ふのか！」

「胸に聞いたら判ることだ」

「何んだと！」

さつと茶呑み茶碗が飛んで壁に碎けた。途端に血相を變へた二人が、両方から一緒に飛びかゝつて、  
——が、其の場は佛の手前もあるからとて、居合せた者が仲へ入つてやつと引分けてゐる内に、丁度張  
込んでゐた刑事がどか／＼と踏込んで来た。そして關係者一同はすぐに拘引されてしまつた。

然し二時間ほどすると、エレキの喜多公だけを殘して、他の一同は警察から歸へされる事になつた。  
殘された喜多公はお由の死んだ夜の行動について、何んと思つたか一言も口を利か無かつたのだ。その  
時の吉藏の供述はかうである。

「あつしは十時に店を閉めて、お由が留守だから久し振りで玉の井へ行つて見る氣になりました。今戸  
から橋場をぬけて白鬚橋を渡つたんです。けれど何うも氣がすまないんで、一通りひやかしてしまふ  
と、二時頃には家へ歸つて寢てしまひました。その翌朝、何んの氣なしに聞いてゐると、乾分の一人が  
昨夜喜多を玉の井で見かけたつて噂を小耳にはさんだんで、お由が殺されてゐると言ふ報せを聞いたの  
は、それから間も無くでございました」

では、何故喜多公はその夜の行動を明らかに説明しなかつたか？ 土岐技手が其の夜國太郎に漏した  
言葉では、喜多公こと田中技手補は確にその頃は變電所に勤務中ではなかつたのか？

然し、二三日後喜多公がやつと口を開いた時には、こんな意外な陳述がされてゐた。

「實は、あつしは姐御、詰りお由さんに想ひを掛けてゐたのです。で、幾度も氣を引いて見ましたが、  
なかなか思ふやうにはなりませんので、あの日、灯が點くと間も無くお由さんが泊り掛けて根岸へ行つ  
たと聞きましたので、あつしは根岸の家の番地を人知れず確しかめて、お由さんの後を追つて行きま  
した。根岸へ着いたのは八時頃だつたと覺えてゐます。所が何うしても此處と思ふ家が見當りませんの  
で、今度は一軒々々裏口へまはつて、お由さんの聲を目當に探し廻りましたが、矢つ張り知れませぬ。  
その中に十一時半になつてしまひましたので、何んだか急に馬鹿々々しくもなつて、其の足でぶら／＼  
歩いて引つ返し、千住の萬字樓といふ家へ登つて花香といふ女を買つて遊びました。登つたのは多分十  
二時半か一時頃でせう。翌朝其處を出たのは六時半頃です」

「何故又そんな事を今まで隠してゐたんだ」

「へつへ、姐御の後を附けたなんてうっかり言つては、飛んだ嫌疑が掛かると思ひましたんで——」

警察では直ぐに萬字樓を調べて見たが、大體彼の言つた事に相違はなかつた。

お由の死亡時刻は解剖の結果、午前一時前後といふことになつてゐる。して見れば時間の點からいつ  
て、喜多公は親分の方より嫌疑が薄くなる譯で、一先づ彼も釋放されることになつた。

警察では他に誰も容疑者として拘引して居らず、この事件はわりに無雜作に放置されてゐる如く見え  
てゐるが、其の實搜索は八方に擴がつてゐて、少しでも怪しいと睨んだ者には必ず刑事が尾行してゐた  
のである。然しお由の死後七日までは、これぞと思ふ手懸りは何等得ることが出來ずにゐた。

すると八日目になつて、初めて新しい二つの報告が集つて来た。一つは、あの日以来吉藏の店では冷蔵庫へ入れる氷を五貫目づゝ餘計使つてゐる事實、一つは、あの日を境にして失踪した者の一覽表の中から、山名國太郎といふ大學生がお由に似た年頃の婦人を自室に引き入れてゐる所を一二度見た者があるといふ報告であつた。

お由事件の爲に特設された捜索本部はこの二つの報告に、色めき立つて、主任は直ちに吉藏の店へ警官を向ける一方、山名國太郎の行方を八方に捜索させた。

吉藏は警官の臨検に大小三個の冷蔵庫を直ぐに開いて見せた上、氷の消費量増加については、『何にしろもうこんな陽氣ですから、氷だつて段々殖える一方でさあ』と、軽く説明した。然し主任がその位の説明で満足する筈はなく、當分夜の間刑事を吉藏の店の床下に張り込ませて、何處までも事件の端緒を掴むやうにと手配した。

一方山名國太郎の失踪については、喜多公を變電所へ張つて行つた刑事から、偶然手懸りがついた。といふのは、變電所主任土岐健助宛の無名の手紙から足が付き、スタンプの消印で栃木縣今市附近に國太郎が潜伏してゐると判つたのである。

いよゝ國太郎が逮捕されたとなると、事件は何う展開するであらう。國太郎とお由の密會には證人がある事だし、あの夜土岐技手が現場へ呼ばれた時には、既にお由は死んでゐたのだから、國太郎がこの他殺に全然無關係であるといふ事は説明出来まい。同時にお由の屍體遺棄が明らかになるので、土岐

技手にも嫌疑の餘地が出て来る。其の夜の勤務は土岐一人で他に證人が無いのだから、國太郎の言ふ通りお由が露路に一人ゐるとすれば、其の間に健助がお由を襲ふことも出来たのである。

かうして殺人犯人の嫌疑者は四人となつた。

其の翌日の夕方、山名國太郎は今市から護送されて来た。青年は數日の懊惱にめつきり憔悴して、極度の神經衰弱症に陥つてゐるらしく、簡単な訊問に對してもその答辯は案外手間がとれた。が、結局國太郎は前述の委細を全部自白させられたのである。そして直ちに問題となつたのは土岐健助の行動であつた。先づその屍體遺棄の方法が咄嗟の手段として餘りに計畫的であつた事。殊に、彼は國太郎に向つて、『喜多公が相棒だから——』と言つてゐるが、事實その夜田中技手補は非番であつて、變電所の日記によつてもそれは明らかでな事であつた。では何故土岐がこんな嘘言を弄したか？

その時調べ室の電話が突然響き渡つたのである。捜索主任は直ぐに受話器を取つたが、突然サツと顔色を變へた。そして國太郎の訊問を一時中止すると、二三の部下は何事か囁いて、あたふたと一緒に自動車へ飛び乗つた。

夜は既に三更に近かつた。

自動車を棄て、主任が加藤牛肉店のくゞり戸を入ると、其處に張り込んでゐた刑事が待つてゐて、直ちに奥の吉藏の居間へ案内した。その部屋の一方の壁に仕掛けがあつたのである。壁は刑事の手に依つて扉の如く左右に押し開けられ、忽ち間口一間奥行三尺ばかりの押入れが現れた。その押入れの中央に

佛壇の様に設置してある大冷蔵庫。その扉を開けて見せられた時、さすがの主任も「アッ」と顔を背けずにはゐられなかつた。中には若い女の太股のあたりから下の立ち姿、——草葡萄のくすんだ藍地に太い黒の格子が入つたそれは非常に地味な着物であつたが、膝頭のあたりから軽く自然に裾をさばいて、これは又眼も醒めるばかり眞紅の非縮緬を文字通り蹴出したあたりに、白い蠟の様なふくら脛がチラリと覗いてゐる。何う見ても若い女の腰から下の立ち姿であつた。言ふまでも無くこれはお由の兩脚で、同時に其處から兩腕も發見された。これ等は時を移さず警察へ押収されたが、親分加藤吉藏は既にお由殺しの有力な嫌疑者として、主任と入れ違ひに拘引されてゐたのであつた。

やがて夜は明け放れた。世間は綻び初めた花の噂に浮き立つてゐたが、警察署内の調べ室では、極度に緊張しきつた吉藏の訊問が續行されてゐた。然し彼は何處までも犯人は自分で無いと主張するのである。「あつしはあの晩、玉の井へ行つたつて事を申し上げましたが、實はお由と喜多公のことが氣になつて、寺島の喜多公の家へ様子を見に行つたんです。しかし、お由は愚か喜多公も家にはゐないらしいんで、それでは他所で密會をしてゐるやあがるんだと思ひ、白髭橋を橋場の方へ戻つて來ました。其時ふとこいつあ千住の方にあるんぢやないかと思つたんで、變電所へ踏込む積りで橋の袂を右へ、隅田驛への抜道をとりました。多分二時を少し廻つた時刻でしたが、すると彼處に御存知の様に、何んとか言ふ情事の祠があるんで、そいつを一寸拜んで行く氣になつたんです。そして、序に小便をしようと思つて、祠の裏手へ廻ると、其處でお由の死骸を見附けてしまつたんで、あつしはびつくりしてしまひました。——且

那の前ですが、あの女には一寸變つたところがありましたね、詰り痛い目に會はされると喜ぶ様な性質なんでさ。だから、よくあつしに、そんなにお前さん妾のことが心配なら、いつそ腕を切るなり耳を落すなり不具者にして置きやい、ぢやないか、どうせ妾はお前さんの物なんだからつて、よく言つてゐたんです。それが本氣なんだから驚くぢやありませんか。そいつをあつしはあの晩お由の屍體を見るなり思ひ出したんで、——かうして置けば厭でも灰にしてしまはなけりやならねえ、さうすればもう二度とこの綺麗な手足は自分の物で無くなつてしまふんだと思ふと、へッへ、まあそんな氣持からあつしは大急ぎで家へ取つて返し、腕と脚を貰つたといふ譯なんです。仕事は血が飛ばねえやうに、あの小川の中でやりました——あつしのやつたのは只これだけで、お由を殺した犯人についてちや、あつしだつて判りやとつくに殺しちまひませあ……」

然し主任に取つては、吉藏が屍體を損壞したのも一時脱れの口實を作る手段と思へぬことも無かつた。この問題のお由の兩腕と兩脚は、大學の法醫學教室に廻はされて、熱心に犯行事實を研究されてゐた。その結果、吉藏の申し立てた切斷方法が肯定された以外に、不思議な傷口が別に四ヶ所發見されたのであつた。第一は左手の拇指と人差指の尖端二ヶ所に、喰ひいつたやうな深い傷があること、同様な傷が又兩足の裏にもあるのであつたが、極く小さい上に血のにじみ出た形跡もないので、或ひはお由の死後吉藏がつけたものかも知れぬ、とも考へられてゐた。ところが、丁度其處へ遊びに來た電氣工學のW助教授が一目これを見るや、「君、これは高壓電氣に感電した時受けた傷だよ」と助言した。



警察署では主任が吉藏の調べに手を焼いて、一先づ訊問を打ち切り、屍體遺棄のかどにより變電所の土岐健助に拘引狀を發しようとしてゐた。その申請書を書き始めた時、バツと室内の電燈が消えた。そして、停電は珍しくも近來に無く一時間も續いたのである。

『何うしたと言ふんだ、冗談ぢや無い』

主任がつひに堪りかねて、變電所へ電話で問ひ合せて見ようと立ち上つた瞬間、電燈はサツと明るく室内へ流れた。同時にズリ／＼と電話のベルが鳴つたのである。それは大學の法醫學教室から、お由の死因が高壓電氣の感電であつた事を知らせる電話であつた。

主任の横顔は極度に緊張して、受話器を掛けると一刻の猶豫もなく土岐技手拘引の手續きにかゝつたが、それを追ひかけて再び電話が鳴る。それは部下が變電所からの掛けた長い報告であつた。

要は、今しがたの停電は二人の男が變電所の一千ヴオルトの電極に觸れて感電死したによるもので、二人共全身黒焼けとなり一見いづれが誰と識別し難いが、一人は勤務中であつた技手土岐健助、一人は喜多公こと田中技手補である事に相違ない。この惨事の原因は目下調査中であるが、兩人の體がからみ合つてゐる所から推して、一方が感電したのを一方が救ひに行つて介したとも見え、或は兩人の間に何か格闘があつて組合つたまゝ感電したとも思はれる節がある、との事であつた。

『到頭やつたか。残念な事をしたな』

受話器を離した主任は、誰にとも無く呟いて崩れるやうに椅子に腰を下した。

猶、その後の報告によると、應急修理に高い所へ登つた一技手は、奇怪な配線のあるのを發見した。それは故意か偶然か變電所の壁を通つて向ひの家の廂へ渡り、其の端が鉞力で作つた樋に觸れてゐたのである。もしこの配線に高壓電氣が供給されれば、言ふまでもなく樋に觸れた人間は即死しなければならぬ。そしてお由は丁度その樋の傍に介してゐたのであつた。

では、お由殺しの犯人は土岐健助か、それとも喜多公か？

二人の過去を洗つて見ると、土岐の方は變電所から開閉所へとコツコツ轉任されて歩いた外、これと言つて變化の無い單調な過去しか持つてゐないに反して、喜多公の方はいろいろな電氣工生活をやつて來てゐる。その上、お由がまだ工場にゐたころ、その試験係を勤めてゐた事實もあつて、當事仲間の一人が試験中に感電死した時、可溶片が早く切れた爲に只指先と足の裏に小さな傷を受けたまゝ美しく死んだ事件を見たこともあるさうである。

で、犯人が喜多公とすれば、親分とお由を張り合つた結果お由が思ふ様にならないので、あの夜自分が非番であるにも係はらず、忍んで行つて、犯行の後、巧みに千住遊廓へ現れたとも考へられた。

しかし又、白蛇のお由を知つてゐる四十男はかう言ふのである。

『あゝ、いふ形の女は、私達年配の男に好かれる者ですよ。吉藏親分だつてさうでせう。土岐さんも丁度厄年位だつたちやありませんか。いくら懇意にしてゐても、つい目の前で楽しんでゐる所を見せられち

や、一寸妙なたづら氣も起りまさあね。それに腕のいゝ人でしたからね——』  
何れにしても二人が死んだ後、お由殺しの事件の捜索は即刻打切られてしまったので、これ等はたゞ苦勞性な人々の臆説にすぎないのである。

### 人造人間失踪事件

1

なにか變つた事件でも無かつたかいと、君は云ふのかい。さうさなア、君が一月病院に入つてゐた間に、見落してしまつた事件といふのは「人造人間事件」ぐらゐのものだらうな。その「人造人間事件」のことを語つて聞かせるツてのかい。うん、この事件のことなら、こつちで聞いてもらひたい位だ。イヤ實は僕もその事件に、ちよいと片棒を擔いだやうな恰好になつてゐるのでね。

×

秋も深くなつて、草叢の噎せびかへるやうな朝露を吸つては中空に飛びだす赤蜻蛉の數も、呆れるほど殖えてきた或る日のこと、詳しく云へば十月十日の朝まだき、此處は東京につづく西郊の砧村に、突如として大事件が発生したらしく、村の駐在所の警官は、遽て佩劍のベルトを腰にまきつけようと滑稽な努力をしながら、畦道を走つていつた。そのあとから、カーキ色の制服を着た青年團員と、彌次馬といふには、あまりに顔の知れすぎてゐる村の誰彼とが、切れ切れにうち續いて、駈けだしていつた。

『オーイ、なにごとだよーオ。』

と、稲束を積みあげてゐる一人が口に手をあてて、遽てふためいてゐる一行に聲をかけた。

『科學研究所で、博士さまが殺されなすつただアよ。』

と、向うの男も口に手をあてて、これだけを喚きかへすと、また一散に行列の中に加はつて、走つてゆく。誰も彼もが、目指して急ぐのは、村はづれの丘の上に、古めかしい煉瓦建が四つ五つ、一と塊に集團をなしてゐる科學研究所だつた。

現場をひとめ見たものは、その凄慘に立ち竦んだ。

第三號館の地下室の明り窓が、一米四方ほど、滅茶苦茶に粉碎せられ、かなり頑丈な鐵格子も金網も、麻幹のやうに、へし折られてゐた。窓枠や硝子の破片の上には一見それとわかれると暗赤色の血痕が點々として附着してゐるのだつた。壊れた明り窓から、下の方を覗きこんでみると、これはまた何といふ狼藉だらう。實驗臺は押したふされ、フラスコやレトルトや蛇管が床の上に散亂し、眞白のアスベストで圍んだ高温槽の横腹には眞紅な血しぶきがサーツと懸つてゐた。だがふしぎなことに、この實驗室の主である飛田博士の姿は、どこにも見當らないのだつた。

博士はどこへ行つたのだらう。警視廳や検事局から、急をきいて駆けつけた係官の一行は、次第にズリズリしてくる心を抑へつけて、戸棚のうしろや階段下の倉庫、はては狭くるしい天井裏の隙間まで探

してみたが、どこにも博士の屍體はおろか、釘一つ落ちてゐなかつた。

この惨事の最初の發見者であるところの博士の助手、金泰丙が呼びだされて、捜査課長大江山警部の前に立つた。

『君が金泰丙君ですか。』と警部は自分の前に興奮を押しかくせないでゐる、白哲の美青年に聲をかけた。青年は黙つて、點頭いた。

『君は内地人ぢやありませんね。』

『僕は朝鮮生れの、日本人です。』とニホンシンといふところに力を入れて美青年は答へた。

『いつから博士の助手になつたんです。』

『そテスね。』と金泰丙は、少女のやうに美しく澄んだ瞳をあげながら默算するのだつた。『ちやうど三年になります。』

『昨夜博士はこの實驗室に泊られたんですか。』

『そテス。飛田先生は、もう幾年も、ここに泊つてゐます。ここ、先生のうちも同じことです。』

學者のうちには、随分と妙な性質の人があつて、常人ではほとんど耐へられないやうな生活をして平氣でゐることがある。飛田博士の場合にあつても、研究即ち慰安であつて、家庭を作るより、このやうな穴藏のなかに、寢臺や書棚をもち込んで、氣儘一ぱいの巢を營む方がよかつたらしい。

『君が今朝この事件を發見したときのことを悉く話してください。』

警部の間にたいして、金は詳細を話した。彼はいつも早く出勤するのだつたが、その朝も午前七時半といふ定刻前三十分に早くも研究所の門をくぐり、建物の前まで来ると、直ちにこの異變を發見したのだつた。博士の身の上が心配だつたので、すぐ單身室内にとびこむと、博士の名を連呼し、室々をさがしたが見當らない。それから地下室をとびだすと、守衛のところにかけてつけ應援をもとめたのだと云ふ。

『守衛のところを駈けつけたのは、何分頃でしたか。』と警部はきいた。

『發見してから廿分も経つてみましたらうか。』

『なるほど——』さう云つて警部は、金青年が廿分間に合理的な行動をとつたかどうか胸のうちで勘定した。『で、なにか重大な紛失物でもありませんでしたか。』

『それですよ』と金は眼を輝かせて云つた。

『大變な紛失物があるやうに思ふのです。博士は助手の僕にも祕密にして、三年この方一步も踏みいれさせてくだらない祕密實驗室をもつてみました。あの事件で實驗室の扉はすっかり開かれてしまひ、僕も無論内部へ入つてみましたが、あると思つたものが見當らないんです。』

『有ると思つたもの？ 一體それはなんですか。』

『實は、「人造人間」なんです。』

『なに、アノ人造人間！』捜査課長をはじめその場に居あはせた一同は、助手金の意外な言葉におどろ

いて一二歩前へ詰めよつた。

『君、その人造人間といふのは、動くのかい。』いきなり口を挿んだのは、雁金檢事だつた。

『動くどころぢやないのです。物事を判斷する能力もあれば、人間よりもつと敏捷に地上を走つたり木に昇つたり梁からぶら下つたりするさうです。僕も見ただけではないのでよく知りませんが、先生がときどき獨言をなさるんで判ります。「いよいよ四十五度の傾斜ものぼれる。こんどは下から三米もある扉に飛びつけるやうにしてやらにやらならん」などと、手をうしろに組んで、室内を獸のやうにゴトンゴトンと歩きまはつてゐるうちに、獨言をおつしやるのです。それから、内部はデュラルミン製ですが表面は合成護謨で、人間とほとんど見た眼は同じ皮膚をもつてゐるんださうです。だが、その人造人間が見當りません。』

『ウンさうか。』と捜査課長は呻つた。彼はいまだかつて經驗したことのない勝手のちがつた事件にぶつかつたのをハッキリ自覺した。

金青年をさげると、守衛をよんで金青年の申立がちがつてゐないことを確め、更に何か新事實はないかと尋ねて見たが、これぞと思ふ参考事實もなかつた。夜警の小使さんが取調べられたが、最後に見廻つた午前二時までは別に異狀をみとめなかつたと證言した。すると事件は午前二時以後午前七時三十分以前に發生したものと見當がついた。

續々と出勤した飛田博士の僚友について、捜査課長大江山警部は、細大のこらす博士に關する知識を

集めてみたのではあつたが、博士が世に稀らしい變物であることと、非常にすぐれた頭腦の持ち主であることが判つた外は、いつも一人ぼつちに離れてゐる博士の身邊について材料がたいへん少いことに失望しなければならなかつた。科學研究所長の吳博士も同様な供述をした後、白髪頭を一つりうち振ると、こんな意味のことを附け加へたのだつた。

『飛田君の助手の金泰丙ですナ。あれは日本人と云つても、元來××生れのことですから、もつとよく身元を正した上で使つた方がよくないかと云つたんですが、飛田君は「あれはたいへん頭のいい奴で、非常に役に立つからどんなことがあつても罷めさせぬ。但し、所長の御心配の點は、よく注意します」と云ふんです。尤もこつちで氣が揉めるもんですから後でよく調べましたが、金は威鏡の大きい果樹園の息子だといふことが判つたので、先づ安心はしましたが、そんなこともあつたんです。御参考までに申しときます。』

それを最後に主腦係官は訊問をうちきつた。そこへ現場附近の血痕調査をしてゐた刑事の一人が、報告にかへつてきた。

116 『課長どの。』さういつて呼びかけた多田といふ刑事の顔には、アリ／＼と失望の色がうかんでゐた。『あんなに現場には夥しく流れてゐる血液が、建物を二間ばかり離れると、どこにも見當らないのです。それに生憎と建物の外は、土手の柵まで長い芝が生えてゐるので、足跡もないのです。それから、土手の柵を下へ降りると、街道ですがここは自動車の轍とか靴や跣足やいろんな足跡がありますが、一向に

識別でき兼ねます。』

『自動車といふと、僕たちの乗つてきた車も入つてゐるのかね。』と課長は尋ねた。

『さうです。東京から來るには、どうしてもあの街道を通らねば、ここの正門に入れません。もつとも、私達の自動車の外にも、いろいろあるんですが、ちよつと眼についたのは陸軍の砲兵隊が通過したあとがあるくらいのことです。』

『なに砲兵隊が——。』課長は、なにを考へたかそれを聞きかへした。

『それがです、門衛にきいてみますと、この數日、秋季機動演習の歸途で大分軍隊が通過するんださうです。』

捜査課長室で、大江山警部は、昨日の砧村事件について、自分の思惑を、まとめたと思ひ、人口の扉に内側から錠を下ろすと、廣い室内にたつた一人きりとなつた。彼はフカフカした安樂椅子の上に身體をうつし、紙巻煙草を口にくはへると、火を點けた。

（これは一體いかなる事件であるか！）

警部はボカリとふきだした紫煙の行方を、見るともなしに追ひながら、考へた。

現場に夥しい血痕、器物の破壊、そして飛田博士と、人造人間の紛失。——これは、午前二時から

七時半までの間に、何者かが研究所に忍び入り、博士を惨殺し、人造人間を捉つて逃走した。と考へるのが、一番簡単な事件だつた。果してそれに違ひなからうか。

疑問はある。何故、博士の屍體が見えないのか。博士はあれ程の出血をしてゐるのだから、すくなくとも瀕死の重傷を負つてゐるか、悪くすると即死したに違ひない。しかも博士の身體を搬びださねばならないといふ事情をかしい。博士に人造人間の使ひかたを教へさせるのなら博士を連れださねばならぬ。ないかも知れないが、重傷以上のものを博士に與へるのはをかしい。また博士がそれほど傷きながらも格闘するほどの體力があつたとも考へられぬ。この假定について最もをかしいのは、なぜ入口をあんなに無慘に破壊したのであるか。あんなひどいことをすれば、博士に直ぐ感付かれたらうし、悪くすると、夜警の耳にも入り、若し軍隊が夜中行軍をしてゐるのだつたらそれに聞きつけられ、計畫は水泡に歸することだらう。さう考へると、この第一の假定は當つてゐないやうだ。

それではないとすると、犯人が外部から忍びこんだものではないと考へられる結果、博士が研究熱心のあまり、急に氣が狂つて器物を破壊し、爆發物を裝填しあの明り窓を破つて飛びだし、人造人間をつれだした、といふのだ。これも一應は考へられるが博士があつた、夥しい血液を失ふほどの重傷をうけて逃げのびたのは、すこし説明がつかないやうだ。まさか、博士が人造人間に刃を奮つて斬りつけたとも考へられない。

では、少し突飛な假定だが、人造人間が、なにかの刺戟をうけて博士の知らぬうちに活動を始め、ま

づ血祭りに博士の寐首をかき、さんざん室内を暴れまはつた末、あの鐵格子を鉛棒でも曲げるかのやうにやすやすと押し破り、博士の屍體を背負つたまま、戸外にとびだしたのではあるまいか。これはなんとも云へないことだつた。だが第一に人造人間といふものが、どれほどの能力をもつてゐるんだか、悲しいことに警部には見當がついてゐない。しかし、我國にさへ二三の人造人間がやつてきたことがあるし、外國の人造人間はもつと能力を備へて、飛行機を操縦したり、下水管の中に入つてゐて時間毎に水準を報告したり、電話をかけてやると扉をあけて出て來て電話器を手にとり、命ぜられた洗濯を主人が歸るまで済ませて置く、などといふ人造人間が現存するといふ。おまけに、博士の獨言が本當なら、博士と同居してゐたあの人造人間は、急坂をのぼつたり、高いところにとびついたりできるといふ外國の人造人間も持つてゐないやうな素晴らしい能力を持つてゐたのだ。博士を殺し、鐵格子の窓からとびだすこと位、なんでもなかつたかも知れない。はたして然らば、嗚呼、それを信じてよいものであらうか、わが帝都附近に、一人の人造人間が放たれてゐるのだ。その人造人間は、引續いて殺人を犯してゆくかも知れない。人造人間は恐ろしい腕力をもつてゐるとか云ふではないか。警官隊は無論のこと、軍隊が出勤しても、うまく討ちとれるかどうか判らない。警視廳管下は、一人の恐るべき殺人鬼を放し飼ひにしてあることになる。それにしても、ひよつとすると、鋭敏な神經をもつた人造人間は、既にこの室内に紛れこんでゐるかも知れない。さう思つて、警部は室内に垂れ下るカーテンを一巡みまはした。が急につと立つと、どこから出したのかピカリと右手にピストルをひらめかし、傍らのカーテンに銃口をむ

けると、ツカ／＼とカーテンをまくつてみた。カーテンの背後には、青ペンキをぬつた鐵の壁が冷たく立つてゐたばかりだつた。課長は用意周到にも室内のカーテンといふカーテンにピストルを押しつけてまはつた。異變のないのを確めたのち、やつと、もとの安樂椅子の上に戻つた。

『あつはつはつは』

大江山警部は、カラ／＼と笑ひだした。懷疑主義にならなければならぬ職掌柄とは云へ、これはまた何といふ滑稽であらうか、人造人間が帝都をノソノソ闊歩してゐると考へるなんて、だが警部は、われとわが高笑ひの聲音に、なにかしら怪しい響きのあるのに氣がつかないわけにはゆかなかつた。

それはそれとして、砧村事件の真相として考へられるもう一つの假定は、犯人が一旦こつそり室内に侵入し、博士を殺し人造人間を奪つて脱走するとき、事件の真相を蔽はんがために、故意に器物を破壊し、明り窓を爆破して行つたのだ、と考へられないでもなかつた。

では何故に、博士は血を流さねばならなかつたのか。またそれは一體どこの誰によつて加へられたものであるか。

人造人間の祕密を奪はうといふ悪漢の仕業であるか、それとも痴情でもあつて、それは博士をかうした頑なる生活に入らせたことを説明するに充分なものであるかどうか。

だが一片の刑事事件として、最も普通にとるべき道は、事件の最初の発見者であり、博士の助手でもあつた金泰丙を疑つてみることだつた。だが金青年の素行もわるくはなかつたし、研究所における勤務

ぶりも著實で、博士の信認もするふんと厚かつたではないか。だが氣になるのは、金が事件を発見後すこし現場に永く居すぎたきらひのあること、普段は入室を禁じられてゐた室にまで、たとひ博士失踪の際のこととは言へ、ツカヅカ侵入して廻つたこと、割合に周章しないで落付いてゐることなどが氣になつた。これには何か入りくんだ祕密があるのかも知れない。金の身邊は十分に監視させて置くべきである、大江山警部は考へた。彼は、それを命令しようと思つて電話器に手をかけた。そのときだつた。入口の扉が、外からコツコツと打音された。その打音は特殊な符號になつてゐて、譯してみれば「急に御面會したし、多田刑事」といふ意味をあらはしてゐるのだつた。

警部が立つて扉の錠を外すと、はたしてそこには多田刑事の緊張した、顔があつた。また新事件がおこつたらしいと、警部は獨得の第六感をもつて、部下を座に招じたのだつた。

『課長どの。』と刑事は、刑事手帳を握りしめながら、息をひつつめて皺枯れ聲を發した「先づ、砧村の現場にのこつてゐた血痕から採集した血精を鑑識課でしらべた結果がわかりました。いづれも同一の人間の血液と覺しく、血型はAAでした。これは別に飛田博士の×××から採集したものから判明したものと同種です。』

『うん、さうか。』

『それから別な話ですが、第二の事件が、たうとう發生しましたぞ。』

『なに、第二の事件といふのは……。』

『助手の金泰丙が襲撃されました。』

『おお、金がやられたか。で、どうなんだ。』

『金の下宿が、砧村から一里ばかり東京に寄つた用賀村にあるんです。その下宿が昨夜から今曉にかけて、なにもものかに襲撃されちまつたんです。現場は慘鼻の極です。襖は倒れその邊一面からくれなるといふ有様……。』

『金はどうした、死んだか。』

『それが奇怪なんです。金の身體がどこにも発見されません。』

『ほほう。では飛田博士の場合と、大同小異だな。』警部は、例の癖をだして、獸のやうに低く呻つた。

ああ、これは一體どうしたといふのだ。たつた一夜を置き、全く同じ手で助手の金が消えてしまつたのだつた。かうなると、大江山警部の頭は、すっかり混乱してしまつた。強力な容疑者の金が、かう他愛なく被害者の地位にきてしまつたのでは、凡てをもう一度始めから考へ直さねばならない。さうだ、もしかすると、卅分前にはあのやうに嗤つたけれど、あの人造人間といふやつが、いよいよ魔の手を伸ばしはじめたのでは無からうか。つづいて第三、第四の犠牲が、帝都の眞只中にあらはれるのではなからうか。それにしても、行方不明になつた飛田博士と金助手とは今いづこに居るのだらうか。それともいづこに屍を曝してゐるのだらうか。大江山警部は現場再調べの決心をし、多田刑事を促して、捜査課長室を立ちいでたのだつた。

都下の新聞紙は「人造人間事件」をいちちはやく感知して、デカデカの記事をかきたてたので、帝都二百万の人心は、この時代の尖端を行く事件に百パーセントの興味をよびおこしたのだつた。しかし倦きやすい市民の心は事件が迷宮に入つたまま、別にあたらしい展開もせず、五日、六日、七日と経つてゆくにつれ、やうやく興味を失つていつた。あれは元々出鱈目の想像で、人造人間なんか始めからなかつたのではないかと、うがつた結論をする人もあつた。警視廳では、大江山警部はじめ部下の一同が浮かぬ顔で毎日になりきつてゐた。それは警視總監から、早くも捜査打切りの命令が下つたせみだつた。警部はその早尙なることを説いたが、總監は黙々としてこれには答へようとせず、室を出ていつた。警部は憂鬱の谷底に蹴墜とされたやうに感じたのだつた。こんなわけで、事件は疑問符號をうつたまま、闇から闇へと葬られた觀を呈して、ここに十日の日が流れた。

話はガラリとかはり、これは東京の新興街である新宿の絢爛たる夜、新宿キネマ座に、突如として、話の種が湧きいでた。丁度その夜、僕は友人の帆村莊六と連れだつて、この映畫館の前に立つた。帆村莊六といふと道樂に私立探偵の免許をもつてゐるといふ變つた男であるが、中學時代から知りあつた仲で、ことに此の頃、僕が探偵小説を書きはじめたもので、話が合ふところから、毎日のやうに繋がつてあるといふ次第だつた。帆村がここで僕をくどいて云ふには、世の中に面白いことがなく



なつたときには、身のまはりで、一番平凡なものを掴まへて、ちつと観察してみると、よく素晴らしいものが湧きあがってくる。といふわけで、お前もそんなに世の中に退窟してゐるのだつたら、どうだこの映畫館に入つて、最も俗っぽいチャンバラ劇を見物しては。きつとなにか素敵な興奮にありつくことが出来るだらうぜ、と云ふのだつた。僕はこの上議論をすることが面倒くさかつたので、三階の一番安い席の切符を二枚買ふと、もつとい、席へ入りたさうな顔をしてゐる帆村の手をグン／＼引張つて、三階ゆきの階段に足を踏みかけたのだつた。これをキツカケに、その夜は帆村の豫言したやうに、いやそれよりももつと驚くべきほどの珍奇な事件の幕が、切つておとされたのだつた。

さてキネマ座の三階までのぼるには、たいへんな努力を要するのだつた。もうこの階段をのぼりきつたら、座席の入口があるだらうと豫想をしても、上りきつたところに必ず手品師のやうな洋装をした女案内人が居て、

『三等さんは、その階段をおのぼり下さい。』

と、また新たに上り口のついてゐる階段を指さすのだつた。いつまで経つても三階へのぼりきれないのだ。足は棒のやうになる、動悸ははずむ。かうなつたらどうにでもなれと、盲滅法に半習慣的に階段をのぼつちや、新しい階段をみつけて足をかけるのだつた。

『あ、そこ、ちがひますわ。お座席の入口はこちらです。』

突然、背後から黄色い聲を浴びせかけられたので、僕はムツとして怒鳴りかへした。

『なんだつて、こんなところに階段を挿へとくんだ。』

さう云つて僕は踏みかけた足を下ろして振りかへると、案内人の顔をグツと睨んだのである。だが忽ちそれを後悔しなければならなかつた。といふのは、そこに、なんと目の醒めるやうな美少女の案内人が、こつちをニコ／＼見てゐたからであつた。

その美少女は、光喜三子が結つてよく似合ふ、なんといふのか耳のうしろで、義経公の羽織の紐のやうに綾に編んだ髪をべつたりと押しつけた式の束髪を結び、額の上には饅のあとも鮮かなウエーヴをかけてあるのが目立つた。半月形の細い眉に、やや細いが涼しい瞳、唇は朱玉のやうに赤くて小さかつた。年のころは十八九歳かとも見えた。あまりに念を入れた描寫をゆるして呉れ給へ。實は僕は昔から少年は好きで稚兒騒ぎもやつたが、婦人には薩張り魅力を感じたことがなかつたのだが、この少女だけには心を奪はれずには居られなかつた。

『どうだ、今のメツチェン見たか。』一つの映畫が終つたとき、僕はとなりの帆村に囁いた。

『見た。ありや、どこかで見たやうな顔だ。』

『ひどい奴だ。もう先に惚れちまつたのか。』

『ウフ。帆村は言葉で笑つたが、顔では笑つてゐなかつた。』

『おい、ちよいと廊下へ出てみよう。』

『よからう。』と帆村は直ぐ應じた。

廊下に出ると、用もないのにブラ／＼隅から隅まで歩いてみたが、どこにもさつきさつきの少女の姿は見當らなかつた。僕は軽い失望を感じずにはゐられなかつた。

そのときだつた。客席の方で、悲鳴とも歡呼ともつかないやうな叫び聲が屏のあなたでワツと起つた。「な、なんだらう。僕は立ちあがつた。」

『はやくこい！』

帆村は脱兎の如く、身を翻して屏の中にかげこんだ。僕も遽で、彼のあとにつづいたのだつた。

『はア、こりや勇敢だ。へへへ。』僕は、観客ともども、いやらしい笑ひ聲をたてたのだつた。見よ、休憩中のスクリーンに、これはなんと、云ふにも憚りのある×生活に關する活動寫眞が薄ぼんやりと、うつつてゐるではないか。それは、或る場の行動を撮つたものだが、同じことを繰り返かへしてゐるのだつた。観客の或る者はゲラ／＼と笑ひ崩れた。或る者は手を打ち、太い指を口中に挟みこんでは、ヒュ一ツと口笛をふきならした。婦人客は「まア、いやアねえ」などと云ひながらスクリーンの上に眼を吸ひつけられてゐた。

『やめるツ、やめるツ。』

といふ聲が、一階あたりからした。

『もつとやれ。もつとやれツ。』

と三階席で喚いたものがある。なにか卑猥な言葉をつけ加へたらしく、その近所からドツと笑聲が捲

きおこつた。僕は呆氣にとられて、この有様を眺めてゐたが、不圖氣付いて側を見ると、今まで一緒にゐた筈の帆村の姿がみえなくなつてゐた。

場内の電燈がパツと暗くなつた。すると映畫はいよいよクツキリ臆面もなくその精細部分をしめしたので歡聲がまたワツとあがつた。すると、また場内はパツと元のやうに明るくなつたが、薄ぼんやりながら映畫は依然としてうつつてゐるのである。僕は、なにがなにやら、わけがわからなかつた。

そのうちにベルが鳴つて、いよいよチャンバラ映畫が始まつた。その畫面は何事もなかつたやうに明るかつたが、暗い字幕のところになると、例の猥映畫がうつすりと寫つてゐるのが判つた。すると猥映畫は、映寫機以外のところから、うつしだされてゐるものらしい。これはどうしたわけであらうか。僕にも、やつと、事件の性質がわかつてくるのだつた。

主席説明者の板川饒聲の説明は、あきらかに落付きを失つてゐた。ふり絞るやうな痾高いその聲は、不安と興奮とに震へてゐるのだつた。そこへしづかに、帆村が歸つてきた。僕の耳にしっかりと口をあてると、

『ちよいとした事件だ。いやでなかつたら、應援かたがた、僕のあとについてきてくれ。』

と云つて、また席を立ちあがつたのだつた。僕は無言のうちに、彼の後に従つた。

廊下へ出ると、帆村は手短かに、事件の外廊を話してきかせた。どういふ目的だか判らないが、館主の係り知らない映畫が、映寫室以外の場所から映寫されてゐる。それはよほど精巧な器械らしい。その器

械はどこに据ゑつけられてゐるのかわからぬが、多分観客の一人がそいつを持つてゐるのだらうと思はれる。お前も、嫌ひではなかつたら、三階西側の客席を、何喰はぬ様子で見廻り、怪しい人物を發見してくれぬか、といふのだつた。僕は即座に、それを承諾したのだつた。

それから僕の冒険が始まつた。こんなに賑やかな映画館で、見付かれば重罰を喰ふにきまつてゐる怪映画を、スクリーンにうつさうといふ人間のことだ。餘程無頼の徒に相違ない。萬一僕の態度に氣がついたら、どんな危害を加へようもしれぬ。こいつは冒険だとも思つたが、半ば獵奇趣味が手傳つて、ぶつつかる覺悟をした僕は、ソロ／＼と客席の間を、縫つて廻つた。だが犯人らしいものの姿は、一向にみあたらなかつた。このとき、舞臺ではやつと氣持が落付いたらしく、板川饒聲が喋つてゐたが、それが、急にハタリと聲を止めたまゝ、何分か空虚な時間が流れた。

「辯士、どうした」といふ聲が三階から起る。僕は、なんとなくゾツと身震ひを感じたので捜査は中止して廊下にとび出した。

「タツタツタツ」

といふ蹺音がすると、廊下の奥から、こちらへ飛び出してくるものがある。眞黒の全身、樽のやうに大きい頭、キラリと光る兩眼、長靴をはいたやうな脚。

「呀ッ！」

と云つて僕は、その場に立ち竦んだ。おお、人造人間、人造人間だ。

人造人間は、僕の居るのを氣にもとめないやうな様で、先刻僕が美しい女案内人から上るのを止められた階段に足をかけると、飛鳥の如くのぼつてゆき、あつといふ間にその姿は消えた。そこへ、またもやドヤ／＼と數人の男がのぼつて來たが、

「どうだ、なにか見なかつたか。」

と、いきなり聲をかけたのは、紛れもなく帆村莊六の興奮に蒼青ざめた面だつた。僕は、この思ひがけぬ「人造人間事件」の襲來に、ただただ膽を消し、魂を奪はれ、頓に返事もできなかつたのだつた。

人もなげにスクリーンの上に入りつりだす怪映画と、ときどきチャリとグロな姿をあらはす人造人間と。この二つがどんな關係があるのか分明ではなかつたが、とにかく新宿キネマ座にあらはれるといふので、市民は驚くかと思ひのほか、人造人間が別に危害を加へる様子も示さないので、今度は大した人氣となり、新宿キネマ座の前は、押すな押すな群衆だつた。

しかし迷惑なのは館主をはじめ従業員だつた。人造人間が出た、といふ報告が警視廳にとどくと、待つてゐましたとばかりに、大江山捜査課長が先頭に、腕ききの面々が駆けつけた。なんとかして、人造人間をつかまへたい。いろいろと警戒をするのだつたが、どうしたものか、人造人間はつかまらなかつた。

大江山警部は考へた。人造人間は、あながち鋼鐵製の西洋鎧みたいなものを被つてゐるとは限らないのだ。失踪した助手金泰丙の語つたところによると、博士は人體とあまり外觀のかはらぬ人造人間を作ること成功されたらしいと云ふ話だ。それなのに、館内に現れる人造人間は西洋鎧のやうなものを着けて、頭部なんか化物のやうに大きい。これは、ひよつとすると、人造人間が更に變装をしてゐるので、それは人造人間が正體をくらませる一つの手で、實はこの人造人間、群衆の中に交り、市民らしく装つて先づ場内に潜入するのではあるまいかと考へた。これに對して、大江山警部は、珍妙きはまる人造人間鑑別法を講じたのだつた。

その翌日から、観客は切符を買つて館内の廊下をすすむと、警官隊が詰めかけてゐる一つの關所があつて、そこで一人一人が、小さい藥壇の栓をとつて、鼻の先へ持つてゆくと命ぜられるのだつた。なにぞとかといふかりながらも、入場したい一心で、その壇の栓をぬいて、鼻の下まで持つてゆくと、鼻がツーンとするほどのアムモニアの強臭があつて、彼はその場にたちまち大きな嚏を一つ、ハツクシヨイとやらねばならなかつた。人造人間は、嚏をしないだらう、といふ大江山警部の思ひつきだつた。しかし、この試みも、観客の一人のこらずが、中には憤慨したり、泣きだしたりする者もあつたが、大なり小なり嚏をして通るので、妙案も效目がなかつた。すると人造人間は観客の中に交つてゐないのか。又は早くもこれを知つて、芝居もどきに、嚏を眞似て通りぬけてゐるのか。

怪映畫の方は、人造人間の腹中の仕かけで、その胸釘あたりの孔から、うつり出すのであらう。同じ

行動ばかりくりかへすのは、短いフィルムを環狀につないであるために、いくたびも同じ場面がくりかへされるのだらうと、大江山警部は考へた。それで配下の刑事を、このあたりと思ふ客席に坐らせたり方々の椅子席の下に、小さいマイクロフォンをつけ、これから出た電線を樂屋の中に引張りこみ、一々スイッチをきりかへては、若しやその怪映畫をまはすモートルか齒車の音がきこえはしないかと聞き耳をたてた。だが、こいつも中々思ふやうな結果が出てこなかつた。

こんな調子で、新宿キネマ座は、日を追つて大入満員だつた。人造人間は、すこしづつ惡戯をするだけで、直ぐ姿を隠した。人造人間の頭や手足が、思ひがけぬところから、ニヨキリと出ると、観客はリンドバーク大佐でも発見したかのやうに、破れるやうな喝采を送つた。大江山警部たちは、苦がりきる一方だつた。そして遂に十月二十七日のこと最後の大椿事がもちあがつたのだつた。

友人の素人探偵帆村莊六と僕とは、その後毎日のやうに映畫館の門をくぐつては、客席にもぐりこんだ。僕たちは、係官とは別に、周到な注意のもとに、犯人捜査に従事した。その方法は、スクリンの上にあけた小さい孔から客席の方へ向けて舞臺裏から寫眞器をたて、人間の眼には見えないが、寫眞にはよくうつるといふ、近頃流行の赤外線寫眞をとることだつた。これは、一と晩中、寫眞器の口を、開けつばなしにして置くと、例の怪映畫の光が出てゐる場所が、どの邊であるかといふことが、指摘できるのだつた。第一夜には、果して、それがうつつた。寫眞器を持つてゐる人物の顔まで、ぼんやり見えてゐるではないか。

『ほほう、これは思ったより、いいなア。』と帆村が三嘆した。

『だが、この映畫の器械の持ち主の顔は、さつぱりわからんぢやないか。』

『うん、今にわかる。もつと寫さにや駄目だ。』

さう帆村は答へて、自信ありげに微笑した。

さて、最後の椿事が起つたその日、夜に入つて、僕たちの研究は、ほぼ完成をつげた。明白ではないにしても、五日間の重ね寫眞をした結果、映寫機の陰にかくれてゐるその怪人物の容貌が、大體判るほどの複寫眞ができたのだつた。現像と定着とを終へ、水洗にうつしたとき、その寫眞の水桶につけたまま眺めてゐた帆村が、突然ウームと呻り聲をあげた。

『おい、ちよいと来て見る。これは見覚えのある顔だぜ。』

『どれ、こつちへも見せたり。』

僕は、その重ね寫眞をとりあげて、遠くにはなして、ぢつと眺めた。

『呀ッ。』

僕は、もうすこしで、折角の重ね寫眞をクシャクシャに握りしめるところだつた。ああそれはなんと、紛れもなく、いづぞや映畫館の三階で見染めたとも云ひたい、美しい女案内人の顔ではないか。それからのちも、僕は、なんとかかとか用事に託つては、彼女の後を追つてゐたのだつた。あの見るも恥かしい美少女が、どうしたわけで、あのやうに淫らな映畫を、法律ををかしてまで、うつしてゐるのだ



らう。それを帆村に訊ねたのである。

『これは實に奇怪な事件だ』と、帆村は目を輝かせて云つた。『いゝかい。この寫真にあらはれた顔は、あの女案内人の顔であると共に、砧村事件で行方不明になつた助手金泰丙の顔なのだ。』

『ええッ。』僕は、あいた口が、暫くふさがらなかつた。『そりや、どういふことなんだい。』

『金泰丙が女案内人に化けてゐるのを知つたのは、この寫真のできるより、ずつと前からなのだ。だが、この赤外線寫真をとつて、もつと重大なことを發見してしまつたのだ。ここんところを見給へ。(と彼は寫真の一部に指先をあてながら) この變裝男の額の真中に、うつすり黒い痣のやうなものが浮きだしてゐるだらう。これはよく見ると「九」といふ文字になつてゐる。驚いてはいけな。朝鮮人とは眞赤ないつはり、彼は中華民國の祕密結社である九蠟團の團員なんだ。彼は重大使命を帯びて帝國に押しわたるとき、あの「九」の字の入墨を薬品で洗ひおとしたのだつた。その結果、肉眼では全く見えなくなつたが、その部分は長年の變質を保存してゐるため肉眼ではみえない赤外線寫真には、この程度にわかつてくるのだ。』

『ぢやその結社團員がやつて來た目的は、もしやその……』と僕は、たまり兼ねて訊いた。

『勿論、人造人間の祕密を盗みにやつてきたのだ。だが、彼奴が今頃こんなところにまごまごしてゐるところを見ると、人造人間の祕密は、まだ完全に彼の手に渡つてゐるのではないやうだ。しかし現在、彼奴はなにごとかを目論んでゐるのだ。さア、かうしてはゐられない。新宿キネマ座へ、大急ぎで行つ

てみなくちや。』

僕等は、狂氣のやうに興奮して、外にとび出した。そこに通りかかつた圓タクを呼びとめると、全速力を出して、新宿キネマ座へやるやうに命じた。

『すると、飛田博士はどうなつたらう。』

と僕は帆村のむつかしさうな顔に問ひかけた。

『僕の第六感が當つてゐるのだとしたら、博士はどこかにまだ生きてゐるのだ。生きてゐる、生きてゐるに違ひない。』

『ぢや、人造人間は、なぜ新宿キネマ座にフラついてゐるのだ。』

『さアそれが判れば、この事件はすつかり明かになるのだ——もう十分も時間があれば、すつかり種をあげてやるんだが……』

だが十分も経たない裡に、二人の乗つた自動車は新宿キネマ座の前にピタリと横付けになつた。

すると待ち構へてゐたかのやうに、一隊の警官がドヤ／＼と車の周囲を取巻いてしまつた。ウインド硝子から、座の方を見やると、これはまた何といふ警戒ぶりだらう。まるで禁止前の演説會場のやうに、警官の二重三重の生垣であつた。

『どれ、どこに居るッ!』

さう叫びながら、車の方に飛びつくやうに出て來たのは、大江山捜査課長だつた。その兩眼は血走り、

噛みつきさうな顔付だった。

『なアんだ、帆村君ぢやないか。——又、怪しい一隊が乗りつけたといふものぢやから。』

課長はいま／＼しさうに舌打をした。そして急いで座の中へとつてかへす爲に、蹠をかへさうとした。

『課長さん』と帆村は車を出ると追ひかけた。

『……………』

『何があつたのです。』

『ウン。——』課長はチラリと帆村の顔の上に一瞥を送ると、つと引返して、其の耳許に囁いた。『飛田博士が行方不明になられたのだ。』

『博士が行方不明に？ そんなことは前から判つてゐたことぢやありませんか。』

『さうだ。』課長は大きく頷いて『しかし本當のことを云へば、博士は生きてゐられたのだ。その譯はただ云へないが、兎に角博士がこの新宿キネマ座に一時間ほど前に來られたことは事實なのだ。その目的は、評判の人造人間を見たいためだった。ところが途中で博士は便所に立たれたが、その儘歸つてこられなくなつた。館内を探しても、一向に姿が見えないのだ。しかも蟻一匹、ここから出ていつたものはない……………』

『そんな莫迦げたことがあるのですか。』

『どうも弱つたよ、本當のところは……………』

そこで帆村は、今しがた發見した重ね寫眞の祕密を報告した。三階の美少年女實は博士の助手金泰丙であること——ところがこの金泰丙實は更に偽名で、本當は中華民國に蟠居する九蠟團の一員であることを、手短かに話した。

『なに、九蠟團？』課長はその名前を聞くと忽ち蒼白になつて叫んだ。『すると、そいつはあの結社きつての美少年志士の張士鵬にちがひない。かねて祕密通牒はうけてゐたが、あいつが眞逆、金泰丙で、そして此の座の女案内人とは氣がつかかなかつた。よおし、直ぐ捕縛をしてやる！ 三階だナツ。』

『ああ、ちよつと——』

帆村は逸り立つ課長の腕を押へて、何事かを囁いた。

『ウン。よろしく頼む。』課長の意味あり氣な視線が帆村と僕とに送られた。

それから三人はバラ／＼に散つた。帆村は三階に上ると、女案内人實は變装してゐる張士鵬の後方に、さり氣ない風で立ち、煙草を吸つてゐた。僕は大江山課長の貸して呉れた双眼鏡を以て、遙かの方より女案内人の顔色を窺つてゐた。

女案内人の立つてゐる直ぐ傍に、屋上の方へ上る薄暗い階段があつた。帆村と僕とが間違へて上らうとした階段だった。今、突如として女案内人の前に現れたのは、課長だった。

『姉さん。この階段は、たしかに屋上へ上るものだったね。』

『さうでございます。』

『ありがたう。』

課長は氣輕に禮を云ふと、單身でその薄暗い階段に足を掛けた。僕はその瞬間に、双眼鏡を思はず握りしめて、聲を嚙んだ。女案内人の和かだつた眼の色が急にキリリと剣だつて、何事かを決心したかのやうに見えた。僕はすかさず、帆村の方に、豫て蹠しあはせたサインを送つた。

コト、コト、コト。

課長の姿は階段の上に消えて行つた。

一秒、二秒、三秒、四秒、五秒……。

女案内人はギョツと唇を噛むと見る間に、双眼鏡の視野から、その美しい顔が横に滑り始めた。僕は駭いて、非常サインを送つた。

『やッ！』

『ウヌ！』

その瞬間に、帆村が女案内人の背後から、飛びついた。案内人の白い腕がニューと、プログラムを載せた臺の或る個所へ伸びたとたるを、帆村は飛鳥の如くグツと握ると、逆手に捻ぢあげたのだつた。待機中の警官隊は、ドツと喚きかかつて、二人の上に十重廿重に打ち重なつた。もうどうすることも出来ない女案内人だつた。これが張士鵬の假装の最後の幕だつた。

彼が單身迷ひ出てきた大江山課長をよい獲物と誤認して、仕掛け階段の下に陥とさうとしたのが運の

盡きで、僕の送つたサインの下にたうとう捕縛されるし、その上仕掛け階段のカラクリも判つてしまつたのだつた。

その秘密階段を開いてみると、想像したとほり、飛田博士が幽閉されてゐた。勿論、この張士鵬の化けた女案内人に欺かれて、この階段の下に墜とされたものに違ひなかつた。博士を誘拐する目的は、人造人間の製造法を知るのにあつた。

あの映書館に現れて問題を起こした人造人間は、鵬の作つたインチキ人形にすぎなかつた。この人形も博士と同じやうに、秘密の階段下から発見されたが、これは博士が「新宿キネマ座に人造人間現る」の報に駭いて、もしや自分の發明が奪はれたのではあるまいかと秘密の家から出懸けてくるやうに作られた陥穽だつた。そしてその釣り出しは、美事に成功したのだつた。

博士紛失の本當の事情といふのは、實に博士の人造人間を、新兵器として採用することに決した當局が、世人の眼を晦ますためにとつた芝居であつた。あの真夜中、特命をうけた砲兵隊は、演習がへりと見せて附近を通行し、そこで博士と人造人間を大事に收容すると、あとに犯罪らしい現場混亂をつくつて行つたのだつた。勿論、血液も豫めしらべて置いて、同じ血型の負傷兵の血液を利用したのだつた。張は、これを知ると、同じ手を做つて、殺されたと見せて逃亡し、映書館に機會を待つてゐたのだつた。博士は今や、造兵廠の奥深く入つて、人造人間の設計に餘念がない。あの事件に懲りて博士は、再び娑婆に姿は現はさないだらう。



X

君は僕の話信じないといふのだね。よをし、待つてゐたまへ。近くあるかも知れない次の戦争に、我が國がどんなに優秀な人造人間軍を戦場に送ることか。そのときになつてこの僕の話が、嘘でなかつたといふことを、君はしみじみ悟つてくれることだらうよ。

### ラヂオ殺人事件

1

犬小屋のやうに軽い車體をもつた郊外電車は、放送局員植木冬助の疲れきつた身體を拾ひあげると、またゴト／＼と、餘り速くないスピードで動きだした。

(なんてマア無責任な奴ばかりなんだらう。訪ねてゆく先ゆく先が、出鱈目のところ番地でやがる。局長が言つたことは本當だつた。奴等はみんな、狂人なんだ、チエツ！)

若い植木冬助は、スプリング・コートの隠袋の中で、榮螺のやうな——と彼は思つてゐる——拳固を幾度となく拵へたり緩めたりして口惜しがつたのではあるが、それはいたづらに彼の向側に乗合はせた客の失笑を買つて「どうやら氣狂ひの殖える陽春になつたな」と感心させるのに役立つばかりだつた。彼は憤懣と困憊とに汗ばみながら、窓外にキラキラと白光をたてて流れてゆく大小不揃の看板に、軽い頭痛をさへ感じはじめたのだつた。

一體どうしたわけだ植木冬助は、こんなところまでやつてきたのであるか。

ことのおこりといふのが、今朝のことだった。いつものやうに放送局に出勤した彼は、背後の窓から首をつきだして、和やかな霞にスクリーンされた全市を、端から端まで、すうツと眺めまはし、深い呼吸を何遍も繰り返して、放送監視室のラッパからは、彼と麻雀敵手である松山アナウンサーの朗かな聲が、お料理獻立を讀みあげてゐるのが聞えてゐた。

すると背後にコツコツと靴が響いて、局長室の扉の前あたりでそれが停ると、

『おや、今朝は、をかしいね。』

といふ聲がした。

植木冬助は、いやいやながら窓から首をひっこめると、その聲の方を見た。局長の秘書役である田川省三が、なにやら数通の白い書類を手に握つて局長室の前に佇立してゐたのだつた。

『局長は莫迦に遅いね。』田川は植木にぶつつけるやうに云つた。『こんなことは、放送局始まつて以來のことだ。まつたく珍らしい。』

『なにか急ぎの御用が、おありなんですか。』

と植木は訊ねた。もし技術方面のことだつたら、入局このかた目星しい仕事にも廻りあはなかつた彼のことだから、田川の相談に應じ手腕を發揮したい氣持も、しらすしらすの裡に動いてゐたのだつた。

『なアに、大したことぢやないんだ。』田川秘書は、なにを想出したのか、そこで苦笑をした。『ちよいとした手紙だ。——』

『手紙！？ どんな手紙なんですか。』

『イヤ昔は退屈しのぎ位にはなつたものだが、かう頻繁に同じやうなことを云つてよこしたんぢや、迷惑するばかりだ。だが君のやうに新しいひとには、珍らしいことかもしれない。閑暇があつたら一つ、讀んでみたまへ。』

さういふと田川秘書は、手にしてゐた書類を、ボンと植木冬助の机の上に放りだして、室を出ていつた。

閑暇を即刻こしらへることについて、植木は苦勞しなかつた。彼は、動物園のライオンが朝飯にと與へられた白兎に躍りかかるやうに、猛然とその紙束に飛びついていつた。

なるほど、それは手紙の何通かだつた。いろいろと異つた人達から送られた手紙だつた。どの手紙も開封せられ、展げられた用箋の上に色とりどりの封筒がクリップで止められてあつた。そして宛名はいづれも「放送局長、相部愼吾殿」と書かれてあつた。

植木は他人事ながら胸を躍らせて、まづ一番上に載つてゐる細いペン文字のレターを取上げた。それには「市外区町一九三二番地、吾妻操」と差出人の名があつて、四五枚の洋野紙に用件が認められてあつた。彼は、あきらかに興奮の跡の見える文字を熱心に拾ひはじめたのだつたが、數行讀むか讀まない裡に、彼の眼は異様に輝いて來、その若々しい豊頬は少女のやうに紅潮してきたのだつた。そこには、大體つぎのやうな事柄が、くりかへしくくりかへしくと述べたてであつた。

拜啓。御返事がありませんから、私はこれで五回目の手紙を書いて貴方様に出します。これは實に私にとつて、生命に關することなのでありますから、貴方様が御多忙なれば、大便をなさる節にでも、ちよつと手にもつて御読み下さい。さて毎度申上げてゐることでありますが、私は四ヶ月ほど前から、奇妙な電波に惱まされて居るのです。うちには受信機はありませんが、私にはそのやうなものが無くても電波がやつてくるのが、非常に鋭敏明瞭に判るのです。晝間はめつたにやつてきませんが、夜になるとやつて來ます。殊に十時過ぎになると、急に聲が大きくなり、甚だしいときには部屋中が割れるやうにヂャンヂャカ／＼やります。放送してゐる人は、二十四五歳位の人のときもあり、それに四十五六歳の恐ろしい男が加はることもあり、さうかと思ふと、時には二十人或ひは五百人位が一緒になつて、唱歌をうたつたり、私の悪口を呶鳴つたり、はては手を打ち床を踏みならし、石油罐をガンガン叩き、實に言語道斷の亂暴を働き、なんとしてもそれを止めません。彼等は私を殺すと云ふとります。それで慘酷にも放送の途中で何回となく、私の××を吸ひとるのであります。なんと歎願しても、遠方から手をいきなり××にさし入れまして、××のあたりをゾロリと撫でて吸ふのであります。まことに御恥かしい話であります。これを毎日少くとも三回多いときには十何回も續けますので、爲めに睡ることもできず、心身は衰弱し來り、既に今朝明け方までに、六百八十三回目の××をいたしました次第であります。このまま續けば、彼等の餌食となり貴重なる生命を奪はれてしまひます。どうか、生命に關することですから、明日と云はず直ちに、かかる電波を放送してゐる者共を取押へ、監

三月二十三日

吾妻操

放送局長 相部慎吾殿

二伸 どうか生命に係ることですから直ちにお取調べ御返事下さい。

ここまで讀み終つた植木冬助の脳髓は痙攣をおこしさうな恐怖に襲はれた。彼は手紙の束を抛りだすと、椅子を跳ねのけるやうにして、背後の窓から首をつきだした。全市街は何事をも知らぬかのやうに、うららかな陽光を浴びてまだ眠むたげであり、どこの塀割から舞ひあがつたのか、白い鷗が二三羽まるい軌跡を描いてゐるのが見えた。

「ふうーッ。」

彼は、深い呼吸をすると、又席へ戻つた。

そのあとに重なつてゐた手紙を残らず讀んでみたが、どれにも似たりよつたりのことが認められてあつた。或る者はそれを哀訴し、また或る者はそれにつき罵言を並べ、強迫めいた臺辭をつらねてあるものもあつたが、要するに「放送局長は、何故この奇怪なる放送を中止させないのか」といふことを申告

してゐるのだつた。

『やあ、お早う。』

イキナリ太い聲がして、局長が洋杖を片手に入つてきた。いつの間<sup>ま</sup>に下手<sup>しもて</sup>の硝子屏<sup>ガラスドア</sup>を開いたのだから、植木は氣がつかなくかつたので、鳥渡狼狽<sup>きうたどらうたい</sup>して立上つた。そのとき思ひついて、例<sup>れい</sup>の手紙の束を掴みあげると、局長の前へ持つて出た。

『お早うございます。先刻これを田川さんがお渡ししてくれと云つて置いてゆかれましたが……』

『ああ、さうかい。』といつて局長は手紙の上に目を落した<sup>おと</sup>が、心持ち面を曇らせたやうであつた。『うん、また氣狂ひ共の手紙だな。』

『氣狂ひ！』植木は思はず大きな聲を出した。

『局長、これは氣狂ひといふよりは、むしろ神經衰弱にかゝつてゐる病人なんぢやありませんでせうか。』

『どつちにしても、氣狂ひなんだよ。困つたものだ。』

『いや、氣狂ひと神經衰弱とは異ひますよ。』

植木は唇をブル／＼震はせながら、珍らしく局長の前でハッキリした物の云ひ方をしたのだつた。

『氣狂ひは、ちよつとやさつとでは癒りませんが、神經衰弱の方なら病氣ですから手當てさへよければ直ぐ癒ります。』

『ほほり、えらい權幕だね。』局長は自室の把手に手をかけようとしたりのを止めて、苦笑した。

『で僕の云ひたいことは、その手紙を寄越した連中は、大抵神經衰弱に罹つてゐる人です。彼等は、強迫觀念に襲はれてゐて、有りもしない電波を認識し、ラヂオに殺されるものと悩んでゐるのです。ですから局長の名をもつて、此後そのやうな電波を出さないやうにしたから安心をしろと、返事をお出しになれば彼等は片ツ端から癒つてしまひます。』

『さア、そいつはどうかね。』

『必ず癒ります。局長が一々訪問されて、電波を止めることにしたからお話になれば、一層効果があらる筈です。』

『ははッ、そんなことで』と局長は聲を立てて笑ひだした。『氣狂ひが癒るものなら、わしや苦勞をせんよ。』

さう云つた局長の語尾は、笑聲とは反對にしんみりした響をもつてゐた。

『人助けです。彼等に是非應へてやつて下さい。』植木は面を眞紅にして叫んだ。

『わしは御免を蒙る。』局長は屏の把手を押しながら儼然と云つた。

『では僕が彼等に應へてやります。これから行つて、この可哀想な病人たちを見事に癒して來ます。』

『ぢや君に委せる。』局長は明かに輕蔑の色を浮べて云ひ放つた。『だが氣狂ひのことだ。そこに書いてある住所姓名なんて、出鱈目が多いんだから、氣をつけたまへ。』

相部局長の背の高い瘦軀は、屏の向うに消えてしまった。

事の次第といふのは、そんな譯だつた。

後で調べてみると、其のやうな手紙には、ところ番地の無い匿名のが多かつた。植木はところ番地の  
ある分だけを選びだして、一軒一軒訪ねてみることに決心し、勇ましく放送局を飛び出したのだつた。  
ところが呆れたことに訪ねてゆく先きが、いちいち無駄だつた。番地が判つても、その差出人らし  
いものが皆目見當らなかつた。姓が違つてゐても同居人かも知れないからといふので、根掘り葉掘り問  
ひただしてゐると、『うちに狂人が居るだらうとは、なんとといふ失禮ないからいふので、根掘り葉掘り問  
夫人から叱りとばされたこともあつた。最初の意気込みはどこかへ振り落としてしまつて、唯後悔の念  
が泉のやうに湧いて來たのだつた。

そしていちばん最後に残つたのが、市外K町の吾妻操といふ、例の××を六百八十三回目で數へた  
主だつた。おそらく此の番地も出鱈目なんだから、手紙の内容が一風變つてゐるだけに、損しても無  
駄ついでに訪ねてみようとしたわけだつた。だが今朝から無駄足をすることを思ひつづけると、親切心  
から出發したことだけに、口惜しくてしようがなかつた。いくら住所が嘘であつても、ラヂオ殺人につ  
いての恐怖患者が澤山あるといふ事實は、斷然嘘ではない。——さう考へ直すことによつて植木は僅か  
に慰められたのだつた。

「やあ、妙なところで合ひましたね。」

さう云つて植木の肩を叩いたものがあつた。顔をあげると、そこには黒天鷲絨のウキーン帽にコール  
天の晝室衣のやうなものを着込んだ三十歳位の青年が、ニコクして立つてゐた。見たやうな顔だつた  
が、思ひ出せなかつた。

「僕、帆村ですよ。」その青年は、植木の顔色をすぐに讀みとつたものか、名を名乗つた。さう云はれて  
氣がついたことだつたが、その青年は二三度放送局へ來たことのある青年私立探偵だつた。

「帆村莊六さんですね。」植木は、やつと彼の名を思ひ出して云つた。こんな土地で探偵に廻り逢ふなん  
て、あんまりいい氣持ちやない。

『どちらへ——。』帆村が尋ねた。

「K驛まで——。」これだから探偵は嫌ひだといふのだと植木は胸の中で舌打をした。「貴方の方は、なに  
か事件ですか？」

「いや事件ではありません。友人の宅から招かれたもので、これから行つて見るところです。ときにK  
驛といへば、相部局長のところへでも、いらつしやるんですか。」

「相部さんのお家ですつて？」植木はこのとき始めて局長の住居がK驛の近所だつたことを思ひだした。

「違ひます、別の用事があるんです。」

こんな男に、うかうか例の狂人のことなんか話してたまるものかと植木は考へた。

「相部さんの御長男をごぞんじですか。」帆村は一向感付かぬ様子で、そんなことを云つた。

「相部吾一氏はW大學を出た僕の先輩なんですけれど、あまりよく知りません。」

「大分カフェ通だといふことですが、どんな風です。」

「さア知りませんね。」植木はぶつきら棒な返答をした。

「今度、結婚するとか云つてますね。」

「ははア、さよですか。」

「綺麗な妹さんがあるといふ話ですね。」

「へへえ、それはちつとも気がつきませんでした、そんなにシヤンなんですか。」ここに至つて植木は現金にも膝を乗出した。

「K驛ですよ、植木さん。——」

植木は肝腎のところ、帆村探偵のために横腹にドンと一發喰らつた形だつた。彼は遽でブラットホームに飛びおりた。そこには玩具のやうな便所と木柵と待合所とが竝んでゐる小驛だつた。驛の周囲は、どつちを向いても廣々とした畑が續き、家などは極く疎らに散在してゐるに過ぎなかつた。南方の一劃には、なんだか妙な形をした背の高い土手が城址のやうに立ち竝んでゐたが、どうやらそれは、射

的場らしかつた。

彼はそこで、尋ねる吾妻操の家が、線路の右側にあるのか、それとも左側にあるのか、見當をつけるのに悩んだ。だが兎も角も、ブラットホームに佇んでゐるところで埒があくまいと思つたので、出口を

探しつゝ待合所の前を通りすぎようとしたとき、

『もし、——』

と、背後から不意に聲かけられたのだつた。しかもそれは紛れもなく、艶のある若い女の聲だつた。

植木はその場にギョツと立竝んでしまつた。

「貴方、放送局の方でせう。」

彼は、恐る恐る、聲のする方に向きなほつた。そこには案に違はず、若い女性が立つてゐた。眼と口とが極めて大きい女だつた。さりかと思つて、これは決して醜く大きいのではない。眼がバツチリとし

すぎてゐるのだ。唇に集る情熱があまりに鮮かすぎるのだ。色は白といふよりも、幾分蒼味がかつ

てゐた。體はカナリヤのやうに纖細だつた。年の頃は十九か二十かと思はれたが、赤い友禪模様の着物

をきて十五六歳に見えもした。洋装の婦人が激しい勢で増加する時代に、どういふわけか、まことに

珍らしい姿だつた。髪といへば、これも耳隠しの七三が流行る一つ以前の、なんといふか、やや盛りあ

がつたやうな束髪で、そいつが亂れて、頸や頬のあたりに長い髪の毛が擲みついてゐるのだつた。

「さうです。放送局員ですが、貴女は？」

植木は、まるで嬰兒のやうに辟易しない女の眼眸に見据ゑられてドギマギしたのだつた。  
 『矢張り来てくだすつたのね。放送局の方が……。』少女は、すんなりした兩腕を胸のあたりに組んで、たいへん喜んでゐる様子だつた。

『あたしの手紙が届いたんだわ、まあ嬉しいこと。』

何のこともか餘りの意外さに呆然としてゐた植木は、このときやつと氣がついた。

『ああ、お嬢さん。』植木は衣囊から例の手紙の束を出しながら、聲をあげた。『貴女は電波のことで手紙をお出しなすつたんですね。すると貴女のお名前は——』

『あたし厭だわ。そんなもの、しまつて下さい。だつて恥かしいんですもの。』少女の柔かい手が飛んできて、手紙の束を握つた植木の手首をグツと押へた。植木は自分の心臓がハタと止つたやうに思つたのだつた。

『ね、いいでせう。』少女は早口に叫んだ。『あたし、貴方に聞いていただきたいのよ。二人つきりでゆつくりお話したいわ。さあ、あつちへ、ゆきませうよ、ネ。』

少女があまりに顔を寄せてくるので若い植木は、唯もう眩暈がするやうで、その場にぢつと立つてゐられなくなつた。彼は黙つて少女の引立てるのに身を委せる外なかつた。

それにしても今の今まで、彼の最後の訪問先である『吾妻操』が、男子だと思つてゐたのは、なんといふ大變な間違ひだつたらう。なるほど讀んでみれば『あづま、みさを』である。まことに優しい婦人

の姓名だ。なぜ其處に氣が付かなかつたのだらう。』

『どこへ引張つてゆくんですか？ 貴女のお家へですか。』

『あたしのお家？ ええ、さうなのよ。いいお家なんだわ。早くゆきませう。』

少女は植木の左腕を後から抱へたままグングン押していつた。彼の敏感な神経は上膊に集つて、彼女の圓く膨らんだ乳房のあたりを、あらはに感じた。

(しかしそんなことに何故氣がつかかなかつたのだらう。)植木は尙も考へを追つた。(さうだ。あれは男のやうな亂暴な筆跡だつた。それに、電波のお蔭で毎晩のやうに××をすると書いてあつた。あんな病的現象は、男に限るものと思つてゐた。——しかし彼女は待つてゐたのだ。わざわざ驛まで迎へに出てゐたではないか。彼女を除いて外に、住所を明かにした人間が一人でも居るかつてんだ。それにあのやうな病的現象は、女にだつて——)

『呀ッ、ここは射的場ぢやないですか!』

植木は、目の前に突然盛りあがつた大きな土塊を見上げると、ハツとして立ち止まつた。

『さうよ、射的場よ。だけど大丈夫なの、此頃お休みなの。奥の方にゆくと、靜かな、濇い草叢があつてよ。』

少女の聲は、ロマンチックな夢を見てゐるやうだつた。

黄色い、乾き切つた、艶と弾力のある、そして青い短い芽が交つてゐるその枯草の上を踏んで、二人

は奥へ奥へと進んでいった。躡て少女が立停つたのは、南の陽光を一杯にうけた防弾堤の真下だった。ベットのやうに深々と厚い枯草が敷きつめてあつた。その上に少女は、嬉々と聲をあげ、花のやうに坐つた。植木も迷惑さうに、少女と並んで腰を下ろしたが、ムンムンと生臭いほどの枯草の匂ひが鼻粘膜を刺戟して、一つの大きな嘔が出た。「ぢや、本氣になつて聞いて、ちやうだいネ。」少女は赤い袂を膝の上に重ねながら云つた。袖つけのところが大變大きく綻びてゐて、その間から白蛇のやうな皮膚が覗いてゐた。植木はゴクリと唾を嚙みこんだ。

「あたしを殺さうといふ悪漢があつて、ラヂオで毎晩、ひとのことを脅かすんですの！」

うわツと一聲悲鳴をあげると、少女は植木の膝の上に獅噛みついた。彼女は急に取亂した様子で、ところどころに啜泣きを交ぜながらクドクドと、例の脅迫電波事件の恐怖について述べたのだつた。植木は心から同情の念を起さずにはゐられなかつた。

彼は見るともなしに、目の前に投げだされた少女の露はな二の腕を見た。ネットリとした唾液のやうなものが付いてゐたのである。彼は少女が××のことについて一向切りださないのに、先刻から物足りないのであつたが、このとき、それは彼女が恥かしがつて云はないのであつて、實は××なんて男子ばかりに起るものではなく、女子にだつてあるもので、それを彼が今まで知らなかつたのは、自己の寡聞といふものだらうと考へた。

さう思ふとなんだか彼の兩膝には、少女の肉體を通じて、いやらしい觸感が忍びよつてくるやうな氣





がした。その上、溢れるやうな温い日差に彼の若い顔は眞紅に火照り、全身の毛穴といふ毛穴からはねつとりした汗が噴出してきた。彼はもう興奮に堪へきれなくなつて、圓味のある少女の肩に、つと腕を廻した。少女は咥くのを停めて、静かに顔をあげた。媚びを含んだ顔だつた。何事も豫期してゐたといふやうな……彼女の兩の眼は怪しい光に輝き、腫れあがつたやうな赤い唇がビクリと痙攣した。彼は少女が狂人であることも忘れて、矢庭に相手の體を抱きあげると、灼けつくやうな唇を壓しつけた。青空には一と切れの白い雲が、静かに流れていつた。

『やあーい。』

人の聲だつた。植木は、少女の體を、膝の上から突きつけた。

向ひあつた防弾堤の上から、五分刈り頭がこつちを見てゐるのだつた。植木は呼吸が止まるやうに驚愕した。

『やあーい、やあーい。』

躍りあがるやうにしてその顔は喚いた。歪んだ醜い顔だつた。二十二三歳になる男の顔だつた。

『やア、キの君だ、キの君だ。』

さう云つて少女は、亂れた裾のあたりを直さうともせず、ゲラ／＼笑ひ出した。

植木はそこで始めて、彼自身の演じた取返しつかない失敗に気がついた。放送局員ともあらうものが、婦人聴取者を訪ねてこれを××にした。おまけにその現場を、他人に見られてしまつた。しかもそ

の婦人は氣の狂つた少女だつた——彼は自責の念に堪へず、ブルブルと戦慄をすると、追緝る少女の手を拂ひのけて、ドンドン驅けだしたのだつた。

だが、廣い射的場を駈けぬけるのは、容易なことではなかつた。やつこのことで、塀外に出たときには、まるで蘇生したやうに感じたのだつた。そこで彼は、なほも歩調を緩めることなしに、一本道を急いだ。その一本道は、自然に曲つて、射的場の外廓に添ふやうな形となり、驛の方角へ續いてゐるらしく見えた。

その道を二丁程行つたところだつたが、そこに一軒の、かなり大きい邸宅が、ポツンと建つてゐた。その邸宅の横手には空地があつて、クレオソートを浸透させたばかりの新しい電柱が五六本、無造作に積み重ねてあつた。それはどうやら、この近所を通る電信線が、柱とともに取換へられることになつてゐるらしかつた。

その電柱置場の前まで來た時だつた。

『えへん。』

と、わざとらしい咳拂が聞こえた。植木は驚いて、あたりを見廻した。だが別に、豫期したやうな人影は見當らなかつた。彼は不思議に思つて尙も注意して見ると、地面に寝かせてある太い電柱の蔭から、人間の首だけが、こつちをギョロ／＼眺めてゐるのであつた。

オヂラ殺人事件  
『呀ッ。』

思はず植木は駭きの聲を發した。キノ君——と少女が先刻呼んだ氣味の悪い男の顔だった。枯草の上で氣狂ひ娘を捉へて怪しがる振舞におよんでゐるところをすつかり見られてしまった其の男だった。どうやらキノ君は、先廻りをする、電柱置場に隠れて、彼の通るのを待つてゐたものらしい。

『やい、色きちがひ！』キノ君は植木を目懸けて、下品な言葉を放つた。それとともに、キノ君の全身がムツクリ電柱の蔭から立上ると、大きな土塊がバラ／＼と飛んできて、植木の身邊に落下した。色狂人と呼ばれて、植木はクワツとした。彼は前後の見境なく、キノ君をやつつけるつもりで、溝を飛び越えて向つていつた。

キノ君は第二弾を放つために、右腕を高くあげた。しかし其のとき、何事が起つたのか、彼は俄に狼狽をはじめ、土塊をその場に抛りだすと、植木の居るのも忘れたかのやうに、無遠慮にも、クルリと着物物の前を捲くつた。植木はこいつに面食つたが、それを絶好のチャンスとばかりに、後をも見ずに其の場を逃げだしたのだつた。

驛は幸にも、すぐ判つた。

植木の心配を裏切つて、誰も追駈けてくる様子はなかつた。

彼はやうやく落着を取戻して、驛の木柵のところまで遊んでゐる子供達に話しかけるほどの餘裕が出来た。

『キノ君——て誰だい。』

『キノ君！ あれは白痴だよ。』

『白痴で、氣狂ひなんだよ、をぢさん。』

『氣狂ひだから、キノ君て云ふんだよ。』

そこへ電車がやつてきたので、植木は遽てその方へ飛んでいつた。

狂人ばかりである。彼も色狂人と呼ばれた。いまの子供達も皆、狂人だったかも知れない。さう思つて車内を見廻すと、どの乗客も狂人じみた顔付に見えてくるのだつた。彼の悪夢は、電車が動きだしても、容易に醒めなかつた。

放送局長の相部慎吾博士が突然行方不明になつたといふ驚くべきニュースが擴がつたのは、それから二週間ほど後のことだつた。

或る要件で、關西方面に出張中の帆村探偵は、田川祕書から招電により、急遽歸つてきたのだつた。旅装を解く違もなく、探偵は直ちに自動車を、放送局へ飛ばした。

『ああ、帆村さん、大變なことになつちやいましたよ。』

と田川祕書は、帆村をだだつ廣い會議室の中に請じいれると、泣きだしさうな顔をして、さう云つた。『局長さんが行方不明になられたんですつてね。』帆村は先づ、靜かな言葉で、祕書を慰めた。『そして警

視廳の捜査課を差置いて、私を必要となさるその理由は？」

「それは唯今ハッキリと申し上げられません。田川秘書は遺憾を表すために首を左右に四五遍振つてみせた。『ですが、かういふことだけは申し上げます。それは明日の正午までに局長の生死のほどが判明しないと、わが放送局は非常な不利益を招くことになる。いや、もつと大きい問題です。』

帆村は、某所で一寸聞込んでみた材料があるので、田川秘書が、どんなことを云ひたがつてゐるのか、少しは見當がつくやうに思つた。

『すると時間の餘裕は、かつきり二十五時間ですね。』腕時計の指針は十一時のところに固まつてゐた。

『では顛末を、できるだけ詳しく伺ふとして最初に一二質問して置きたいのですが、一體局長さんを最後に見たのは何時のこと、場所は何處、人は誰です。』

『それは今から三日前、云ひかへると、四月八日の午後五時三十分頃のこと、放送局から、中央驛まで送つて行つた自動車の運転手が、驛の階段を急ぎ足で昇つてゆかれたのを見たといふのが最後なんです。』

『局長さんのお家は、郊外のK町ですね。』

『さうです。K驛で降りて、寂しい路を通り、十五分程も行つたところです。射的場の直ぐ傍になつてゐます。』

『それでは、行方不明の顛末を話して下さい。』

さう云つて帆村はシガレット・ケースの中から一本のホープを拔出すと火をつけた。

田川秘書は大きく頷くと、懐から小さい張面を出し、その或る頁を開いて、話を始めたのであつた。

それによると、相部局長の姿が最後に放送局に現れた日のその翌日、時間はお晝近くだつたが、田川秘書の卓上電話がヂリヂリ鳴つたので、受話器を取上げてみると、それは局内の交換手の聲であつて、相部局長の息子さんから掛つてゐるから聞いてくれといふことだつた。聽て令息の相部吾一君の聲が電線の上を流れて來た。

『おやぢは出勤してゐないさうですが、どつかへ出張でせうか。』

『いえ、出張なんてことはありません。』秘書は言下に否定した。『私は、局長が先日の御不幸でお疲れになつて、それで今日はお休みになつたものだと思つてゐました。』

局長は先日、吾一君のすぐ下にあたる令嬢の春恵さんを亡くされ、爾來七日間といふものは忌引で休んで居られた。前日は忌引が明けて始めて局へ顔出しをされたのであつたが、その間に積り重つた重要問題を處理されるために、悲歎と疲勞の抜切らない身體を、無理に使はれた。それで又、身體を壊されたのだと思つてゐた。

『そりや可笑しい。おやぢは昨晚、家には歸つて來ませんでしたよ。』

『變ですね。昨日こつちを五時過ぎに、御退出いたされました。中央驛まで自動車でお送りした筈です。』

これは調べてみませう、直ぐ判りますから……。」

そこで先刻のやりに、局長が五時三十分頃に、中央驛の階段を昇つて行つたことが判明したのだつた。

『おやぢは何か變つた様子でもなかつたですか。』

『さア、お顔の色は悪かつたやうですが、外には別に……。』

『さうですか、ありがたう。親類の家へ行つたのかも知れませんが、ほかを探してみませう。』

そこで電話は切れた。

ところが、それから十分待つか待たないうちに、令息吾一君の姿が、突然放送局に現れた。

『どうも判らん。』令息は田川秘書の前で頭を左右に振つた。『今朝調べてきたんですが、おやぢの机の上にもいつも載つてゐる日記帳が見えなくなつたんです。局の方に置いてあるんぢやないかと思ひますが、調べて下さい。』

『日記帳が今朝見えなかつたと仰有るんですが。ぢや局長室へ御案内しませう、どうかこつちへ。』

田川秘書は、令息を局長室へ入れると、

『どうぞ御遠慮なくお探し下さい。』といった。令息は、非常な速度でもつて、机といはず書類棚といはず、室内のあらゆる場所を搜索した。しかし探す日記帳らしいものは発見されないやうであつた。

『ぢや田川さん、甚だ恐縮ですが、そつちの書類函の抽斗を調べて下さいませんか。表紙は黒皮で、天金、四六判の日記帳です。』

さつきから入口に立つて、令息の搜索ぶりを眺めてゐた田川秘書に、突然この頼みがあつた。田川は快く承諾して、命ぜられた書類の鍵を開き、抽斗を一つ一つ引出して日記帳を探しにかかつた。そのとき何の氣なしに、書類の硝子戸を鏡にして、背後にゐる吾一君の方を見た。

『オヤ！』

田川秘書は心の中で驚愕の聲を發した。そこには、令息が、どこで探し出したのか、一束の書類を大急ぎで懷中へねぢこむ現場をみたのだつた。それは明かに、田川には内密に行はれたことにちがひなかつた。田川は急に立腹して、令息の懷から書類を瀉出させてやらうかといふ考へが浮んだが、まアまアと思つて、それを實行しなかつた。

令息が局長室を引上げていつたのは、それから直ぐのことだつた。秘書は、局の幹部に相談をして、公用で局長が立寄るかも知れない先を一々電話を懸けて、尋ねてみたのであるが、これに對して参考になるやうなことは一つも聞出せなかつた。そこで一方、警視廳へ届出ると同時に帆村へ電報を打つことにした。しかし警視廳の方へは、令息がコツソリ書類の束らしいものを盗んで行つたことについて、供述しないことにした。

田川秘書の話は、大體右のやうなことであつた。

帆村は、秘書の話が終つたのも一向知らない風で、暫くはホープの煙を空間に吹散らしてゐた。

『では局長室を調べさせて下さい。』帆村は夢から醒めたやうに、椅子から身を起して、云つた。『その前

に、電話をちよつと掛けて置きたいですな。」

彼は卓上電話機をとりあげると、自分の事務所を呼出した。助手でもが出てきたらしい様子だったが、帆村はそれと、何やら判らぬ言葉で短い會話のやりとりをしたのだつた。

局長室は會議室から十歩と距つてゐないところにあつた。三間四方位の氣持のよい室で正面には、日本を中心とする世界各國の等距離地圖が懸つてゐた。周圍の壁際にピツタリ添つて、大きな本棚や書類函がいくつも並んでゐた。室の中央部に敷かれた厚ぼつたい絨氈の上には、ラックでピカ／＼光る事務机とその下に兩脇を突込んだやうな空つぼの廻轉椅子があつた。局長の愛飲したらしいハバナの葉巻の香りが、どこからともなく漂つてきた。

『あの人が書類を懐に入れたといふのは、どこから出したものなんです。』と帆村は尋ねた。

『その事務机の左袖に鍵のかかつてゐる小抽斗が三つありますが、そのどれか一つです。』

帆村はその三つの抽斗を一々開いてみた。一番下には葉巻煙草の空箱がゴロ／＼入つてゐた。その上には、書簡箋や封筒が入つてゐて、その一つ上の抽斗には領收書の束や、ゴルフ倶楽部の會員證や、私信と思はれる手紙が二三通入つてゐた。これから考へると、令息吾一君の取出した書類は一番上の抽斗であつて、私用に關するものらしいことが想像されるのであつた。

帆村はそのとき、吾一君に目下結婚問題があることを、この事件とあはせて考へてみずにはゐられなかつた。吾一君と面と向つて話をしたことはなかつたが、その結婚話の相手といふのが、帆村と同郷の

先輩の妹であり、そのために彼は吾一君の身許や信用調査をやつたことがあつた。その先輩といふのは可なり名望と資産のある家だつたから、吾一君のやうなお坊ちゃんには、逃がすことのできない相手だつたことであらう。しかしそれが局長失踪事件なり、吾一君の書類盗出事件なりと、どんな關係があるだらうか。

『ここに妙な手紙がありますね。』帆村は、局長の机上から、例のラヂオ殺人恐怖病の連中が寄越した手紙を見付けてしまつた。

『毎日のやうにそんな手紙が来るので、いやになつちやいますよ。』秘書は苦笑した。それにも返事をせず、帆村は一枚一枚を丹念に開いて讀んでいつた。

『おお此處に、まだ封を切つてないのがありますね。これを見せて戴くとして、ねえ田川さん、もつと古くからの手紙がありませんでせうか。』

『あまり古いのは破棄しましたが、一と月この方ぐらゐのものなら、こちらに綴つてあります。』田川は書類函の抽斗から、かなり厚い手紙の束をとりだした。

帆村は、手紙を一々選りわけて、廣い机の上いつばいに並べていつた。それが濟むと、そのうちのいくつかについて、用箋の紙質をしらべたり、懐中から小さい瓶を出して用箋の一部に振掛けたり、そのあとで蟲眼鏡を出して永い間覗きこんだり、さうかと思ふと、消印を別の紙に寫しとつたりした。その間に帆村の顔面はだんだん緊張してきた。

「田川さん、局長の出勤時刻と、退所時刻とが、この一ヶ月の間にわたつて、判つてゐますか。」と帆村が突然顔をあげて云つた。

「それは判つてゐます。『秘書は答へた。』ですが局長の出勤退所は、いつも大抵、判子を壓したやうに同じですよ。』

「とにかく一覽表を拵へてください。」

秘書はすぐに電話でもつて、庶務へそれを依頼した。

「ところで鳥渡伺ひますが、」と帆村は何を思出したのか顔色を急に和らげて云つた。「かういふラヂオ恐怖症へは、放送局として、どんな手當をお與へですか。」

「それは、もう……。『秘書は兩眼をバチクリさせて口籠つた。』なんしろ相手は氣狂ですからソツとしてあります。』

「返事も出してやらないのですね。』

「さうです、勿論。』秘書は答へた。

「でも彼等は、自分が電波で殺されると、大騒ぎをしてゐるんでせう。それを抛棄つといて、大丈夫ですか。』

「でも彼等が事實電波で死んだといふ話を聞いたことがありません。それに放送局はそんな馬鹿げた電波なんか出してゐませんもんですから……。』

帆村は秘書の融通のきかぬ頭腦に呆れて、黙つてゐた。(局長が、その電波といふやつで殺害されたんだつたら、どうします!)と云つてやりたいところだつたが、まあまあと自重した。

その顔色を読んだものか、田川秘書は、辯解するやうに云つた。現に一度、局の者が手紙の差出人を調べに歩きましたが、たつた一人を除いては、残りの全部が出鱈目の住所氏名を書いてあつたさうです。』

「それは面白い。』帆村は眼を輝かせて云つた。『その人を此處へ呼んで下さい。』

田川秘書は心得て、局長の事務机の上に載つてゐる呼出釘の一つを、指で壓した。

やがて入口の扉を、軽くノックする音がきこえた。

其處へ現れたのは外でもない植木冬助だつた。彼の眼は明かに狼狽の色を見せてゐるのだつた。

植木の姿を見ると、帆村は大きく肯いたのだつた。

「ああ、君でしたか。』帆村は云つた。『先日はいい所で貴方にお目に懸つてゐながら、僕のお喋りが過ぎ、あたら大きい鯉を逃がしてしまひましたよ。』

植木には探偵のなんでもない言葉までが、皮肉に響いたのだつた。

「實は田川さん。』とその場の様子を解しかねてゐる秘書に呼懸けた。

「植木君には先日、K驛附近でお目にかかつたんですよ。あれは三月の廿五日でしたね。』

植木は帆村の視線を感じて、黙つて頭をさげた。三月廿五日は彼にとつて忘れられない日であるもの

を。  
『こちらの話では、貴君は一軒だけ、ラヂオ恐怖症の人を見付けられたさうですが、それは何といふ人でしたか。』

『それは……。』植木は、局長の机の上に所狭しと擴げられた狂人達の手紙をみて、流石に言ふのを躊躇してゐる風だつた。

『それは、吾妻操といふ婦人です。』

『ナニ吾妻操、といふ婦人？』帆村は駭きの聲をあげて、思はず椅子から立上つた。その手には、吾妻操から局長あてに送られた十二通の手紙が、しつかりと握られてゐた。

吾妻操からの手紙が、最近三日間、パツタリ来なくなつたのは、どうしたのだらう。局長が行方不明になつてからも、三日間になる。これは果して暗合だらうか。それともあの男が持つていつたのだらうか。『帆村は無意識に呟いたのだつた。』

帆村探偵と植木冬助とが連れ立つてK驛に降りたのは、その日の夕刻のことだつた。朝からの、變に濁つたやうな天候は、ますます悪くなつて、寂しい野道をゆく二人の頬のあたりに、生ぬるい風が當つた。道傍では、電信工夫の一團が、新しい電柱を樹て終つて、雲足の早くなつた空を眺めながら、手押

車のうちに道具を片付けてゐた。古電柱を引抜いた穴はこの下には、工夫が一人、泥まみれになつた帽子を動かして何か仕事を急いでゐるらしかつた。

それから十町ほど、一本道をゆくと、射的場の高い土壁がいよいよ間近になり、一軒の大きい邸宅が見えてきた。その邸宅は、植木にとつて見覚えのあるものだつた。

『呀ッ！』

植木が、怯えたやうな聲をあげて、立止まつた。

『どうしたツ、植木君。』

『キの君です！』植木は邸の前を指した。それは、いつかの日、彼の醜態を發見され、『色狂人』と罵倒された、不思議の男キの君だつた。

『キの君つて？』帆村は聞返した。

『あの土をいぢつてゐる男のことですよ。白痴で氣狂ひなんですつて。』  
『なにも怖ろしがることはないぢやないか。』

帆村は、小犬に怯える子供を叱るやうに、無造作に云つてのけた。『知らぬ顔をしてゐりや害はしないさ。』

キの君は邸の前で、土饅頭のやうなものを拵へてゐたが、二人の近付くのに氣がついたものか、急に飛上ると一目散に、その隣の空地へ逃げ込んだ。そこには、もうせん積み重ねられてあつた電柱は一本

も見當らなかつた。キの君は、その歪んだ醜い顔をチラリと背後に向けたが、一人の眼がそつちを見てゐるのを知ると、一層遽てふためいてドンと逃げていつた。その方向に一軒の小屋みたいな家が小さくみえてゐて、その脇に、竹竿に結びつけたアンテナが、ゆらゆらと揺いでゐた。

『さア、入りませう。』帆村が云つた。

『ええッ。』

『ここが相部さんのお家です。』

植木の顔は、みるみる不安に閉ざされていつた。二人は、山寺のやうに陰氣くさい書院に案内された。床の間には、亡くなつた令嬢の靈を祭る壇があつて、白い造花の花輪が、幽界の幻影のやうに浮んでゐた。急に黄昏の色が濃くなつて、庭の八つ手にポトリ、ポトリと音がした。氣持の悪い風が、塀外からスーウと入つてくると共に、大粒の雨がドツト降りだした。雨脚は硝子管のやうに太く、庭の上がポーッと白く光つてみえた。電燈はどうしたものか一向に頷く氣配がなかつた。

そのとき廊下に黄色い灯影がチラ／＼し、五十近い老婦人が燭臺を捧げて入つてきた。局長夫人である。帆村は、令嬢の不幸と、いままた局長の失踪とにつき、まことに同情に堪へないと挨拶した。夫人は泣き腫れた眼をあげて、クドクドと我が身の不幸を慨いた。

帆村は用件を切出すに先立つて、令嬢の佛前に、焼香することを忘れなかつた。夫人はそのやうなこにも喜んで、祭壇の兩脇に、小さい蠟燭を點けた。『令光院春淺惠日大姉』と書かれた位牌の前に、令嬢の寫眞が一枚立てかけてあるのが、クツキリと浮び出た。帆村は、そこに評判の美人だつたといふ春惠子の楚々たる姿を靜かに拜して元の座に下つた。

次に植木が席を動きだしたときには、帆村はもう重大な質問を、夫人に投げかけてゐたのだつた。

『四月八日に、こちらへお歸りになつた形勢は全然ありませんか。』

『はい。俵が家の周囲を念のために探してみましたが、靴の痕もございません。』

『なんかその夜、怪しい物音でもお聞きになりませんでしたか。』

『あれは七時ごろでしたか、塀外で何か人聲を聞いたやうな氣もしましたが、ラヂオを聴いて居りましたので、何うもハッキリいたしません。』

『相部局長の日記帳が無くなつたさうですね。』

『日記帳でございますつて？ さア存じませんが……。』

『御子息の吾一君が、さう仰有いました。』

『ああ、それでは、』と夫人は遽て云つた。

『さやうなことがあつたかも知れません。』

『吾一君の御結婚は決まりましたか。』



『お蔭さままで、纏りさうでございます。』

『御嬢さまは、何病でお亡くなりでしたか。』

『はい、それは……。』矢継早の質問に駭いてか夫人の言葉は、鳥渡つかへた。

そこへ女中がドタ／＼とやつて来て、夫人に何か囁いた。夫人は、二人の方へ挨拶をして、逃げるやうに室を出ていった。

『帆村さん、大變です。』夫人の姿が消えると、植木は待兼ねてゐたかのやうに、帆村の腕に取組つた。彼の顔は、泣きださんばかりに歪んでゐた。

『早く云ひたまへ。』

『あすこに、死んで祭られてゐるのが、吾妻操です。僕はあの顔を覚えてゐます。あの女は、電波に憑り殺されたんです。』

『莫迦を云ひ給へ、あれは局長のお嬢さんぢやないか。君は間違へてゐるよ。』

『そんなことはありません。私はあの婦人から、すべてを聞いた。』

『植木君。それで判つた。——』帆村は取亂してゐる青年技師の胸倉をひきよせて云つた。

『君は吾妻操だと信じて、あのお嬢さんと語つたのだ。吾妻操は別の人だ。それはかういふ假定をすれば説明がつく。いいかい、相部屋長のお嬢さんも、實はラヂオ殺人恐怖症だつたんだ。放送局長の娘と、ラヂオ恐怖症。それは不自然なことではない。』

『ああ、あれは春恵さんだつたのか。』植木は悲痛な聲で叫ぶと、帆村の腕をふりはらつて祭壇の前へ轉るやうに近付いた。

『春恵さん。……春恵さん。……ああ、春恵さん。僕は一體どうしたらいいでせう。』

植木は、春恵の寫眞をとつて頬擦りをしながら、嗚咽をはじめた。

そのとき廊下にガヤ／＼と人聲がして、こつちへ近付いてくる様子だつた。

帆村は後へ退つて、キリツと身構へをした。途端にパツと電燈が點つて、室内が晝のやうに明るくなつた。入つて来たのは、意外にも令息の吾一君と、それに竝んで帆村が放送局から命令を傳へた彼の部下である佐野が立つてゐたのであつた。

『帆村さん。』令息の吾一君は、きまりの悪さうに唇を曲げた。『僕は貴方のお邪魔をしたやうです。けふは、佐野君にとつちめられ、家へ歸ると母から迫られました。白状しますが、僕が放送局で盗んだといふ書類は、ここにありますが、亡くなつた妹の發狂に關する診斷書や、あいつが出すと云つてきかなかつた手紙やなんかなのです。父は心配のあまり、それを手近に置きたがつてゐました。妹は三月の三十日に、突然心臓麻痺で亡くなりました。僕は結婚問題が進行中だつたもので、相手の婦人や親達に、妹が精神病であることを知られるのを極力忌憚したんです。それで僕は、父の失踪を氣付くと何を置いて、一件書類を父の局長室から盗出さねばならなかつたんです。折角父を探して下さる貴方たちの邪魔をして、すみませんでした。』

吾一君は、後悔の念をあらはして云つた。

『所長！』佐野が、その言葉の終るのを待ち兼ねて云つた。『相部さんが、失踪された日の午後六時過ぎに、射的場の近所を歩いておられるのに逢つたといふ電報配達夫を見付けました。相部さんは、何か大變考へごとでもしていらつしやる風だつたといふことです。』

帆村は大きく肯いた。

『奥様にお伺ひしたうございますが。』と彼は衣囊から取出した一枚の紙を擴げて云つた。『御主人は御出勤も御歸宅も非常に正確だつたとのことですが、先月の廿五日には、大分御出勤が遅れたと放送局では云つてゐますが、何か御心當りは、ございせんかしら。』

『ああ、それは。』夫人は指を折つて考へてゐたが、『それは多分、その朝、吾妻さんの御病人をお見舞したのに違ひありません。』

『おお、吾妻さんですつて。』帆村は身體を前に乗出して云つた。『吾妻操といふ病人なんです。』

『よくご存知ですね。この近所では、キの君と云つてゐますが、昔からの氣狂ひなんでございませうです。』

『キの君が、吾妻操だつたんですか。』帆村は急に不安さうな面持になつた。『あいつの家はこの裏の方です。』と局長は失踪の日の歸途、キの君を訪ねられたのだ。あの狂人に逢へば判る筈だ。だが、なんといふ怖ろしいことだ！

帆村と佐野とは、硬い決心をして、暗夜のなかに飛び出した。外は風を加へて、雨勢はさらに激しく六分と経たない間に、二人の全身は襦袢まで濡れてしまつた。雨水は氾濫して、そここに大きい水溜をつくり、彼等の脛は、幾度か水中に没した。

野中にボツンと立つた吾妻操の家からは、微かな灯の光も洩れてはゐなかつた。二人は周到な警戒のもとに、表からいくたびも呼んでみたが、一向に應ずる様子はなかつた。それで己むを得ず、裏手に廻ると、雨戸をこち明けて侵入した。右手に拳銃を握りしめ、左手には煌々たる懐中電燈を振りまはしながら、土間から居間へ、それから便所、天井、さては床下に至るまで、詳しく調べてみたが、操も、彼の母者人といふのが一所にゐるといふことだがその婦人の姿も、全く見當らなかつた。

『所長、押入の中の行李なんか、たいへん亂れてゐますね。』

『うん。あいつ等はすらかつたんだな。』  
帆村が差向けた懐中電燈の光の前に、この家のものにしては、ちと立派すぎる茶色の中折が轉がつてゐた。

烈しい豫感がして、その帽子の裏を、ひつくりかへしてみると、ボルサリノの商標の横にS・Iと、紛れもなく局長の頭文字が記されてあつた。

『ここに手帳が落ちてゐる。』

『やつぱり、吾妻操が、やつつけたんだ。』

二人はこれに力を入れて、もう一度丹念に家探しをしたが、結果は二人の疲労を増したにすぎなかつた。この一家のものが、局長を殺したのだ。それは操がラヂオ恐怖症になり、局長に電波を止めるやうに前後十数回も懇請したのに聞き入れられなかつたに原因してゐる。勿論、そんな出しもしない電波を止める法はなかつた。局長は、春恵子が同病になると、操に對しても同情をもち、前後二回に亘つてこの家を見舞つたものと見える。しかも操はこの電波屋の張本人が彼の生命にあまり冷淡であるのを怒り、この張本人さへ死んでしまへば電波は彼を日毎夜毎に責めさいなまないだらうと考へ、四月八日、局長の姿が現れると、惨殺してしまつた——と帆村は結論を下した。しかるに、この結論を裏書するに足る局長の死骸が一向に見當らない。二人困憊の揚句、その場に相重つたまま打倒れてしまつた。廳で東の空が薄明るくなつてきた。

帆村は、まづ目を醒して、フラ／＼と起上つた。戸を開いて外へ出ると、雨はもうすつかり上つてゐて、家の前の眞新しい電柱の半面が微かに光つてゐた。

『呀ッ——』帆村は、突然に聲をあげた。『おれは、こんな重大なものを見遁してゐた。』  
彼は顔色をかへて、家の中にとつてかへすと、助手の佐野を叩きおこし、全速力で街道めがけて飛出したのだつた。二人は何遍となく、ぬかるみの中に滑つて、全身を泥まみれにしながら、やつと局長の邸宅の塀のところまで辿りついた。

そのとき帆村は、佐野の腕をとらへて、無言に指した。その指の向ふところを見ると、おお、何といふむ

ごたらしいことだらう、泥水の流れ去つた址の道傍に、ポツクリ大きな穴が明いてゐて、そこには暗紫色に腐爛した人間の首が、クワツと眼玉を剥いて、曉の空を睨んでゐた。それは紛れもなく放送局長相部慎吾氏の死首にちがひなかつた。その穴のある地點は、前の日に、キの君が土饅頭を拵へてゐたところに相違なかつた。キの君は、不用意に電信工夫が埋めずに行つた電柱の深い穴に、局長を背後から一撃を喰はせてつき落とし、その上に土を被せてしまつたのだつた。その後、氣になると見えて、穴の上に土を積んで行つたのが反つて昨夜の雨水を堰きとめ、局長の死首が洗ひだされる結果になつたのだつた。

二人は、その死首の下にある筈の、糜爛しきつた死屍のことを思つて、ベツと唾をはいた。

裏返しロボットの

いとしい細君の眞弓子について保夫が疑ひを持つやうになつたのは、なにも今度が始めといふわけではなかつた。ずつと前のことであるが、あれは紀元節近くの或る土曜日の晩だつた。日比谷の市民倶楽部で仲間と際限なしの撞球をついてゐるうちに、なんだか首筋がゾーオと寒くなつて来た、と思つたらどこかの部屋でガチャーンと四五枚も皿が破れたやうな鋭い物音がした。もうゆつくりした氣持が壊れちまつて、時計を見ると、驚いたことに午前二時に近い時刻を指してゐた。もう止めようといふことになつて、酒場から無理を言つてとりよせたジン・カクテルの乾杯を最後として、一同は倶楽部からゾロゾロと出た。外はいつの間にか白いものがチラ／＼と降り出してゐた風がすこし吹いてゐるらしく、十字路のあなたにグオーツと低い呻るやうな音が聞こえた。

(往來は寒さうだな、早く自動車でも通つて僕を拾ひあげて行つてくれないかな)

そんな子供らしい願ひ事をたててみるのも満更わるい氣持がしない程、もう適度のアルコールが保夫の全身を暖めてゐた。

クエール、ル、ル、ル、ジンジンジン。

あ、自動車だ、保夫は大急ぎで口にくはへたチェリーに火を點けた。眞黒な大型のセダンが、靜かに停つた。

『あなた、お迎へに来てよ、お驚きになつて……?』

『……眞弓子』

眞弓子は、道々彼をどんなにか愛撫した。魔法瓶に入れてもつて来たといふ熱い紅茶をのみながら保夫は夢見るやうな氣持だつた。これまで彼に楯をつくことの多い細君から、こんなに愛撫されようとは、こんな夜更け、こんな遠路に迎へに来て貰はうとは——それに今朝は今朝とて、あのやうに喧嘩を一幕演じて飛出したのではないか、しかし彼は、細君の急角度の性格一變を満喫する傍ら、不審をもたずには居られなかつた。

それから、こつちへ三ヶ月。細君の眞弓子は一度だつて昔のやうな反抗を見せはしなかつた。彼が欲するところのものは、口に出して言はない先に、細君の方から進んで満たしてくれた。チーズが食ひたいと思へば、(心の中で思ふだけで充分であつた) 直ぐ扉がサツと開いて細君が小さい扇形に切つたチーズの皿を捧げて入つてくるといふ風だつた。彼は細君のサーヴィスのよいことを喜ぶ前に、その讀心術的な炯眼に恐れを抱くやうになつた。

それにもつと困ることが、この頃になつて生じた。といふのは、細君がこの頃非常に圓熟した×的満足を彼に與へるといふことであつた。そのために保夫は、今日も今日とて、鏡の底に映る、メツキリ色艶

の褪せた自分の顔色にはつきりした恐怖を覺えたのだつた。この分では、自分の壽命も、もう先が知れてゐると思つた。それにしても、昔はあれほど、自分とは氣の合はなかつた細君が、どうして一分一厘も隙のない、まるで自分をもう一人、女に仕立てて細君の位置に置いたとでも言ふより外に説明のしようがない人物になりきつたのであらうか。若し彼が好んである種の慾望を限りなく持つならば、彼の細君は、常に彼の要求に應じつゞけるであらう、たとへその慾望を遂げることが彼の壽命を極度に縮めてしまふやうな性質のものであつても……彼の細君は、彼にとつて、自製の全く缺けた、女裝したもう一つの彼以外の何物でもなかつたのである。

細君の眞弓子は、果して昔の眞弓子それ自身であらうか？

——彼は、この頃噂にきく或ることを不圖思ひ浮かべて、ゾーオツとした。それは、近頃某所において、非常に精巧なロボットが作られてゐるが、それは今までのやうに鐵製の假面をつけた甲冑人形のやうなロボットでもなく、又セルロイドで作つたやうなつめた乾枯らびた人形でもなく、皮膚は人間のやうに柔らかなめらかで攝氏三十七度の體温をもち、應答は巧で、なにをやらしても主人公を怒らせない程、忠實な人造人間で、その道の専門家にも見わけがつかないといふことである。若しや、もしや、誰かの悪戯で、本當の眞弓子はいつの間にもやら、ロボットの眞弓子に拘りかへられてゐるのではあるまいか。さういへば眞弓子はこの頃のロボットのやうに忠實な細君になりきつてゐる。あゝ、おそろしいことだ。それはおそろしいことだ。機械人形を細君に持つて現を抜かしてゐる穢ない亭主——それが自分である。

分である。

それにしても、細君が人造人間なのだつたら、本當の眞弓子はどうなつたのであらうか。魔物のやうな大惡漢に掠はれて、どこかに泣いて暮してゐるのではあるまいか。そしてその大惡漢は自分に人造人間の眞弓子を與へて行つたのではあるまいか。それから若しかすると、こんなことを考へられぬではない。眞弓子が自分に愛想をつかし、他の男と新生活に入るために、人造人間を買つて來て、彼女の身代りに自分のところへ残して行つたのではあるまいか。ウン、それに違ひない。それに違ひないのだ。本當の眞弓子は、どこかに隠れて生きてゐるのに違ひない。そいつを探し出さずに居るものか。保夫は家を飛び出して、驚く知人達の家を一軒一軒、尋ねて歩いたのである。

ところが、更に驚くべき事實がそれからそれへと判明して來た。「君の話聞いて僕は思ひあたるのだが」と保夫の告白をきかされた友人のAが、顔色をサツとかへながらいつた「實はうちの細君が人造人間にかはつてゐるらしいのだよ」と彼は、保夫の告白に近い一くさりの譚をきかせて、果てはワツと泣き出したのであつた。

友人のBのところでも、それからCのところでも、同じやうな驚きが捲きおこつた。保夫は火のやうに熱して、ありとあらゆる知人のところを訪ねて廻つた結果、彼等の細君はことごとくロボットに代つてゐることを確めた。すべての女はロボットに代つてしまつた從順な細君なんで、なんとイヤらしいものではないか。いや、もつと怖ろしいことが考へられる。自分が訪ねて廻つたあの人交際のよい知人た

ち、——あの知人たちもまた、すでにロボットに代つてゐるのでないか。さもなければ、あんなに自分に對してやさしくしてくれるはずがない。

ああ、ロボットだ。ロボットだ。

ああ、人造人間の世界だ。人造人間の中に紛れこんだ自分ひとりお化けの世界に、たつた一人とりのこされてしまつたのだ。保夫は頭の毛髪をビリビリとかきむしりながら、跣足のまゝ、往來にとびだすと、眼の玉を据たまゝ、當途もなく幕地に驅だした。

もう何時間か驅つづけた。保夫の衣服はズタ／＼に裂けて全身は埃にまみれてゐた。

いくつ目かの明るい大通へ出た。黒山のやうな人ばかりだ。何事かあつたと見える。女が自動車に跳ねとばされたつて。どいた、どいた、どいたッ。保夫はその人ばかりの中心目指して飛びこんだ。その女らしい青白い肉體が見えてくるではないか。

「呀ッ、真弓子！」

彼は、その女にとびついて行つた。女は氣を失つてゐる。彼は女を抱きあげて、ゆすぶり、だきしめ、大聲をあげた。

「さあ真弓子！ お前は本當の真弓子かい。それともロボットの真弓子かい。早くそれを言つて呉れ！」

その聲がきこえたのか、女はバツチリ眼を見開いた。彼女は保夫に抱かれてゐるのに氣がつくと、ヤツと保夫を二三間先へ突きとばした、保夫はそれに屈するどころか、喜びの聲をあげて、起上り小法師の

やうにすぐと立ち上つた。そして彼の顔には、意外にも、子供のやうな歡喜の色が浮んでゐた。

「本當の真弓子だ、僕に反抗するではないか。僕に反抗する人間を近頃始めて見付けたぞ。それは本當の真弓子、本當の人間なんだ、人造人間なら、こんなことはないんだ」と彼は涙をポロ／＼流しながら、向うへ逃げてゆく真弓子のあとを追つて馳け出して行つた。

だが、およそ機械なんでものはちよつとした原因で、同じものがまるつきり反動的な運動をするやうになるものだ。それは寫眞の陰畫が、反對に陽畫になるやうなもので、同じものから出發してまるで似もつかぬ反對なものが出来あがるのである。真弓子が、急に反抗するやうになつたのは、自動車に衝突した人造人間の真弓子のカラクリが一寸した刺戟で一時急に逆方向に動くやうになつたとは言へないことではないのである。さうだとすると、保夫は裏返しになつた人造人間を追ひかけて、喜んでゐるのに過ぎないことになる。やがて、それに氣がつく時も來よう。然しそのときこそ彼が本物の氣狂ひになつてしまふ時か？ (一九三二・四・二七)

七墓團のバトン

1

煙山の鐵つあんは、ギヤレージの二階に寢轉がつたまゝ、今しも人生を考へてゐるのだつた。

（これが人生といふものだつたら、人生といふものは、なんたら、退屈で、糞面白くもないものではないか。）

豪快な夏もいつの間にか、遠い經度の國へいつてしまつて、十月の聲をきくと、さすがにしんみりした秋が、水のやうに押しよせてきた。けふは一日、秋晴の紺青の空が、いつまでも硝子戸の向うに眺められて、兩國の橋桁をくぐるらしい小蒸汽船の警笛まで、睡むさうに聞えてくる午後だつた。

（退屈だけならまだいいが、うつかりしてゐると、飯まで喰へなくなる。むろん、彼女のところへは、ゆけなくなるだらうし……。かうしちや、ゐられねいが、いつてもどうにもならねえ。）

そこで煙山の鐵つあんは、足をグツと伸ばして、足の先に觸つた破れ襖を、踵でもつてトントントンと叩いてみた。

『といつて、どうにもならねえし、ねえ君、襖君。』彼は、襖に話しかけた。『ねえ、さうでせう。わが親愛なる破れ襖クン。君の土手ツ腹も、いさゝか破れすぎてゐるやうだが、どうにもならねえんだらう、君。では、どうにもならねえ同士で、一つ握手をしようではないか。』

鐵つあんは、亂暴にも、右足の指先で、襖の破れたペラ／＼する模様紙を、ギユツと挟むと、足首を上下にうちふつたのだつた。

『ベリ、ベリリ。』

と音がして、長さ十センチばかりのが、襖を離れて、鐵つあんの指先にのこつた。

『やあ君は、この鐵つあんの手に、手袋をのこしていつたではないか。』鐵つあんは、上機嫌だつた。『お、この手袋は、ドイツ製の紙手袋といふやつだな。ハテ、手袋と思ひきや、これは、そもじより、これなる某への、ラブ・レターでござつたか。どれどれ、ゆるゆる拜見いたさう。』

鐵つあんは、夏からまだ持ちこたへてゐる洗晒しの單衣の懷を押しひろげると、逞しい腕をニューツと出して、襖紙の破片を、ひねくりまはした。襖の模様のある表紙の裏にあたつて、もう一枚下貼りらしい反故が、同じ形に、ひきむしられて、重なつてゐた。その反故には、古めかしい筆蹟で、なにぞとかが認められてあるのだつた。それを、鐵つあんは、桃色のレター・ペーパーに認められた戀文を受取つたかのやうに芝居をしながら、さて聲たからかに讀みあげようとしたものの、

『ウーム。』

とばかりに、詰つてしまつた。

それは随分と古い年代を経たらしい紙質だつた。紙の色は、灰色とも、また黄色とも、ハッキリ見分けがつかなかつた。筆蹟は、元來淡墨を用ひたものらしく、蝙蝠の身體のやうな色をしてゐた。しかし、鐵つあんが呻つたのは、そのやうな考古學について、は無く、實にそこに書かれた謎のやうな字句の、幾行かについて、あつた。

『……既に一千年の有史を……犯したるものは團規により虐……財寶は無盡、吾が結社は……ものなり七墓……』

これ以外の文字は、残念ながら、紙片が切れてゐるために無かつたり、それからまた蟲害を蒙つて缺損してゐるのだつた。

『ウウン、これは穩かでない！』

鐵つあんは、クルツと身體を廻すと、その場に起きあがつた。

一體、この古くさい紙片は、どうしたものだらう。これは、講談の寫本から、ちぎりとつた一頁なのだらうか。それとも、なにか、もつと眞剣な意味のある文書なのだらうか。講談の寫本ならば、こんなものはザラにあるかも知れないが、それにしても『結社』といふ文字が、普通の講談本に出てくる栗山大膳とか難波軍記とかいふ種類のものとは、大分毛色が變つてゐるやうに考へられるのだつた。

『いや、ことによると、ことによるかも知れないぞ。これは、結社の秘密文書なのかも知れない。』

鐵つあんは、もつと深い意味を、この紙片の中から見付けようと思つて、硝子戸の方へ紙片を透かしてみたり、燐寸を擦つて、端の方を炙つてみたりしたのであるが、それ以上のことは、どうしても判らなかつた。それで鐵つあんは、再び、讀める文字を吟味してみたのだつた。

『『財寶は無盡』——寶物は藏の中でウウン呻つてゐる、てえんだな。時節がら、なんと勿體ない話ぢやねえか。だが、こつちの方には『犯したるものは團規により虐』——とあるが、虐とは虐殺のことかな。この方は、ちと嬉しくねえが、なにを犯せば、やられるのかしらん。規則も規則によつちや、守つても差支へないんだが……』

鐵つあんは、もう財寶無盡を貰ふつもりでゐるらしい口吻だつた。

『七墓——てなア、なんのことだらう。ひよつとすると『七、墓口は、この破れ襖の中にしまつていたよ。八、お前、よかつたら、そいつを出して使ひねえ。』といふ文句が、始めの『七墓』で切れちまつたのかも知れない。』

なにを思つたか鐵つあんは、ヒヨクリと立ちあがると、松葉散らしの安つばい模様をついた襖に、顔ををちかづけ、指先で方々をチヨイチヨイ壓してゐるが、急に目を輝かして、

『よオし！』

と一聲、大きく合點をすると、小机の抽斗を開けて、肥後守の研ぎすました白い刃をとり出すと、襖の表紙の繻き目のところをジワジワと刃の尖端で捲りはじめたのだつた。



このとき丁度、階下のギャレージはこの絶好の日和の散歩者を拾ひあげるために、自動車と運轉手は、すつかり出拂つて、あとは空虚な亞鉛がこひの車庫と、留守番の内儀さんと、そのギャア／＼泣く赤ん坊とだけが残つてゐるきりだつたので、鐵つあんは誰にも邪魔をせられず、その一間の祕密の仕事に酔ひしれることができたのだつた。

襖の表紙を、すつかり剥がしてしまふと、その下には一面に古新聞が貼りつめてあり、その新聞を補強するために、ところ／＼に短冊形に切つた日本紙で、堅横十文字に、目貼りがしてあつた。新聞は、今から三年ほど前のもので、金解禁問題などが論ぜられてあるのだつた。鐵つあんは、日本紙を、一枚一枚剥がして、集めてみた。さつき手に入れた謎の紙片のつゞきが、全部そこにあるだらうと見當をつけて、かうして剥がしてみたのだつたが、それは鐵つあんの期待を裏切つて、そこに集まつたのは、すつと紙質も丈夫で、年代も新しいものだつた。筆をつかつて書いてはあつたが、北海道における土地開墾願書だの、『溥陽の江のほとりにて』など、書きだしてある謠曲の寫本だつたりした。たゞ一枚、これこそ謎の片破れと思はれるポロ／＼の紙片があつた。鐵つあんは、それだけを大事に摘みあげて、首をひねつたのだつた。それにはどんなことが書いてあつたか。

『……玉栗……岸さわ……あつちうら……年九月……門書……』

この紙片の一端には、別な角度で、もう一つの小片が貼りつけられてあり、それを剥がしてみると、朱で畫線が引いてあり、あたかも地圖か系圖の一部のやうにも見えた。だが鐵つあんを驚かせたものは、

その上に、あり／＼と讀める八字だつた。

『仲秋。張玉鵬。七墓園。』

これだけが、鐵つあんの仕事に對する全部の收穫だつた。この收穫は少いやうでもありません。また甚だ多いやうにも思はれた。兎に角、鐵つあんは、丹念に、襖を元のやうに貼りつくるふのに、また一汗をかいた。そのあとで、きれぎれの文字を一つにあつめて、呻吟をつゞけるのだつた。

どうやら判るのは、七墓園といふ祕密結社があるらしいこと。財寶もあるが、刑罰も恐ろしいこと。九月であり、仲秋であるといふが、仲秋はむしろ十月ではないか、しかしとに角、秋のことなんだ、といふこと。張玉鵬といふのは、支那人くさい名前だといふこと。だが、判らないのは『玉栗』だの『岸さわ』『門書』の類ひで、どうにも見當のつきかねるのは『あつちうら』といふ五字だつた。ひよつとすると、この紙片は、別のものかも知れない。他の二つには『七墓』の二字があつて、たしかに繋つてゐるが、この『あつちうら』の紙片は、あまりに意味が聯絡とれなさすぎるのだつた。

『やッ、誰かあがつてくる。』

トントントンと梯子段に、空虚な音がした。鐵つあんは、泡を喰つて、謎の紙片を懷にひろひ込んだ。散らばつてゐる肥後守や、新聞紙を掻きよせると、尻の下へ敷いてしまつた。

『鐵つあん、あるかい。』女の聲だつた。

『へーい。』

『お安くないハガキが来てあるよ、ほら。』

さういつて、障子をがらりと開けると、赤ん坊を横抱きにした内儀さんが、一枚のハガキを彼の方に差出したのだつた。

『抛つとくんない。』鐵つあんは、尻の下がムツ痒くなつた。

『いつたわね、ほんとは、飛びついてきたんだらう。』と内儀さんは朗らかに野次ると、彼の膝の上にハガキを落として、歸つて行つた。だが障子を閉めるときに、鼻をクス／＼鳴らしながら、怪訝な顔を鐵つあんの方にむけていつた。『この室、なんだか、莫迦にいゝ匂ひが、するわね。』

鐵つあんは、ちらと襖の方に目をやると、ヤマト糊の壺を、太い股の間でグツと締つけた。

2

鐵つあんは、ハガキを見ると、ニヤリと笑つた。鉛筆を、嘗め／＼書いたらしく、滲んだ文字が、點と交つてゐた。文句は、次のやうに讀まれた。

『相談があるから、このハガキを見た夜、いつもの時刻に、是非きてちやうだい。汐路。』

鐵つあんは、頤をスルリと撫でると、立ちあがつて帯を解いた。

『今夜は飯を喰べませんから。それから、今夜は、歸つてこないかも知れませんがソノ……』

すこし顔を赤くしながら、鐵つあんは、外に出た。兩國橋の畔までくると、橋を渡らうか、どうしよ

りかと、思案をしてゐるやうだつたが、やがて心をきめたものと見え、電車を越え、橋の上をスタスタと、本所の方へ渡つていつた。國技館わきを抜けて、本所區職業紹介所と書いた看板のあがつてある建物の、ペンキの禿げた扉を押した。

『ねえ、何か、出てませんか。』

『さうさなア。』と紹介所のお役人は、鐵つあんの顔を見ながら考へてゐたが『うん、さうだ、さうだ。君は池の中へ飛びこめるかい。』

『池の中へ?』鐵つあんは、この奇問に目を丸くして、反問した『泳げるか、といふんですかい。』

『まア、さうだ。實は活動寫眞の臨時雇が一つあるんだが、ガツチリした體格の、池へ墜ちても溺れない人物を一人、といふんだが、君ゆくなら世話するぜ。』

『キネマのエキストラですか。やりやせう。何時に何處へゆくのです。』

『いま時計は、三時を一寸まはつたところだな。ぢや、かりしなさい。こゝに所と名前が書いてあるから、この紹介状をもつて直ぐに行つてみるんだ。』

さういつて主任は、紹介所の大きな判の捺してある封筒を渡した。うけとつて見ると、市外高田町×番地、川田逸郎殿と書いてあつた。

『なんです、この川田逸郎さんといふのは。』

『そのひとが東京トキー映画會社をやつてゐるんだ。——』

そこへ電話のベルがけたたましく鳴り響いたので、主任は話を切つて、電話機をとりあげた。

『やあ、東京トーキーの川田さんですか、あの男優はどうですか。……はア、それは結構でした。は、もしく、何ですか。……あ、女優の春日卯子ですね、今日まであるはずでしたが、急に差支へがおこつたといつて来まして。……え、そりや念を押しときました。明日は間違ひなく、お伺ひすると申してをりました。……何ですつて、はア、はア、もう一人女優をほしいと仰有るのですか。さア、どうも今日か明日かといふのではですね、どうぞごさいませうか。……はア、では失禮を……』

煙山の鐵つあんは、電話をきいてあるうちに憂鬱になつたのだつた。話によると、なんだか急ごしらへの撮影所らしい。それに、女優の話はしたが、自分がこれから、行かうといふところであるのに、一言もそれを傳へてくれないのが寂しかつた。でもエキストラのことであれば、それは贅澤といふものであらうか。

『ヤア、何を考へてゐるね。』さういつて主任は、鐵つあんの顔色を早くも察したのだつた。『時節がら、不平はいはんで、なんでもいいから、ぶつかつて見給へ。ひよつとすると、好運が向いてくるかも知れないからね。女優さんと共演するだけでも、儂なら、高く買ふよ。はッはッはッ。』

『ありがたう、主任さん。』鐵つあんは、嬉しさうに聲をあげて、大時代に主任と握手をすると、扉を押して、外へ出たのだつた。

それから、約四十分ほど経つたのちのこと、鐵つあんは通稱雜司ヶ谷といはれる廣大な森林地帯を彷彿してゐた。どこを見廻しても一向、撮影所らしいところが見當らないのだつた。人に尋ねてみようと

も、道傍には、いやに背の高い樹が空を蔽つて聳え、時折り、一陣の風と、ともに、黄色くなつた大きな葉がカラカラと鳴りつゝ、いやにじめ／＼してゐる黝土の上に落ちてくるばかりで、行人のある氣配は、なかく／＼に、しなかつた。

鐵つあんは、すこしザリザリして來る心をどうにか抑へつけたいと思つて、傍の雜木林の中に入つていつた。それは柏の樹ばかりが生えてゐる林だつた。一とあし歩むごとに、積つた落葉が、靴の先にあつて、カサコソと音をたてた。

(こんな林の中で栗をひろつたがなア。)  
そんなことを考へてゐた。

林の中をずつと奥の方にすすむと、鐵條網でグルリと圍つた垣根があつた。近所の悪太郎が潜入したのでもあらうか、その一本の椈が横に仆れてゐた。彼は無神経に、その上を踏み越えて、なほもその内へ入つて行つた。土地は、さらに濕つぽくなつておぼほことかいふ丸い葉をもつた草が、やたらに繁茂してをり、すこし誇張していふならば、一步踏みだすたびに、地面は、屍の上を歩きでもしたかのやうに、グツと凹むのだつた。その先は土地が丘のやうに高くなり、爪先あがりに、のぼつてみると果然、その真下にちよつと廣々した池があり、池の畔までは、軟い芝草が生えてゐた。鐵つあんは、そこに跼んで池の面を、みるともなしに見下ろしたのだつた。

『グウ、グウ、グウグウ。』  
怪しげな鳴聲がした。  
なにが鳴いたんだらう。

『グウ／＼、グウ、グウ。』

水面がチカ／＼と震へた。小さな波紋が、すこしばかり擴がつては消える。

『呀ッ！』

鐵つあんは、思はず聲をあげて、スツ／＼と立ちあがつた。彼は見たのだ。水面のあちらこちらに、とき／＼チカ／＼と動く波紋は、墓の眼瞼がピク／＼と痙攣するやうに開閉することに起るのだつた。いや、居るわ、居るわ、その小さな波紋の下に、かくれて幾百幾千匹といふ墓が、グウ／＼と奇聲を擧げながら、蠢き、ひしめきあつてゐるのだつた。墓同士は、あちこちで、ひしめき合ひ、相手の背中によぢのぼつては、諸に水底へ姿をかくしたりなどしてゐた。注意してみると、墓は、なにも池の中にはかり居るのではなく、池の畔にも、その傾斜面にも、いやそれどころではない、吾が鐵つあんの足許にも、石つ塊かなんぞのやうに、身動きもしないでゐるのだつた。

『こん畜生！』

194 さういつて、鐵つあんは、靴の先で、一匹の墓を、ポーンと蹴とばした。墓はグツといふやうな聲をあげて、二間ほどさきでクルリと宙返りをうつと、醜穢なる黄色い腹を見せて、そのまま池の中へ眞逆

様に墜ちていつた。

『ドポーン』

鈍い水音が、夕暮の中空に、うつろな響きをつたへた。

鐵つあんは、もう一匹の墓の傍によると、こいつも、ポーンと、蹴とばした。それからまた、もう一匹の墓を探しあてると、エイヤツと懸け聲をして、ポーンと蹴あげた。墓は、およそ絶對無抵抗に構へて、いと素直に蹴とばされていつた。更に、もう一匹の墓を、足蹴にしようと思つて、足をヒヨイとあげかけたのであるが、なにを思つたのか、そのまゝ足を靜かに地上に下したのだつた。

(眞逆、眞逆、あの『七墓團』といふのは、こいつらのことぢやあるまいな。ウフ、おれも、いやに氣が弱くなつたぜ。)

『糞ッ！』と一聲。際どいところで、災難をのがれたと思つたその墓は、イヤといふほど横腹を蹴とばされて一米も遠方の水面へボチャーンと墜ちた。

『オイオイ、なにをしとるかッ』

いきなり、池の向うに人間が現はれた。見ると、頭を短く刈つた、肥満をした、五十近い大男だつた。そして眞白の診察着のやうなものを着てゐた。彼は、池の向う岸に立ち、こちらを睨みつけ、頭の上に兩腕をブン／＼振つてみせた。

鐵つあんは、呆氣にとられて、無言のまゝ、暫らくは對岸の肥満漢の怒號を、ヂツと聞いてゐなければ